

ふるさと

池田亀夫名誉教授 追悼記念特集





目次

ごあいさつ	菅野卓郎	7
あゆみ	矢部裕	9
特集 池田亀夫名誉教授をしのんで		
池田亀夫名誉教授年譜		24
追悼の辞	矢部裕	25
弔 辞	菅野卓郎	27
教室葬・式次第		29
池田名誉教授のおもいで	浅葉一	39
	田中雄	40
	岡田衛	41
	森文生	43
	鷺澄夫	45
	今井望	46
	小野里一郎	49
	小林進	51
	田久雅	52
	花岡弥	53
	平林英	55
	山根宏	57

近況報告



真崎祐介	奥平八郎	山崎正一	田辺碩夫	山根宏一	阿久津寿一	河野通隆	田辺雅久	奥村守彦	大谷孝雄	金成俊男	岡田衛生	田中一雄	金井司郎	上牧恭一	井上雅夫	三笠元彦	新名正由	小林慶二	有馬亨	岩田清二	土方貞久
(42)	(40)	(40)	(40)	(40)	(特)	(特)	(37)	(特)	(32)	(28)	(26)	(24)	(24)	(23)	(20)	(44)	(44)	(43)	(42)	(41)	(41)
91	90	90	89	87	86	85	84	83	83	82	81	81	80	79	78	75	71	67	64	63	60

関連大学・施設の紹介

藤田保健衛生大学	吉沢英造	(41)	96
防衛医科大学	新名正由	(44)	100
国立小児病院	村上寶久	(34)	102
浜松リハビリテーションセンター	月村泰治	(35)	104
川崎市立川崎病院	赤坂勁二郎	(37)	106
新装なった都立大久保病院	三笠元彦	(44)	108
		大谷俊郎	(59)	

ふるさとによせて

地球的文化の構造と環境	左奈田幸夫	(13)	111
卒業50年と思う	永井隆	(22)	115
宝 物	田中一雄	(24)	117
バレエダンサーのあしについて思うこと	小川正三	(29)	119
リリーフ院長の記	藤原由利夫(専3)	(3)	122
近頃の夢	森雅文	(30)	124
港区慶應整形外科の会	奥村守彦(特)	(3)	125
日中・脊椎・脊髄損傷学術交流の経緯	大谷清	(37)	127
ポルシェ911カレラ2	田辺雅久	(37)	129

西郷恵一郎	(42)	92
家田浩夫	(49)	93
宮川準	(53)	95

医局の思い出と開業して20年

頸椎損傷実験のころ

五十代を駆ける

これエ本にしようよウ

歩んできた道をふりかえって

教室・研究班の現況

みみずのたわごと

助教教授就任に当って

研究副主任として考えること

専任講師就任にあたって

教室幹事の一年半

教室幹事就任にあたり

専任講師就任にあたって

研修医担当主任(卒訓)就任にあたって

骨・軟部腫瘍班の研究の現状と将来

膝関節研究班の今昔

脊椎・脊髄班近況報告

足の外科班

股関節班の現況

最近の肩関節研究の動向

手の外科班の現状

スポーツクリニクスの現況と展望

阿久津 寿一(特) 131

津布久 雅男(43) 133

津布久 雅男(43) 135

片田 重彦(51) 137

梶原 敏夫(54) 139

内西 兼一郎(特) 141

花岡 英弥(37) 143

藤村 祥一(47) 144

鈴木 信正(48) 145

井口 傑(49) 146

堀内 行雄(52) 149

堀内 行雄(52) 151

松本 秀男(57) 153

花岡 英弥(37) 155

富士川 恭輔(43) 156

藤村 祥一(47) 160

井口 傑(49) 161

坂巻 豊教(50) 163

小川 清久(50) 165

堀内 行雄(52) 167

竹田 毅(47) 169

岩原賞を受賞して
前田賞を受賞して

.....

白石建 (56)
高山真一 (57)
市川亨 (61)

留学だより

.....

白石建 (56)
浦部久 (57)
柳本忠繁 (59)
仲尾保志 (63)

医局秘書

.....

189

新入局者紹介

.....

190

教室だより

.....

208

編集後記

.....

212



いあこせし

菅野 卓郎

近年日整会をはじめ各種学会、研究会において教室員のみならず関連病院、関連大学の同窓会員が各分野において活躍されている姿が目立ち大変嬉しく思っております。それは矢部教授のご努力により教室内外の力が充実してきた結果であると思っております。教室の発展は同窓会員がそれぞれの立場で、その形式は異なりましようが着実な業績を積みあげてゆくことにあると思えます。今後とも諸兄のご健闘を期待いたします。

本年四月矢部教授が平成八年度の日整会総会会長に内定いたしました。同窓会員一同これ以上の慶びはありません。これは矢部教授個人の今日まで残された赫々たる業績、とくに副理事長をはじめとする日整会における多大の功績によることはいまでもありませんが、同時に創設以来諸先輩の築いてこられた慶應整形外科の伝統とかつまた今日広く活躍されている皆様の方によるものであると思えます。この上は慶應整形の名譽にかけて学会の成功を期したいと思います。

話題は変わりますが、昨年度の名簿を見ますと現在の

同窓会会員数は七〇〇人に達しようとしております。したがって大変申し訳ないことですが、私自身存じあげない方々が多勢おられます。私が教室におりましたころは現医局員、先輩を合わせてもせいぜい数十人でありましたので、同窓会全員をよく存じておりました。現在は大変な大所帯ですのでなかなか全員が一堂に会することも難しく、同じ同窓会員といっても面識さえないことがあるという現状であります。

今回「ふるさと」編集係と相談して、平素お会いできない開業医、勤務医の方々の近況、また関連大学の現状、教室内外の人事、ニュースなどのほか、すべての会員の自由投稿もできるように企画いたしました。これが少しでも会員相互の交流に役立てばと思えます。若い方々はどうか先輩のなかにどんどん入って知り合う機会をつくっていただきたいと思えます。

去る七月三日、突然池田名誉教授が亡くなりました。同窓会一同にとって大変悲しく残念なことでした。そこで今回の「ふるさと」を今まで企画中の内容のほかに池田教授追悼号をかねることいたしました、できる範囲で追悼の言葉をお願いいたしました。

池田教授は前田、岩原尚教授のあとをうけつぎ、慶應整形外科の発展に寄与され、その功績は大でありました。

残念なことに十分にその成果を挙げることができず途中で倒れられたのは誠に申し訳ありません。新しい医局員のなかには直接先生をご存じない方々もおられるかと思いますが、一同心から先生のご冥福をお祈りしたいと思います。

最後に、今回の「ふるさと」に原稿をお寄せいただいた先生方、また企画、編集、校正など発刊にご苦労いただいた教室の諸先生方に感謝いたします。



あゆみ

矢部 裕 (36)

ここ二年間の教室のあゆみを綴ります。

和と伝統と研究を重視して、更にこの二年間教室の舵取りを行ってまいりました。日和はよろしく、船は蛇行することもなく、真っ直ぐに進む航海を続けることができました。同窓の皆々様の御指導、御支援のお陰であります。しかしそれなりに情性に流され、ぬるま湯に浸ってきた感もあります。もっとオリジナリティのあるベシックな研究があってほしい。もっと国際的であってほしい。欧文論文の数もほしい。私の任期、あと残りは四年半、バトンタッチを行うべき船長候補者は多くあります。そして教室員の皆様が更に大きく伸びてほしいと願っております。

一、還暦

平成四年六月九日に私の暦が還りました。同年六月二十日の医局旅行で、赤いチョッキと赤い帽子をかぶせられました。赤いゴルフウェアもいただきました。教室の皆様が心から祝ってくれている。私を思いやってくれて

いることを感じ、ジンと来るものがありました。

還暦を迎えて、さすがに肉体は萎を感じる様になりました。ゴルフの飛距離も落ちました。日常の労れの回復が遅くなり、新しいことへの挑戦がおっくうになってまいりました。しかしながら仕事は山積し、土・日も殆どなく、毎夜帰るのは埼京線の快速の最終便の生活が続いています。

結婚式の祝辞を最近変えました。就任以来六年間は「思いやり」と「思い上りをなくすこと」と「臨床医に加えて学者としての大成をも期待すること」でありましたが、最近はこちらが若い教室員の心に浸透して来た感じもありまして、「ゆとりの心」を述べる様になりました。それは自分にもいい聞かせる意味を含んでおります。経済的なゆとり、時間的なゆとり、心のゆとり、ゆとりといっても色々あります。私の場合、心のゆとりであり、仕事や問題が残っている場合感じることが出来ません。仕事を終え、問題を解決し、時間のゆとりを作る。そのためには、更なる努力が必要となるわけですが、また時間のゆとりを作る様心掛ける必要があるわけです。そして心のゆとりを持つことが、更に仕事、家庭に良い循環をもたらすこととなります。

私自身大学院二年生の夏休み（昭和三十四年）に田辺

雅久先生と北海道旅行をいたしました。整形外科へ入室後、それ以外夏休みをとった記憶はありません。今年の夏休みは八月十二、十三、十四、十五日にとることを予め公開し、臨床整形外科の八月号のあとがきでも宣伝しました。槍が降ろうが雨が降ろうがとると、これを目標に仕事の予定を立てたわけでありませう。小学生が指折り数えて夏休みを待つ様な期待がありました。箱根で二泊三日を過ごしたわけですが、この間のワイフとの時間が非常に長く、貴重なものに感じられ、乾き切った心に潤いが生まれました。夏休みをとる、ゆとりの心を持つことも大変なことでありますが、長い人生にとってのオアシスは必要なことでありませう。

島中卓士(47)先生を嚆矢として、泉田良一(54)、阿部均(56)、鷺谷一郎(56)、木城利光(58)、大谷俊郎(59)、飛弾進(59)、川久保誠(59)、塩田匡宣(61)、上右衛門(64)、桜田卓也(65)、小林一(66)、王東(66)、月村泰規(67)、宇井通雅(68)、田辺巖(68)、平林尚(69)、河野克己(70)、剣持太郎(71)、鈴木康之(71)、阿久津政司(72)、山根誓二(72)、矢部寛樹(72)君まで計二十四名と教室も二世の時代になりつつあります。私は36回、私の息子は72回、丁度倍となります。七十年にわたる教室の歴史にも色々な変遷がありました。過去のことは人々の記憶から遠ざ

かり、色あせて、忘れられて参ります。しかしながら先人が努力して築いてこられたこのすばらしい教室、すばらしいが故にこれだけ多くの二世が入ってくるわけですから、このすばらしい教室のあゆみ、後世に残しておく義務があります。こう感じるのも還暦を過ぎたせいかも知れません。

二、同窓人事

① 教室人事

平成四年四月済生会若草病院院長として転出した横井正博講師のあと堀内行雄君が講師となりました。平成五年三月一日付で内西兼一郎助教が宮内庁皇太后侍医として転出し、四月一日付で花岡英弥講師が助教となりました。花岡講師のあとは十月一日付で鈴木信正君が講師となります。教室幹事(医局長)は藤村祥一講師のあと井口傑講師、続いて堀内行雄講師がとめ、現在にいたっています。四月一日付で、客員教授に月村泰治先生、大谷清先生、内西兼一郎先生をいただきました。平成五年十月一日現在、教室のスタッフは次の通りとなります。

教授 矢部 裕(教室主任、診療部長)

助教授 花岡英弥(診療副部長)

富士川恭輔（教務委員）

講師

竹田 毅（スポクリ副部長）

藤村祥一（研究副主任）

鈴木信正

井口 傑（学会担当、会計）

坂巻豊教（外来医長）

小川清久（保険医長）

堀内行雄（教室幹事）

助手 戸山芳昭（病棟医長、副教室幹事）

その他スタッフではありませんが松本秀男君に研修医担当主任、朝妻孝仁君に病棟医長補佐をお願いしました。慶應整形丸の航海に欠かすことのできない乗組員です。

平成四年度の入室者は十四名、五年度は十八名でありました。

月ヶ瀬リハビリテーションセンターの斉藤正也教授が本年三月三十一日に退職し、慶應義塾大学名誉教授になりました。この後任に岩田清二先生を慶應義塾大学教授兼月ヶ瀬リハビリテーションセンター所長として迎えることが出来ました。斉藤正也先生には、昭和五十二年慶應義塾大学月ヶ瀬リハビリテーションセンター開設以来十六年余り、初代所長として勤められ、種々多難な時期に見事にセンターを運営されました。また大学付属機

関として恥かしくない学問的業績を上げ、かつ整形外科教室、リハビリテーション科に対し、側面的なバックアップをいただきました。適切な種々のアドバイス、スポーツクリニック開設や各種研究費の支援等厚く御礼申し上げます。無事の御退職と名誉教授御就任を祝福するとともに、御自愛下さる様御祈り申し上げます。また岩田先生がんばって下さい。

② 関連大学、関連病院

平成四年四月一日付で、杏林大学河路渡教授の跡を石井良章教授、防衛医大下村裕教授のあとを新名正由助教授が主任教授となりました。まことにおめでたいことであります。

これらは決して平坦な道ではありませんでした。両教授の努力とオール慶應そして同門の陰ながらの支援によるものと考えます。慶應という誇りは内に秘めて、自らの大学のために滅私奉公する根本姿勢により実ったことと考えます。杏林では河路教授、防衛では尾形学校長の暖かい励ましをいただきました。杏林には里見和彦助教授、防衛には根本孝一講師、山田治基講師、小林龍生、塩田匡宣、伊崎寿之君等錚錚たる人物を送りました。助教授となった山岸正明先生おめでとうございます。益々の御発展を期待しております。

藤田保健衛生大学には分院のばんだね病院に高山真一郎講師、本院に鈴木克二君を送りました。共に手の外科を専門とし、自ら手を汚し、泥まみれになれる人です。

平成三年十月一日付で齊藤聖二君を講師として東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター柏崎教授の下に送ってから二年経ちます。その後更に齊藤君の下に豊田敬、桃原茂樹君を送りました。生化学を主とする基礎的研究の成果を期待しております。

関連病院では国立塩原温泉病院の富田勸先生が院長に、宇都宮済生会病院の浜野恭之先生、稲城市立病院の磯田功司先生、魚沼病院の村山信行先生、永寿病院の崎原宏先生が副院長に昇格しました。長年努められた御努力の結果であり、おめでとうございます。

都立大久保病院が平成五年七月一日に新装なって開設されました。健康ハイジアと病院とのTWIN・BUILDINGであり、まことにすばらしい病院に生れ変わりました。都立大久保病院はかつて野崎寛三先生、伊藤原先生、寺村正先生、小林慶二先生、三笠元彦先生が部長を勤められた教室にとって伝統ある病院であります。私が慶應へ戻った昭和六十二年に改築の為の閉鎖が行なわれ、三笠先生と石橋徹君が都立大塚病院へ移りました。その後都と色々ありましたが、雌伏六年、伝統を守りえたの

は御二人のガマンによるものと考えます。三笠先生に代えて、吉峰史博、大谷俊郎、岩本靖彦君を送りえました。

関連病院からの増員希望は平成五年七月一日現在で二十二名ありましたが、そのうち十二名を満了することが出来ました。なお十名は御要望に答え切れず申訳なく思っております。しかし、関連大学二校、新設病院一院を含めてこれだけの人を送りえたのは、藤村医局長の洞察力とこれを受け継いだ井口、堀内医局長の手腕によるものです。入室者は退室者を上廻っておりますので、少し長い目で見ただければ、必ず御要望に答えて参ります。

③ 留学

教室が公式に認める留学には条件があります。先ず主論文を投稿していること、教室全体と各診療班のバランスを考えて同時期に大きな班で二名、小さな班では一名まで、選ばれるに相応しい資質と業績があり、銃後の守りのあることを考えられる人、行先はそれなりの果実が期待される所、そしてスタッフミーティング、教室協議会で検討して決定します。

平成三、四年には白石建、小川清久、高山真一郎、大谷俊郎、仲尾保志君、平成五年には柳本繁、福井康之、渡辺理君が留学し、いずれも成果を上げております。行先は、英国、スカンジナビア、ニュージーランド、カナ

ダ、米国、スイス等であり、益々国際的に発展する必要のある教室の将来を考え、出来る限り推奨しております。

三、研究

① 主論文研究制度の見直し

教室の研究制度については、昭和六十二年度に制定し、その詳細はふるさと前号で紹介致しました。即ち主論文研究についてはあくまでも本人の希望であり、教室の強制ではありません。そして応募側（レジデント）と募集側（インストラクター）とのお見合い制度であります。

関連病院の先生を含めインストラクターが出したテーマについて、レジデント三年生を集めてハウプト説明会を開きます。そしてレジデントは自分に合ったテーマに応募します。しかしながらレジデント三年生では、テーマの良し悪しを見抜く能力はあまりない様です。自分が将来入りたい診療班を考え、それに合ったテーマを選ぶ傾向があります。次いで指導者の面倒見の良し悪しによります。困難な基礎的なテーマは敬遠されるようです。勿論インストラクター側にもレジデントを選ぶ権利があります。この為、毎年かなりの偏りが生じ、第三希望までとっても調整しきれないことがあります。本年度からはお見合い制度は廃止し、テーマを出したインストラクタ

ーによる会議で検討を加え、レジデント本人の能力と対比して、教室でテーマを授与する方式の可能性も考えています。この方式では本人の希望は二の次となります。

しかしながら研究班と診療班がドッキングすることによる弊害は少なく、レジデントの六年間は広く整形外科の臨床研修を行なうことが出来ます。七年目には自分の好む診療班へ研究テーマと関係なく自由に入れるわけです。

私は病理を含めた形態学、生化学、生体力学を基本的な研究手段と考え、研究施設を充実し、研究体制を備えて来ました。特に生体力学に関しては、理工学部の六馬信之君を迎え、C P M研究費により大型研究機器を整備致しました。コンピュータ導入によりかなりのことが出来ます。更に小川清久講師、中村俊康君等の努力で、解剖学教室の協力をえて新鮮な御遺体をかなりの数使えるようになりました。また生化学に関しても防衛医大の newName教授や東京女子医大膠原病リウマチ痛風センター斎藤講師の御指導により、人事の交流を深めた研究も出来る様になりました。しかしながら各研究診療班が身体局所に別れていることもあって、Bone and Jointに関する基礎的なテーマは少ない様に思います。そしてレジデントも基礎的なテーマは敬遠するわけです。私はここ二、三年ほど、各クラスにおけるエリートには、大学院学生

と同じ方法で基礎的なテーマを教室の方から与え、基礎的研究の充実をはかっております。

② 大学院制度

既に大学院学生が入って四年になります。卒業直後に応募するのではなく、研修医二年を終えた所で募集しております。大学院学生には単に学位を取得する目的ではなく、研究者として研究の基礎的技術を修得してもらい、勿論自身かなり困難な基礎的研究を遂行するとともに、将来はインストラクターとしてその技術を教室員に還元すべく指導をしてもらいたいと説明して募集しました。既に五名の大学院生が入りました。研究技術の修得のためには、他施設へ一年は派遣致します。

第一期生中村俊康君は手関節特にTFCCのBiomechanicsの研究のため、慶應の理工学部へ、第二期生の井幡宏君は培養神経細胞とNGFの研究のため、国立精神神経研究所の生化学部門へ、第三期生の楊玄壮君は骨軟部腫瘍における染色体異常の解明のため国立ガンセンターへそれぞれ出張しております。既に中村君は教室へ帰りましたが、その成果は大きかった様です。やがてすぐれた論文もまとまるはずで。第四期生は古谷晋君と大津寄雄志君です。TWYマウスにおける異常石灰化機構とDNA異常の解明を期待しておりますが、どうなる

でしょうか。

③ 研究費

かつて藤田学園時代には年間数百万円の研究費を集めるのに苦労し、民間病院への出張に関する協力病院制度を作り、大学内各教室がガラス張り協力病院から研究費の寄付(年間常勤医師六〇万、パートタイム医師週一日一〇万)をいただきました。慶應の場合、ランニングコストだけで年間三、〇〇〇万かかります。脊椎や膝や手の外科班等大きな班では、班ごとに各種研究費を獲得する能力もあり、関連病院を含めた治験、科研究等各種団体からの寄付も多く、さすが慶應と考えておりました。しかしながら、治験に加えて薬品メーカーの対応が本年度から違って参りました。治験は委託による収益事業であり、その目的に使用した経費以外は利潤となり、二五%の課税があります。そのため、製薬会社も余分な治験研究費を上乗せしなくなりました。更に医療用医薬品公正取引規約の実施により、製薬メーカーによる一般寄付、MRによるスライド、文献、コピーサービス、労力提供がなくなりました。このため、本年度の研究費、医局費はかなりきびしいものとなりました。

藤村講師(研究担当副主任)、井口講師(会計)を中心として、何回かスタッフミーティング、協議会等で検

討し、医局費の値上と研究費の一〇%の個人徴集を実施することにいたしました。後者は研究費の節減につながります。また、科研費をはじめとする各種研究助成に積極的に応募し薬品メーカーからの奨学寄付の獲得にも積極的に働きかける様にいたしました。幸いに損保協会からのCPM及び頸椎外傷MRIに関する依託研究、京セラからのKKS人工股関節に関する研究助成は続いておりますが、極めて盛んとなった研究の費用すべてを捻出出来るかどうか気掛りです。

四、スポーツクリニック

平成三年九月一日、スポーツクリニック外来部門が開設され、順調な歩みが続けております。私は名ばかりの部長であり、副部長である竹田毅講師を中心として増本項君が専念し、膝、脊椎、肩、手肘、足の専門家がそれぞれ特殊外来的診療を行っています。整形以外、内科、小児科、リハビリ科、老年科、脳外科、産婦人科に加えて、日吉のスポーツ医学研究センターからの強い支援もあります。その特徴は、スポーツ医学に関連する各診療科、各部門がスポーツ医学を通して連係して診療に当ることにあります。

御陰様で実績も上り、日本相撲協会、巨人軍、ヤクル

ト球団を始めとし、各種実業団、アマチームと契約を結び、スポーツ選手の健康管理、外傷・障害の予防、治療に当っております。本年十月一日には、スポーツクリニックフィットネス部門の開設が予定されており、目下六号棟地下一階及び別館二階で工事中です。フィットネス部門にはフィットネスルームとコンディショニングルームがあり、前者では主に内科系の検査、後者では主に外科学系によるトレーニングの教育、指導を中心にコンディショニング調整を行うこととなります。今後スポーツマンのみならず、正常人、高令者、病弱者を含めて、スポーツによる健康維持、増進にも力を注ぐ予定です。

幾多の屈折を経た夢の実現であります。日本のスポーツ医学のリーダーとなってほしい念願、いや使命があらましよう。

五、日本整形外科学会

① 名誉会員、学会功労賞

平成四年春の総会では大内正夫先生と菅野卓郎先生が名誉会員になられ、野町昭三郎先生と浅葉義一先生が学会功労賞を受賞されました。平成五年春の総会では高瀬佳久先生と山内健嗣先生が名誉会員になられ、井上雅夫先生と小山明先生が学会功労賞を受賞されました。心か

ら御祝い申し上げます。慶應同門の多さが印象的でした。かつては教授退職者のみが名誉会員となっていたのですが、先生方の御業績、日整会への貢献の高さを考えると当然のことです。大内先生はかつて東京女子医専の教授をやっておられました。遅すぎた位と考えます。

② 日整会理事會

平成三年の日整会春の総会のあと、小野村新理事長から副理事長への就任依頼を受け、以来二年間勤めてまいりました。庶務會計担当、認定医試験委員会委員長も兼ねたわけです。

認定医試験委員会委員長の責任は重く、気を使います。試験委員会は年数回開催されますが、夏休み中に二日間カンズメとなり問題のチェックを行ないます。私自身更に全問題を何回かチェックするわけですが、骨腫瘍や基礎的な問題では *Compass* の知識がないと疑問に思っても手直しする確信は持てません。花岡助教授をはじめとするスタッフの先生に内々で教えていただきました。昨年未私の部屋に泥棒が入り、一〇万円余りやられました。真先に確認したのは或る所に隠しておいた問題のコピーでした。荒らされた形跡のないことをみてはっといたしました。これだけの思いと労力を費してもミスは生じません。ミスがなくて当り前、あればケチヨンにやられます。

幸いに大きなミスもなく、二年間無事にやり終えました。

庶務會計も大変でした。一五年間におよぶ年会費の据え置きと日整会の活動増強により、平成二年度から一般会計は赤字に転じ、平成四年度では学会活動充実基金を繰り入れてどうにか凌ぎました。このままでは平成六年度からは予算が組めなくなりそうです。私が財務担当である間は何とか値上げを避けたいと思ったのですが、どうにもならず、小野村理事長、八百板理事、日整会樽井局長、會計担当の長谷川さんと相談し、理事会で検討し、平成四年秋の評議員役員懇談会で年会費値上げを示唆しました。日整会広報室ニュースでもその実態を報告し、平成五年の春の評議員会、総会で四千円の値上げを可決していただきました。平成六年度から年会費一万四千円となります。

四年間、二期にわたって無事理事を勤めることが出来たのも同門、そして教室の皆様方からの暖かい御支援があったためと考えております。厚く御礼申し上げます。

平成五年度からは、今井望教授、村上宝久先生が監事として、理事会の御目付役をすることになりました。御苦勞様でございます。私ははっとするとともに肩の荷が1/3位軽くなった気が致します。

③ 日整会学術集會會長

平成五年春の評議員會、總會で、日整会学術集會次々期會長（第69回會長）、つまり平成八年春の学術集會會長予定者として承認されました。

思い起こせば、平成元年の理事選挙が最大の山でした。ふるさと前号でもふれましたが、大変な激戦の中を御陰様で上位で当選することができたわけです。そして四年間、私なりに誠実に理事を努めて参りました。平成三年の評議員會では東北大学と東京医科歯科大学の決戦がありました。その頃平成四年春での立候補をめぐって関係者の話し合いがありました。そして私自身第69回（平成八年）学術集會會長への立候補を平成五年春に行なうことをこの時決意したわけです。副理事長を勤めてきたことも関係してか、特に対抗馬はない感じでした。しかし念には念をとということで、平成四年秋には教室のスタッフの先生方からの自発的申し入れもあり、また私の方からも御願ひして全国の大学教授への推薦を分担していただきました。行先では特に反論もなく円滑に受け入れてもらえた様です。かえって御馳走になったスタッフもいた様でした。會長立候補への五名の推薦者には、室田、山室、杉岡、黒川、井形教授になっていただきました。本年四月七日の評議員會、總會で決り、翌四月八日の同

窓会で御報告致しました。

私よりちょっと年上、或いは同年代の旧帝大の教授が既に會長となった或いは會長決定者であった幸運に恵まれたこともございます。しかし慶應の大きさ、伝統を再認識するとともに同門、教室の先生方の御支援によるものと感謝し、改めて責任の重さを噛みしめております。外国のまね事でない、日本のオリジナリテイのある研究を引き出す様な学会にしたいと考えております。平成八年四月十一、十二、十三、十四日、泉田先生がやられた新高輪プリンスホテルを予定しております。

よろしく御支援、御指導のほどお願い申し上げます。

六、病院長

平成三年十月に慶應義塾大学病院長になり、一期二年の任期が過ぎます。本年七月の教授會で再指名を受け、更に二年続投することになります。

この二年間、細田執行部の一員として、神崎副院長、猿田副院長、金田事務局長、福岡看護部長とともに、植村常任理事の御指導を得て、病院長を務めさせていただきました。

先ずは、新棟開設後、最後に取り残された跡室の整備でした。薬剤部の移転と改修、七号棟四、五階（産科病

棟、NICU、分娩室等)の改修、リナックの増設、改修であります。いずれも億単位の改修であり、莫大な費用のため、延び延びにされて来た所です。平成三年度の病院収支は比較的良好だったことから、三田本塾に御願いして、平成三年から五年にかけて実施させていただきました。その他、漢方クリニック、スポーツクリニック、フィットネス部門の開設も計画し、実施させていただきました。

平成四年四月に診療報酬の改訂があり、外来分、つまり初・再診料の減点、総合病院複数科診察料および慢性疾患指導料が廃止となり、代りに入院分、つまり医学管理料、基準看護料、手術点数が上りました。平成四年六月頃、石川前塾長が病院収支を心配され、何回か尋ねられました。八月頃迄待っていたら、四、五、六月分の保険収入を確認したわけです。外来収入は前年度に比して患者数の伸びにもかかわらず落ちましたが、入院分ではこれを上廻る大幅な伸びがあり、大丈夫ですと答えました。しかしながら十一月頃、上半期の収支決算が上ってきて驚きました。収入は前年度に比して大幅な伸びを示したものの、支出がこれを上廻って伸びていたのです。信じられませんでした。結局平成四年度の病院収支決算は約五億円の赤字となりました。支出の伸びは人件費に

加えて、直接医療費、特に薬剤と医療材料費が大きかったわけです。このことは予測しえませんでした。

平成四年三月から病院財政検討委員会を作り、原因の究明と対応策を検討しました。薬剤の支出増は建値制による薬価差益が少なくなったこと(購入価格の値上り)、薬剤の購入量の増、特に抗癌剤、インターフェロン、血液製剤等の高価薬の増が原因です。検査や手術増に伴う医療材料費の伸びもあります。外来の初再診料の減を補うため、先生方が収入を上げるべく特に高度医療を行って頑張った結果の支出増と考えられました。入院ベッド数一、〇七一床に対し、外来患者一日四、〇〇〇名を超える、つまり外来患者数が多いだけに支出を伴わない初再診料等の減は極めて大きく響いたといえるわけです。対応としては先ずこのことを各種連絡会議をして医学部病院ニュース等で正しく伝え、医師(保険医長)、ナース等との説明会を持ち、更に各診療科、コメディカル、つまり全職域から支出減、収入増に向けてのアンケートを依頼しました。医師からのアンケートだけで、50項目にも及ぶ具体的対応策をいただきました。このお陰で事務部門も極めて積極的となり、親方日の丸的であった職員のコスト意識も向上しました。

これらのことは、すべて、私が整形の教室で整形の先

生方と先ず相談し、整形の外來や病棟でパイロットスタデイを行い、輪を病院全体に広げて行きました。それが私にとってどれほど力強かったことでしょうか。そして多忙な教室の先生方が教室以外のことではこれほどまで協力して下さることに頭が下りました。

ともかくやれることはすぐやるうということ、既に10項目は実施に移しています。各科の先生方もコメディカルの人達も説明すれば納得され、協力して下さいます。高度医療を行なえば行なうほど採算が合わない構造となっている保険医療制度に腹が立ちます。何としても病院の消費収支だけは平衡にしたいと考え、目下精力を傾注しています。同窓の先生方の病院或いは診療所ではないかがでしょうか。良い策があれば教えていただきたいと思ひます。

幸いなことに、病院の表通り、外苑東通りに接して、正門から東門まで(食研跡地から元学生ホール跡地まで)、長大な仮稱信濃町Kオフィスビルの工事が始まりました。病院事業が不況であれば貸ビル事業というわけで、第一生命との共同ビルとなります。工事費を差し引いた60年間の借地権約一〇〇億円の利息と年間の地代賃貸料と合わせ、数億円が入って来る計算になります。これらは医学部、病院の財政の支援となります。しかしきびしい世

の中となったものです。

特定機能病院への手上げが迫っております。厚生省は医療機関の機能別分類と病診連携をとなえております。

しかしながら総医療費のワクは拡大出来ません。国民の生活水準をしてアメニティも高まっております。一日一、三二〇円の室料や一、四二〇円の給食料でやれる理由がありません。看護婦は足りないだけに看護婦確保法で優遇処置がとられております。勤務医師の生涯収入は銀行員を下廻ります。保険医療のすべてのひずみが医師、特に有能な青年医師に集約されている気がします。大学で二年余計に学び、更に二年間研修医として低賃金で研修し、チーフレジデントで帰った六年生は無給でアルバイトで生活し、更に研究学問に情熱をもちやす有能な医師は、10%の研究費を自ら収め、診療の終った夜間、そして土・日に研究しているわけです。国民のどれだけがこの医療の、大学医師の実態を知っているでしょうか。ジャーナリズムは月光仮面で常に弱者、患者さんの味方です。このままでは日本の医療はつぶれます。何とかしなければならぬ。今後私が私自身に課して行く仕事となるであらう予感がします。

先ず国民に医療の現実を正しく伝え、国民のコンセンサスを得た上で、保険医療費のワクを大きく広げること

なく、保険医療制度の抜本的改革を行わねばならないでしょう。国民皆保険は大変に結構なことですが、あくまでも基準医療であり、この上にmedicareを含めた自由診療のワクを重ねるべきです。恥かしい話ですが、日本私立医科大学協会での話題は常に病院の財政問題であり、高度の医学や医療を求める話題は少ないのが実情です。特定機能病院への手上げを契機に日本私立医科大学協会、全国医学部長病院長会議、日本医師会、厚生省等へ働きかけ、日本の医療を、その将来をより向上せしめるためにも御奉公せねばならないと感じています。

泉源はわが整形外科学教室にあり、輪はそこから広がって参ります。同窓会はそのオアシスです。

七、池田亀夫名誉教授逝く

平成五年七月三日、月ヶ瀬リハビリテーションセンターにおいて、眠るがごとく池田名誉教授は逝かれました。ふるさとも弔辞を書かせていただきました。

思いは走馬燈のようにめぐります。

学生時代に聞いた池田助教授の講義……一回だけです。フレマン時代に命じられた一年間のカルテ調査……ツケは高かった。六号一階の助教教室……常に勉強されていたガッシリとした後姿が印象的。兔唇の手術、手の手術

……あのかい手で。腹膜外式アプローチ……さすがでした。腰仙椎カリエス手術での大出血……恐れ入りました。癩療養所でのこと……ありがとうございました。一時間でコップ酒十二杯飲みましたこと……申訳ありませんでした。教授に決った晩のこと……さすがに興奮してました。パラプレジア医学会、幹部会における小天狗……オジャマ様でした。生化学朝の抄読会……そつと逃げました。第一回の発作の日、そして復帰の日……私も真剣でした。大学紛争医局改革の嵐……大変だったですね。手の外科学会会長に決った評議員会での出来事……それでも良かったです。ゴルフのこと……楽しかったですね。そして第二回の発作から月ヶ瀬での再会、私が行なった先生の下腿切断の手術……涙。そして密葬から教室葬……合掌。

良いこともあったし、悪いこともありました。病気をえしななければ……。しかしこれも運命でありましょう。変らないことは、先生の学問に対する情熱が綿綿と教室員へと継承されている事実です。

どうぞ安らかにお眠り下さい。

教室葬での御厚志は、池田賞として先生の榮譽をたたえ、若手教室員の研究奨励に使わせていただきます。ありがとうございました。

八、教室員への期待

私の残任期間も四年半となりました。あと二回あゆみを書けば、次の船頭さんに舵をまかせることとなります。

御陰様で私の赴任以来七年余りの間、教室一丸となつて、和と伝統と研究を重んじて慶應整形丸は順調な航海を続けることが出来ました。これは乗組員である教室員特にスタッフの献身的な努力に加えて、これを支えてくれた同窓の御支援に負うものであります。特に最近私はが対外的活動にあけてくれていますので、教室は助教以下スタッフにまかせっきりです。スタッフの先生方が、自分のことはさておき、また自分の班のこと以上に教室全体のことを考え、滅私奉公して下さいことに頭が下がります。特に若い教室員への臨床、研究の指導に対して並々ならぬ労力を費していただけました。御陰様で、私は私の任期中にやるべきことの90%はやり終えました。あと残っていることは、日整会學術集会を立派にやりとげることと後継者の育成であります。

私は一年前、そして半年前にも、スタッフフミータイングでかなりきびしいことを申しました。私の残任期間はあと五年である。そろそろ後継者のことを考えねばならない。スタッフすべてはその資格がある有能な方と考える。しかし助教教授を除いて、先生方自身の業績は未だ不

足している。特に欧文論文が足りない。それはあと三年のコンペティションで決る。と話しました。

まことにきびしい話であります。しかし大学です。慶應義塾大学です。医学部です。伝統ある整形外科学教室です。その舵取りをまかせる船頭さんです。この三年間のきびしさを心・技・体に加えて学問でもクリアー出来る人でなければなりません。まだ差はついていません。超人的努力になると思いますが、三年間のことです。まだ四十才代の後半或は五十になったばかりの人達です。やれば出来るはずです。

私自身還暦を過ぎたとはいえ、まだ頑張ります。どうぞ教室員、スタッフの先生方、自らのためにも、和と伝統と学問・研究を忘れることなく、更への業績を積み重ねて下さい。それが教室のためになるはずです。そして若い方達も遠慮することなくどうぞ大きく伸びて行って下さい。

とりあえず二年間のあゆみを見守ります。

(平成五年九月五日記)



特集：池田亀夫名誉教授をしのいで



池田亀夫名誉教授年譜

(略 歴)

大正7年8月28日 群馬県甘楽郡に生れる

昭和17年9月 慶應義塾大学医学部卒業

昭和17年9月26日 慶應義塾大学医学部助手(整形外科学)

昭和17年10月 海軍短期現役軍医

昭和20年12月 慶應義塾大学医学部助手(整形外科学)

昭和25年10月1日 慶應義塾大学医学部専任講師(整形外科学)

昭和28年5月18日 慶應義塾大学医学部助教授(整形外科学)

昭和37年11月29日、38年3月1日

香港大学にHodgson教授の下、脊椎外科学の研修のため留学

昭和41年12月1日 慶應義塾大学医学部教授(整形外科学)

昭和52年5月 第20回日本手の外科学会会長

昭和52年9月 第26回東日本臨床整形外科学会会長

昭和59年3月31日 慶應義塾大学医学部教授退職

昭和59年4月1日 慶應義塾大学名誉教授

平成5年7月3日 御逝去 享年74歳

平成5年7月23日 勲四等正五位

追悼の辞

故池田亀夫名誉教授

矢部 裕

池田亀夫名誉教授は、平成五年七月三日、午後九時四十五分、心不全のため慶應義塾大学月が瀬リハビリテーションセンターにて御逝去されました。十四年余りの臥床にもかかわらず、やつれは見せず、安らかなお顔で永久の眠りにつかれました。享年七十四歳、専念院釋慈寛とられました。

昭和十七年、慶應義塾大学医学部を卒業し、同年十月から昭和二十年十一月まで海軍短期現役軍医として応召された以外は停年退職まで慶應義塾に奉職されました。故岩原寅猪教授のもと、昭和二十五年十月には講師、昭和二十八年五月には助教教授となり、柔道で鍛えた強靱な精神力と体力にもいわせて幾多の業績をあげられました。先ずは骨折の牽引療法であり、続いての研究課題は麻痺手の機能再建であります。国立瀨療養所多摩全生園、国立駿河療養所へ出張し、自ら再建手術を行い、昭和二十九年から昭和三十三年にわたって連続五回の研究発表を日本瀨学会で行ない、昭和三十三年十一月の第七回国

際瀨学会と昭和三十四年四月第十五回日本医学会総会におけるシンポジウムの発表で集大成し、国内外で高い評価を受けました。麻痺手の機能再建についての研究と診療に対し、昭和三十三年には藤楓協会から功労賞を受けました。

一方故岩原寅猪教授が開拓した脊椎外科分野においても、当時整形外科医が前方から到達することが困難であった脊椎椎体病変に対し、自ら解剖学教室で屍体解剖を行なうとともに、昭和三十七年には当時脊椎外科、特に脊椎カリエスの第一人者であった香港大学のホジソン教授の下に留学し、上位頸椎から腰仙椎にいたる前方侵入法を確立しました。腹膜外式椎体侵入法は昭和四十一年第二回日米整形外科合同会議で発表し、反響を呼ぶとともに、この集大成は昭和四十二年第四十回日本整形外科学会の協同研究「椎体侵入に関する諸問題」でなされました。この業績が多くのカリエス患者を救い、また脊椎変性疾患を中心に日本が世界の脊椎外科をリードして行く礎石となりました。その他サリドマイド奇形、骨腫瘍、むちうち症等業績は多くあります。

昭和四十一年十二月教授就任後は、整形外科学教室内に各種診療研究班を組織すると共に、新しく生化学研究班を作り、また慶應義塾大学病院内にリハビリテーシ

ョンセンターを作り、多くの後輩の指導にあたられました。また大学を中心に数多くの関連病院の交流の重要性を説き、自ら関連病院に赴き指導し、第一線病院の発展につとめられました。昭和四十三年八月には一回目の脳血管障害のため倒れられましたが、六ヶ月のリハビリテーションで見事に復帰し、昭和五十二年五月、第二十回日本手の外科学会、同年九月には第二十六回東日本臨床整形外科学会を主催しました。また日本整形外科学会および多くの関連学会の要職をつとめ、斯界の発展に貢献しましたが、昭和五十四年一月に二度目の発作で倒れ、以後永眠されるまで十四年余り、闘病生活を余儀なくされました。

真摯な態度と強靱な精神力と体力で疲れを知らず学問に専念し、つき進んだ姿は機関車の様でありました。唯一の楽しみはアルコールであります。それもチョコでは間に合わない。こつぶ酒であります。つがれると必ず飲み干します。一升は軽いようでした。国立駿河療養所へはよくお供しました。手術を終えて帰る御殿場の駅でカンビールを買い、座席にすわる間もなく飲み干すそのうまそうな顔、まさに極楽、車窓から入る機関車の煙りの臭いと共に忘れることが出来ません。「ホウカイ、ヤッコさんは良くやるよ。あのホラ、あの君が・・・」と人

の名前を憶えるのは苦手のようでした。

教授になって一年余り、昭和四十三年一回目の脳血管障害で倒られた頃は学園紛争、医局改革の嵐が吹き荒れました。教授独裁反対、学位返上、権限分散、多数決であります。嵐は教室にも吹きすさびました。病後であるだけにどれだけ心労をわずらわしたことでしょうか。多数決の原則は認めましたが、学問に対しては常に毅然たる態度をとられました。お酒に変わり、リハビリを兼ねて行なうゴルフが楽しみとなったようです。家庭のこと、娘さんのことを目を細めて話される様になりました。釋慈寛の姿を見ます。昭和五十四年一月外来診療中に二回目の発作に見舞われ、私自身何度か月が瀬に見舞いましたが既に御話することが出来ませんでした。

教授在職中、志中途にして病に倒れたのはまことに残念なことでありましたが、先生の高潔な人格と学問に対する情熱は、御指導をいただいた我々教室員の心に宿り、継承されております。

先生どうぞ安らかにお眠り下さい。
御冥福をお祈り申し上げます。

故池田亀夫名誉教授の御葬儀は慶應義塾大学医学部整形外科学教室葬として、平成五年七月二十四日午後二時

から千日谷会堂において盛大にとり行なうことができませんでした。生前の御偉徳をしのび、慶應義塾大学・病院関係、全国医科大学・日整会関係、厚生省・藤楓協会、ナース関係、同門・同窓会関係等、参列者は四百名に及びました。深い悲しみの中にも心暖まる弔辞を細田泰弘医学部長、山内裕雄日整会理事長、友人代表として津山直一国立身体障害者リハビリテーションセンター名誉総長、菅野卓郎同窓会会長、門下生代表千野直一リハビリテーション科教授よりいただくことが出来ました。賜った御供花、御厚志とともに厚く御礼申し上げます。

また、御遺族の申し出により、御厚志は教室員の研究助成に御寄付いただきました。池田賞を設置し、池田先生の御偉徳を永く教室に伝えるとともに、若手教室員の研究奨励に使わせていただきます。まことに有難うございました。

弔 辞

菅野卓郎

池田先生、慶應医学部整形外科同窓会会員一同先生のご逝去を悲しみ心から哀悼の意をささげます。

同窓会員各々は先生とはいろいろの関係にあったと思いますが、私にとりましては教室の先輩であったと同時に恩師でもありましたので、私の個人的立場で一言追悼の気持ちをのべさせていただきます。

私が教室に入りましたころ先生は岩原先生門下の筆頭助手でおられました。まったく教室のことが分からず心細いフレッシュマンであったとき、どうかい、整形は」と暖かい声をかけていただき、大変嬉しかったことを思い出します。その後間もなく講師、助教授になられ公私ともにお世話になりました。臨床や研究面でのご指導のほかに、教授に直接話せない個人的なことなども相談にのっていただき、先生の人情味あふれる人柄に接し感動いたしました。

長時間の手術を二つも三つもこなされ、そのあと夜遅くまで勉強される姿をみて素晴らしい先生だと尊敬いたしました。当時先生は「骨折の保存的療法」と題

する共同研究を担当しておられましたが、日曜日に誰よりも早く研究室に來られ率先して実験にとり組んでおられた姿を今なお忘れることができません。こうして先生はあらゆる面で岩原教授を補佐して教室をひっぱりつづけておられました。

主任教授になってからは、以前にもましてファイトを燃やされ、新しい研究グループの編成や学内外の人事交流など意欲的に新しい教室づくりにとり組まれました。そして各研究グループのすべての集まりに早朝でも夜遅くでも必ず顔をだすほどの熱の入れ方でありました。先生はご自身誰よりもすぐれた学者であられました。また同時に後輩や弟子の面倒を實によくみられた親分肌の人でもありました。

昭和四十三年の夏、突然倒れられたときは、あの頑健な先生がまさかと信じられない気持ちでした。病床にありながら、枕もとで私に大事な研究のことをご心配くださいましたが、それほど先生の頭のなかはいつも教室のことで一杯であったのだと思います。忍耐強いリハビリテーションによってようやく復職されたときは大変嬉しく思いました。

しかし医学部内での難しい問題も起こり、その後は本当に心身の休まる暇もないほど無理な毎日を過ごされた

と思っております。再び病に倒れられ、それ以後ついに元氣なお姿にお会いすることができず今日にいたったことは誠に残念であります。

それにしても教授になられて以後、再三の挫折によって先生の意とされたことの何分の一も果たすことができなかったことは、どんなにご無念であったかと先生の胸中をお察しいたします。

慶應整形外科教室ならびに同窓会は先生のご遺志を受けつぎ、今後教室発展のため今までもまして努力してまいるつもりでおります。

どうぞ先生、安らかにお眠りください。

平成五年七月二四日

慶應義塾大学医学部整形外科学教室同窓会

会長 菅野卓郎

『池田亀夫名誉教授・教室葬』

式次第

池田先生の御葬儀は慶應義塾大学医学部整形外科教室葬として、平成五年七月二十四日、慶應義塾大学病院に近い信濃町の千日谷会堂において盛大にとり行われました。当日は雨模様でしたが、生前の御遺徳を偲び、慶應義塾大学・病院関係、全国医科大学・学会関係、厚生省・総理府関係、厚生女子学院・看護婦関係、同門・同窓関係等、参列者は四百名を超えました。矢部裕葬儀委員長の告別の辞に続き、深い悲しみの中にも心暖まる弔辞を細田泰弘医学部長、山内裕雄日本整形外科学会理事長、友人代表として津山直一東京大学名誉教授、同窓を代表して菅野卓郎同窓会会長、門下生代表として千野直一リハビリテーション科教授より頂きました。教室葬の様子は写真集の最後に組み入れてあります。

また、御遺族からの申し出により、教室の研究助成に御寄付をいただきました。池田賞を設置し、池田先生の御遺徳を永く教室に伝えると共に、教室員の研究奨励に使わせて頂くことになりました。

(記…堀内行雄・戸山芳昭)

- 一、導師入場
- 一、開会の辞
- 一、読経
- 一、告別の辞
- 一、弔辞
- 一、弔電披露
- 一、焼香・読経
- 一、導師退場
- 一、挨拶
- 一、告別式

葬儀委員長・整形外科学教授

矢部 裕

慶應義塾大学医学部長

細田泰弘

日本整形外科学会理事長

山内裕雄

友人代表・国立身体障害者リハビリ

テーションセンター名誉総長

津山直一

同窓会会長

菅野卓郎

門下生代表・理学診療(リハビリテ

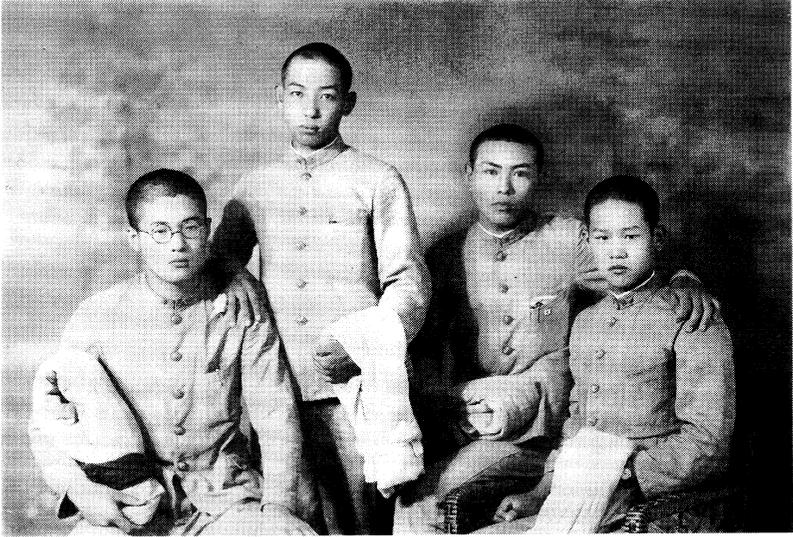
ーション)科教授 千野直一

司 会

喪主 池田登紀子

整形外科学助教授 富士川恭輔





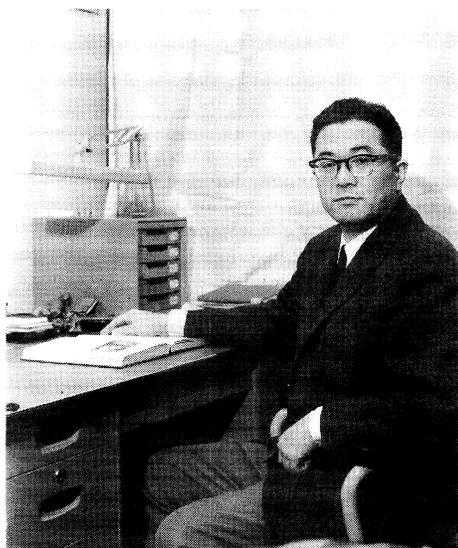
少年時代の池田先生（左端。昭和10年7月、東京にて）



青年時代の池田先生



南青山の御自宅にて岡田先生と（昭和26年、41ページ参照）



助教授に就任された頃（昭和28年）



秋期野球大会で優勝（前列左より3人目、同5人目は泉田先生。
昭和30年、東京大学にて）



第7回全国らい診療所整形外科研究会にて（前列右より2人目、
同右端は現矢部教授）



日米整形外科合同会議にて（左端、同4人目は故岩原先生、前列右より3人目は平林先生。昭和37年4月、京都にて）



同合同会議、京都会館前にて（左より4人目、右端は花岡先生）



第23回日本脳神経外科学会にて（右から4人目、昭和39年10月、岩手にて）



柔道部卒業生送別会にて（前列左より3人目、卒業生の内山、川村、斉藤、戸松諸先生と。昭和42年2月）



阿久津先生の開院式でスピーチ（昭和49年1月）



椿山荘にて（右、池田先生御夫妻。左、伊勢亀先生御夫妻。中央、平林先生御夫妻）



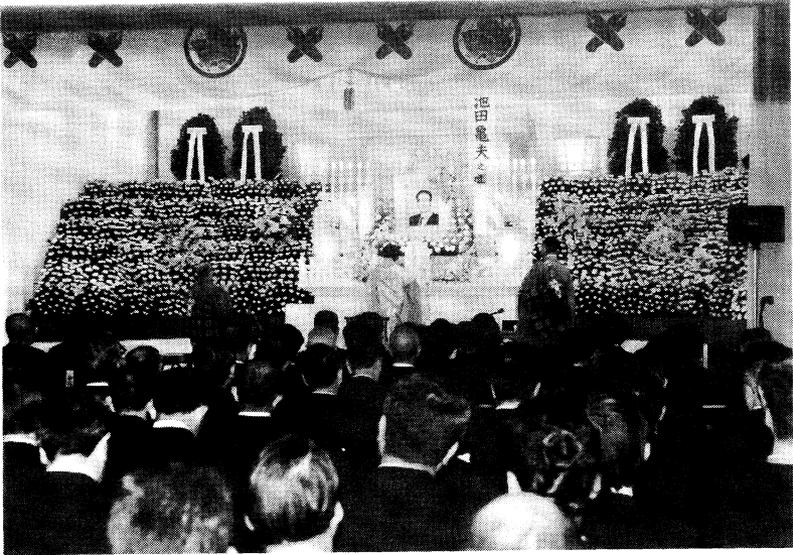
関東リウマチ研究会にて浅葉先生と（昭和53年4月、高田馬場にて）



第21回手の外科学会にてDr.スターク夫妻と（昭和53年10月、京都にて）



御誕生日に奥様と娘さん2人と（昭和59年8月、国立療養所箱根病院にて）



教室葬（平成5年7月24日、千日谷会堂にて）



教室葬で御挨拶される池田名誉教授夫人

池田教授のおもいで

池田亀夫名誉教授を悼む

浅葉義一 (23)

池田先生が平成五年七月三日ご逝去になりましたので、本年の「ふるさと」には先生の思い出などを述べて心から哀悼の意を表したいと存じます。先生には国立塩原温泉病院に在職中大変お世話になり、いろいろとご指導・ご援助を頂きました。まことに有り難く御礼を申し上げます。

顧みてみますと、前田・岩原両名誉教授は昭和十年四月外科・整形外科学会の合同宿題報告「脊髄外科」を共同して発表されましたが、以来教室をあげて脊椎・脊髄に関する臨床的基礎的研究を継続してつづけられました。その結果慶大整形外科の「脊椎・脊髄外科」は内外周知のお家芸として認められるまでに発展して参りました。池田名誉教授は教室の伝統として培ってきた「脊椎・脊髄外科」を更に国際的に飛躍させようと懸命に努力されて、遂に脊椎・脊髄外科の第一人者として日本の学会の認めるところであったと存じます。このように考えると先生が志を半ばにして病魔に倒れたことはかえすが

えすも残念でなりません。しかし先生から「脊椎・脊髄外科」の奥義を伝授されました教室の優秀な先生方の英知と努力と協力によりまして慶大整形外科教室の「脊椎・脊髄外科」が立派に受け継がれまして発展しつつあることは何よりも慶ばしいことと存じます。どうかこの前田・岩原・池田三代六十年以上にわたる伝統を受け継いで今後ますます研鑽され日本のみならず世界の「脊椎・脊髄外科」となるように力を合せて頑張ってください。池田先生の追悼の中でも私の脳裡に強く焼きついている思い出を述べます。

池田先生が昭和四十一年十二月一日主任教授に就任されて間もなく、栃木県下の関連病院の医長先生方が相計って池田教授を囲んで祝賀会を開きました。席上先生が挨拶の開口一番に「わしは教室における研究・診療・教育については関連病院の整形外科三、〇〇〇床を含めて打って一丸としてすすめてゆく」という意味のお言葉を力強い口調で話されました。池田教授が就任直後に表明された「教室と教室関連病院との一体化」の教室運営方針を伺って、同席されていた医長先生方は一同「よし頑張ろうじゃないか」と心に強固に決められたと存じました。池田教授のこの方針はついに陽の目をみることなくそのままになってしまい、まことに残念に思っており

ます。

以上池田教授を追悼して率直に述べて参りましたが、意のあるところを汲み取って下されば幸甚の至りです。

終りに教授の御霊に、幻の詩人サムエル・ウルマンの

「青春」の一節を捧げたいと存じます。

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、

たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。

青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは怯懦を退ける勇氣、安易を振り捨てる冒険心を意味する。

ときには、二十才の青年よりも六十才の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。(平成五年七月十一日記)

故池田先生を偲び、思い出すままに

田 中 一 雄 (24)

時は流れ、世はうつり、医局も幾たびかの変遷の中、長い長い闘病生活の末永眠された故池田先生の霊に心からご冥福をお祈り致します。

昭和二十年八月末舞鶴の海軍病院で軍役を解かれた私は永久軍医を志していた為医局を決めてなかったが九月に入って何となく整形外科の医局に故岩原先生を尋ね、何時しか医局員となっていました。日がたつにつれ次々と先輩が復員されてきた。岩原先生は池田先生の帰りを期待され、医局に顔を出された時はとりわけ喜ばれたように感ぜられた。それからの数年私とはOben・Nebenの関係もなく、時に手術の手伝いをした位で直接あれこれお世話になった事はないように思う。又先生自身が自分の勉強に忙しくよく図書館に行っておられた。やがて岩原先生から非常にスムーズに教授職を引継がれ、学会に、教室員の教育に張切っておられた。その頃既に教室を離れ関連病院に就職していた私には頼もしいものにはれた。教授になられてどの位たってからだったろうか、突然病魔に襲われ病床の人となられた報に接した。幸に

して程なく恢復され再び教職に戻られた。当然の事乍ら健康には異常と思はれる位留意されていた。かつての堂々たる体軀も見違える程に引締り、徐々に以前の活動に復帰され教室内外の同窓も安堵し、祝福したのである。そしてその後の経過は定かに想い出す事が出来ないが、数年後に再び病魔に襲われ学業半ばで不帰の客となられたのはお気の毒の限りである。俗の言葉で云えば本当に「ついでない先生」である。

今私が先生についてはっきり想い出すのは、一つは先生が結婚されその休みの間に日本整形外科学会雑誌を読破されたと人伝てではあるが耳にして驚いた事である。一つは何時だったか忘れたが龍ヶ崎カントリーで野村勇君等とゴルフをし先生が優勝された事である。改めて心からご冥福をお祈り申し上げます。

池田先生の追悼「寸題」

岡田 衛生 (26)

昭和二十年代の柔道で鍛えられた巨漢、池田亀夫先生の御勇姿を追憶して、私の思い出話とは、昭和二十六年一月三日、当時の整形外科医局恒例の「箱根参り」（岩原寅猪教授が風祭の国立箱根療養所所長を兼任されていた時代に毎年正月には、医局員全員が所長官舎邸に集合した）で、銘酒サカタ錦や山海の珍味で、痛飲、鯨飲、はては高歌放声に加え、春日秀彦君、故、飛弾清英君等の裸踊りで池田先生も酩酊された。歸途数名の介抱の上、箱根登山電車にて小田原駅に来て小休止となった。

以後は、故、今中欣一君と私とで九十余kgの池田先生の巨体をあやしなから、交通事情の悪かった東海道線、山手線を経由して、当時の澁谷南青山の御自宅の御家族のもとへ御届けし、どっと疲れて深夜に歸宅した事で、諸先輩も知らない懐かしい思い出です。

（註）寫眞は当夜の青山宅でのスナップ（写真集に掲載）。
初春に亀を背負いて 千鳥あし

昭和二十五年四月、慶大北里講堂での第二十三回学生会總會の直後に、池田亀夫講師（当時）を中心とする「骨

折の牽引療法の基礎的研究」の課題が私等（森田、岡田、柏木、今井（銀）君）に課せられた。別館一階かどの研究室で、物資の乏しいなかでの動物実験研究は、私の担当の骨折の病理学的研究を含め、スタミナのある精力的な池田先生の御指導で毎日夜おそくまで賑やかに終始していた。

数年后には各部門担当の多数の医局員（小川、藤原、森、木住野君等）の業績の結集による共同研究「骨折の牽引療法の基礎的研究」は、池田助教授（当時）により日整会總會にて発表し、集大成された。

研究の成果夢みて 夜もすがら

私が大田原赤十字病院に在任中の昭和四十一年十二月に池田先生が教授に就任され、翌年栃木県関連病院医長会として、池田教授就任祝賀会を國立塩原温泉病院、浅葉義一院長が中心となり塩原温泉にて開催された。

池田教授の御挨拶の抱負として、「これからの教室の研究は教室関連病院の整形外科の二、〇〇〇ベッド（当時）を一丸としたシステムのもとに行動してゆきたい」との御ことばに、同席の私等一同は従来になく新鮮な氣魄と、教室の研究事業の発展への頼もしさを深く感じた次第でした。

晩年、池田先生の長年月にわたる闘病生活も、持ち前

の体力、氣力で頑張られ且御家族の皆様の手厚い、暖い看護のもとに安らかに御他界された今、往時を偲び慎んで御冥福をお祈りします。合掌（平成五年七月三十一日）

とめどなく恩師の柩に胸あつく



池田亀夫先生を偲んで

森 雅 文 (30)

入局した年のはじめでの夏を迎えた頃、医局のあるいは図書館の机に向かって、流れる汗をタオルで拭きながら、一心不乱に読書されている池田先生のお姿をみて、これからの教室員としての心構えを無言のうちに教えて頂いた気持ちでした。

私が、岩原教授から頂きました学位論文のテーマは、池田先生が日整会で担当される宿題報告の一部分でありましたので、池田先生から直接にいろいろとご指導を頂きました。

先生の宿題報告の各部分は数人で受け持っておりまして、われわれはしばしば東中野の先生のご自宅で、奥様のおもてなしにあずかりながら、先生の豪快な数々のお話や遠大な抱負について承ったりもいたしました。

研究のみならず、臨床についての私の初歩的な質問に対して、強い凹レンズの奥にある先生の眼はいつも優しく、また丁寧に教えてくださいました。

これらのことから先生に対しては、恩師として大いなる尊敬の念を持つ一方、あたかも兄に対するような親し

みの気持ちを抱いておりました。

ダイナミックな手術のほかにも池田先生の思い出は沢山でございますが、なかでもつい先日のことの様に思い出されますのは、先生が教授に就任されまして間もなく、当時私が出張していた清水市立病院のことを報告するために教授室にお伺いしたときのことです。

先生は「いまわれわれの関連病院のベッド数は二、〇〇〇床もあるからこれを一つのものと考えてやってゆける態勢を作りたい。そうなれば視野の広い大きな、しかも立派な研究が出来るようになるから、このことは是非やり遂げたいので協力してほしい」とおっしゃいました。

そのとき私は生意気にも「私も先生のお考えには大賛成です。しかしいま私の出張先の清水は極めて多忙であります。外来、入院、手術の件数も多いのに、整形外科医はたった二人で、殆ど毎日五時以降に救急患者が来るような状態で、毎晩家に帰り着くのは十時以降です。それに日曜日も病院に呼び出されますので、臨床だけでなくたくたです。これでは自分で行った治療さえもじっくりと振り返る余裕ありません。考える余裕のないものは先生の構想に当てはまる戦力にはなりません。どうか清水ももっと増員して頂いて、まず私たちに考えるゆとりを持てるようお願いいたします。もう一つは現在の状況

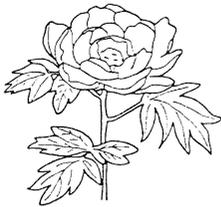
からみると、関連病院を直ちに一つに集約することは難しいことと思います。まずそれなりの体制を時間をかけて作らねばならぬと思いますが如何でしょうか」と申しましたところ、先生は即座に「勉強するための時間は是非必要だからなんとか考えることにしよう。第二の問題点についても私はすでにいろいろと考えている。おいそれとはいかないだろうが、なんとしてもまとまるようにしてゆきたいから、君も是非協力してほしい」という趣旨のことを、若輩の脅迫がましい失礼な言葉を気にもさず熱のこもった口調でお話になり、私も精一杯先生のお考えに沿うよう努力することを申し上げました。

先生は整形外科の各分野において数々の立派な業績を残されましたが、この大きな構想だけはいろいろの事情や、また思いがけずも早く病に倒れましたこと、ご自身で完結することが出来ませんでした。

先生にとって如何ばかり残念なことであつたでしょうか。

このような思いがあつてか、去る七月二十四日に悲しみの雨の中、千日谷会堂でおこなわれた葬儀の祭壇に掲げられた池田先生の御遺影は、「慶大整形外科は一丸となって頑張れ、学問も医療も情熱をもって誠心誠意行え」と語りかけておられるようでありました。

ここに改めて先生の数々のご恩にお礼を申し上げますとともに、遠大な御遺志にそつて教室の発展に及ばずながら力を注ぐことを誓い、心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。



池田先生お疲れ様

鷲谷澄夫 (30)

三Iが慶應整形外科のすべてであったとき小生等は入局した。三Iとは岩原、池田、泉田三先生のことである。偶然イニシャルがIであるのが神秘でいい。当時、昭和二十七年、一九五二年の頃、池田先生の肩書きは医局長というだけのものであった。

医局員も七・八人の一握りの小科ではあったが、何故か魅力があった。漠然とした魅力としか映らなかつたが私はそれに牽かれて入局した。

入局して魅力の正体を掴んだ。

岩原教授の指揮下、とてつもない大きなプロジェクトをもとつとしてしていると知った。大プロジェクトであるとは誰も言つたわけではなかつた。でもそのことが膚で知れた。理由の一つに池田亀夫先輩の猛勉強振りがあつた。岩原教授の構想が池田亀夫先生の開拓力で日に日に膨らんでいくのが解つた。

池田先生は年毎に拡がる整形外科のテリトリーに少しも騒がず慌てず、月余にして筋電図学を物にし、手の外科に取り組み遂に前人未踏とも云うべき脊椎前方侵襲術

に踏み入つた。

実に颯爽たる若武者振りであつた。

一方、岩原教授は生まれながらにして指揮官だつた。池田先生への期待は飽くことがなかつた。勇将のもと弱卒の存在は許されなかつた。若輩の小生等の力不足を一身に受止めて、池田先生は奮闘の日々を送つていた。あの頃が池田先生の最盛期ではなかつたらうか、と私は今振り返る。

岩原教授は豪傑好みであつた。自らも充分に豪傑ではあつた。それは、寅猪という名が示す通りである。寅猪先生に豪傑として缺けるものがあるとすれば、酒量であつた。酒席の大好きな岩原教授はそのことを池田亀夫に託した。池田亀夫先生は名が示すように斗酒も辞さない酒豪である。

毎年の正月元日、門下生が岩原教授宅に集結する。夫人の手料理で新年を祝う宴席が催される。

家庭での好々爺振りに指揮官の顔をのぞかせて岩原先生は意識して弟子の人柄を育んだ。

池田先生は天分に恵まれていた。仕事がよく出来る上美丈夫で大器の相に缺けるところがなかつた。岩原教授の好みであつた。

「池田君、どうだまだ序の口だろう。高千、池田クンに

は大きい盃がいいだろう」

池田助手には教授の命令は絶対であった。指揮官に忠実であるように訓練をうけた海軍士官であったからである。

流石の池田先生も或年大酒の挙句、岩原邸前で失態を演じてしまった。

そんなエピソードを知って私はいよいよ池田先生を尊敬するようになっていった。

酔いつぶれることの出来る人は矢張り立派な豪傑だと考えたからである。

三一体制が終って慶應整形は新しい時代に入った。そして池田先生が逝った。

一入想い出深い。

先生こそ文字通りの英傑だったと今しみじみと当時を思いおこしている。

I chose to be a Doctor as my job, because I want to service to the people, not to become a hero by myself. But I envy heroes in some—where of my mind.

Dr. Ikeda was a real hero among us. "Would you take a rest as much as you want."

次には英語を使う国に生れて勉強したいと思う。

池田先生の御逝去を悼む

今井 望 (32)

池田亀夫先生が永年の闘病生活のあと先日七十数年の生涯を閉じられた。まことに痛ましい限りである。

私が入局した昭和二十九年頃の慶應の整形外科医局は別館の三階にあつて、入つて左奥の隅に池田助教授の机が、また右奥に泉田講師の机があつて、両先生は忙しい外来や手術の合間を縫うようにして書物を開き、文献を読み漁つておられたのを記憶している。入つたばかりの我々は両先生の猛烈な勉強ぶりに驚きを通り越して恐怖をさえ感じたものであつた。

池田先生は戦時中海軍軍医として南方戦線に派遣され、戦争末期にはフィリッピンの山野をさまよい歩いた話をよくしておられたし、またそのころに罹患したマラリアが戦後何年も出没して先生を悩ませたようである。

戦後、次々と医局員が戦地から復員して、荒廃した医学部が立ち直つてくる中で、岩原教授は特に池田先生の帰られる日をまだかまだかと待ち望んでおられたと聞いている。そして池田先生はその期待にこたえて復員後の活躍はまさに目ざましいものであつた。私が入局した昭

和二十九年の頃には、医局の態勢もすっかり整って、軍隊帰りの諸先輩の武勇伝はすでに昔語りになっていったが、池田先生は常に若い医局員の先頭にたつて精力的に手術をこなし、熱心に研究を進めておられた。その精神の高揚は歩き方に現れ、いかり肩をゆすって大股に闊歩する姿はまさに偉丈夫の姿そのものであった。夜ともなれば医局の中では誰彼となく相手をつかまえて談論風発、机の上にはしばしば一升瓶が据えられていて、飲みながらの研究の話、手術の話、あれこれ整形外科会員の人物評などをするときの勢いはまさに意気天を突くものがあった。

先生その頃の医局員に対する論文の指導は、あまり字句の誤りなどには拘泥せず、一見大ざっぱなように見えたが、内容の本質に対する批評はきわめて辛辣で、指摘はよく核心をついた鋭いものであった。

池田先生自身は岩原教授の開発された脊椎前方固定術を前進させ、前田和二郎教授以来の長管状骨骨折の牽引療法の理論的裏づけを明らかにし、そのころから活発化し始めた手の外科に手を染めて教室のこの方面の研究の先駆けとなられたのであるが、この幅広い分野の診療と研究は、思えば先生をして過大な激務を強いることとなり、あの運命を左右した疾患の遠因となったのかもしれない。

ない。

先生を知る全ての人々の期待を担って岩原教授のあと慶大整形外科教室を継がれる事となったが、当時の先生はその頃ややマンネリ化した医局の気風を如何に刷新するかに意を注がれ、大きな気負いがうかがわれた。しかし、あまりにも性急に体制を変革させようとした先生の方針には教室員の戸惑いがみられ、この思うように変革が進まない現状には先生のおせりがうかがわれた。

最初のアタックが先生を襲ったとき私は足利日赤に赴任していたが、慶應病院にお見舞いに伺ったところ、あの元氣だった先生が別人のように弱気になられて「これからは一病息災で体を大事にしてゆくよ」と弱々しく私の手を握られたのには胸が痛んだ事であった。しかし、その後の社会復帰を目指した先生の努力は目ざましいものであった。手足の麻痺もはた目には殆どわからないほどに回復し、リハビリテーションの目的で始められたゴルフは非常に上達されて、すっかり元氣な姿で職場に復帰されて医局員一同愁眉を開いたことであった。時あたかも全国的に大学の改革運動が吹き荒れた時代に入り、慶應の医学部でもこの風は吹きすすんで理念、思想の異なった人々の対立の中で学生生活は殆ど許されない時代に教授として復帰されたことになる。研究者にとって

は、いかにもつらい時代であったに違いない。この嵐が収まりかけた頃私は国立栃木病院から東海大学に移ったのであるが、先生に大変喜んで頂いたことを覚えている。

そのころ岩原名誉教授との間に感情の対立があったようである。大変不幸なことではあるが、前任と後任の感情の溝はどこにでもありうる宿命的なもので特別とりたてて言うほどのものではなかったはずである。永年同じ職場にあれば小さな意見の齟齬も蓄積して行くであろうし、時代感覚の差も防ぎようがないかもしれない。ただ、たまたま周囲の環境がこの溝を増幅させる状況にあったためにこれが目立ち、誇張して世間に伝わったにすぎないように私は考えている。

二度目の発作で倒れられたあとの十余年は語るに忍びない。人生の暗転とはこのようなことを言うのであろう。慶應病院、国立箱根療養所病院、慶應月が瀬リハビリテーションセンターと転院したがその意識はついに戻ることなく、先生の存在が多くの人々の記憶から薄れたところに、ひっそりと他界されていた。

医師としての人生の中で、およそこれほど前半の明と後半の暗をくっきりと分けた人を私は知らない。運命のいたずらと言うのであろうか。あの恵まれた知力、気力、体力をついに使いきることなく教授生活の大半を空しく

終えられたことは本人のみならず、同門、学会にとっても痛恨の極みと言わざるを得ない。いまはまだ御冥福を祈るのみである。

平成五年八月



池田先生の想いで

小野里 一郎 (特)

一、整形外科教室入局

私が新潟医大の河野左宙教授の紹介状をもって池田助教授を訪問したのは、昭和三十一年の三月であった。

当時病理学教室で講師として神経系腫瘍を専攻していたが、故郷に近い関東方面に出たいと思っていた。

偶々、河野教授の病理標本の依頼を受けていたので、その希望を話した。先生は即座に慶應大学を推薦して、池田教授宛に紹介状を書いてくれた。

然し整形外科にすむことはまだ考えていなかった。当時は病理と整形とは関係が浅く、組織標本の依頼も、剖検も殆んど皆無であったように思う。私自身も、整形外科という学問が、哲学的というか、思考的でない様な気がしていた。まだ骨接ぎが幅をきかしていた。

それに基質が骨では標本製作が大変な上、他臓器の炎症や腫瘍と違って反応が遅いという欠点があった為でもあろう。学生時代は天児教授に講義を受けたが、吃辯で、何となくイライラしてしまった思い出があり、当時は先生が整形外科の泰斗であるとは知らなかった。只、漫然

と池田教授を訪問したというのが、偽らざる本音であった。

ところが、池田先生から整形外科の将来について縷々と説明を受けるに及んで活眼した。又、岩原先生に会うに及んで福沢精神にも触れることが出来た。その場で入局をお願いした次第である。

一、ソウシャル・インディケーション (Social indication)

入局して一本立ちになった時のことであった。どう間違ったのか、所謂ルンペンに等しい老人が入院した。両大腿骨の病的骨折である。グラヴィツの腫瘍の転移があり処置なしの状態であった。身寄りもなければ金もない。身動きが全く不能だから排泄介助もオムツもあてられない。先づ教授回診で、岩原先生から「すぐ退院させなさい」と厳命が出る。疼痛の為看護も処置ない。生活保護を申請しようにも住所不定で、例え許可が出ても慶應では入院出来ない。当時主任看護婦だった佐藤オキツさんからは毎日責められる。「先生何とかして下さい」「同室の患者さんからも文句が出ているんですから」という。進退極めて池田先生に相談し泣きついた次第である。池田先生は、ソウシャルインディケーションとして、両側

の髄内釘固定を施行しようと決断してくれた。その後直ちに、コルドトミーを行って他院へ移せという。事は迅速に進んでホットした。

只、その後の教授回診で「悪性腫瘍にこんな手術があるか、医学の邪道だ」とえらく叱られた。然し今でも、あの池田先生の処置が、一番適切であったと感謝している。

一、富山県宇奈月温泉

私が富山県高志学園の肢体不自由児施設に在職したのは七年に及んだ。この間池田先生は毎年の様に来県した。公的のことも、お忍びのこともあったか。

それは宇奈月温泉があったからである。先生の御尊父は建設技師で、所謂、黒四ダムの建設に関係していたのだそうである。御存知の方も多いと思うが、延楽というのは超一流の旅館である。この名付け親が御尊父であったという。ここに常在して、ダム建設の指揮をとったのであるという。

あの黒部川を走る溪谷トロッコはその時のものである。御乗車の方も多からう。延楽の女将さんは当時のことを懐かしんで、先生の来るのを心待ちにしていたようである。先生も夏休みには、奥様やお子さんづれで来県した。

大きな先生が小さなお子さんを抱いて、あやしている姿など実に微笑ましかったものである。

先生がくると我々も参集して晚餐を共にした。懐かしい思い出である。

一、富山県立医大

当時の富山県知事は故吉田実（後参議院議員）で県立医大の建設を公約していた。岩原先生を尊敬していたこともあるが、慶大を高く評価していた。それは初代高志学園長であった小林録郎先生に負う所も大きい。

吉田知事の、お母さんが交通事故にあった際に、小林先生の往診を受けたらしい。ところが先生の指示の通りの経過で治癒したらしい。岩原先生の床間に飾ってあった掛軸の「徵霜○○？」などは書をよくした吉田知事の筆である。池田先生も来県時、将来医大基幹となる中央病院長と交渉をしていた。伊勢亀先生を将来の教授候補として可成り強引に推した。当時伊勢亀先生以下優秀なスタッフが中央病院で活躍していたからである。院長は、「この時点では賭であって今から拘束は出来ない」と曖昧な態度の為、県から全員引上げることになった。泉田教授が定年後富山県の身障関係の施設長として赴任すると聞いた時は本当に感慨無量のものであった。

池田先生のこと

小林 進 (36)

当時医局では、学位論文審査が通過すると本人がビールや鮪をとり先輩や後輩にお礼し、お祝いしてもらうのが習わしでした。私の主論文のテーマは池田助教授から出されたものでしたので、私の審査当日の先生は殊の外御満悦で口癖の「ホウ、ヤッコさんが……ホーカイ、ホーカイ」を連発され気持よさそうに飲んでおられました。何時になくすっかり酩酊されたので、東中野のお宅にお送りしようと、車が淀橋辺りを過ぎた頃です。珍しく吐かれた上にぐっすり眠られていた先生は突然ガバと起きられ、「新宿はまだかい、君、行くんだよ」と、論文通過の日には是非新宿で徹底的におつきあい下さいと云う私をお願いを思い出されたのでした。勿論タクシーはUターンし、新宿西口のキャバレー某でまたまた飲み直し、とうとうバンドがラスト音楽を奏する頃まで心から楽しそうにつき合って下さったのでした。

酒はお強いし、そしてこんな約束まで守って下さる先生でした。

故石原裕次郎氏がスキー骨折で入院した時は大変でし

た。所属の日活は人気スターを早く復帰させたい思惑から、兄慎太郎氏は弟を思う余りからか、大腿骨々折を二週間で治したと豪語する某球団のトレーナーやら怪しげな柔術家紛いの者が呼ばれたり、その他一癖も二癖もありそうな人達が入れ変り立ち変り現われたのでした。本人は勿論、まわりも混乱し主治医の上石先生を困らせました。

そんな折、池田先生は石原慎太郎氏を助教授室に呼びつけ、「君は裕次郎君を殺す気かね！」と語気強く申されたのでした。これで全て結着がつかまりました。ひどい下腿の粉碎骨折は保存療法で変形も拘縮も遺さず治癒し、彼は完全復帰したのでした。上石先生には忘れられない先生の一言だそうです。

池田先生の親分肌的一面でしょうか。

私の書架にひよんな事から患者にいただいた「見た、戦った、戦争の惨」（吉岡観八遺稿）と云う本があります。軍医である著者が二次大戦中ニューギニアを転戦した記録ですが、文中、池田先生のことの数ヶ所に出て来ます。『隊長が狂気の如く逆上して突撃を敢行しようとした時に池田亀夫軍医大尉は適確に状況判断をしてあら全員玉砕の愚を諭し、無駄な全滅を回避した……』指揮官を失った潰滅寸前の部隊を軍医の先生がひきつれ、

ニューギニアのジャングルを山中を優勢な敵と飢えと戦いながら多くの兵を救ったとも洩れ聞いて居ります。

青春の最も大事な時期に、この様な苛酷な消耗戦を強いられたことが御病気の遠因になったのではないでしようか。

一度御本復され、これからと云う時にまた倒れられさぞお心残りだったことと思います。

足利日赤出張の折、奥様とまだ幼ないかわいい和歌子ちゃんをお連れになり館林のつつじ園で一日遊んだこと、公立岩瀬病院勤務の折、わざわざ福島県まで来てはげまして下さった飯坂温泉での一夜等、忘れることの出来ない先生との思い出です。

恰幅のよい明るいお元気な姿が焼きついている私はお見舞に参らず、とうとう最後までお目にかかりませんでした。

先生、どうぞゆっくりお休みください。

合掌

池田亀夫教授の想いで

田 辺 雅 久 (37)

「ホーカイ、ホーカイ、めげないで頑張れよ！」。

これは、私が在局時代に、池田亀夫先生からかけていただいた激励の言葉である。恩師岩原寅猪先生に、小論文のピーコンを、たて続けに5回もくらい、すっかり意気消沈して、やる気を失くしてしまった私を励ましてくださった。このあたたかい言葉は三十年以上経った今でも耳の底に残っている。当時、大学院生であった私は、小生意気な学問的情熱に燃えて、遮二無二頑張っていたのだが、いわゆる学生時代とはちがって、医局はたいへん厳しく、激励はおろか、評価とか称賛などは、そうたやすく得られる状況ではなかった。医局は秀才であふれかえってをり、風当たりも強く、甘えの許されるような雰囲気ではなかった。そんななかで、在局中ただ一度だけにしろ、「頑張れよ！」と言われたことは、救いであつた。

医局を想う時、必らず、池田亀夫先生の「ホーカイ、ホーカイ」を想い出す。そして、とにかく頑張らなきゃと自分に言いきかせている。

安らかな、永遠の眠りにつかれた池田亀夫先生の御冥福を祈るや切である。合掌。

池田亀夫名誉教授を偲んで

花岡英弥 (37)

池田亀夫名誉教授が亡くなられ、先日、密葬が行われた。出棺後、教室関係者を代表して代々木上原の火葬場までお伴し、義弟の方と一緒に脛骨の一部と思われる骨を拾った。大きな体の先生も骨壺にすんなりと収まるだけの骨になってしまわれた。最後に頭蓋骨が骨壺に収められるのを見ながら、先生は人生という旅の途中に病んで、この頭蓋骨の下で何を夢みておられたのかと思った。

人の死はいつでも悲しい。唯、長寿で仕事も全うした人の死は、悲しみの中にも安らぎがある。そうでない場合は、未練や悔いが残る。先生の場合も端目にはそうであるうが、先生御自身はどうであられたであろうか。ニューヨークで戦死したと公報され、一度は葬式もされた身であった先生は、再発作で倒られた六十歳まで随分活躍されたので、まあ満足だと御自身では思っておられたかも知れない。出棺前にお別れした先生のお顔は長年の闘病にも拘らず、ふっくらと穏やかであった。

祭壇に安置された先生の法名を一読し、千葉大の故井上駿一教授の法名と良く似ていると思った。やはり、同



じ浄土真宗であった。今頃、あの世でお二人で脊椎疾患などについて話込んでおられることであろう。

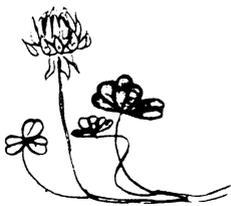
浄土真宗では、一向専念という言葉が大事な宗門の言葉としてあり、一向とは西の方角、即ち、浄土を意味し、専念とは専ら念ずることであると。その言葉から、法名の上半分の専念院と名付けたとの話を和尚さんが初七日の法話の中でされた。さらに、法名の下半分の釈は釈迦の釈であり、慈は字の如く慈愛を意味し、寛は広範という意味で、医の第一線で頑張ってこられた個人にふさわしい法名であろうと話された。

例え、物を言わずとも、家族にとり一家の長が生きているということは、家の中心がある訳で、先生の場合も長い闘病の間にお嬢さんは結婚されて三児の母となられ、小さかった下のお嬢さんもすっかり成人され、御家族にとって先生が病床におられるだけでも心の支えではなかったかと拝察している。その間に御家族の胸の中には先生の思い出が沢山詰め込まれたことと思う。

「ふるさと」の池田教授退職記念号にも書いたように、私にも先生との思い出が沢山ある。特に、レブラの手の手術の助手に御殿場まで先生にお伴した頃のこと、教育委員として教育主任の先生の補佐をした時代、さらに、革命時代の最後に先生から医局長を命ぜられた頃の事は

最も思い出が深い。

先週、立派な教室葬が行われた。奥様の胸に抱かれて車に乗られる先生の御遺骨をお見送りし、走り去る車が視界から消えた瞬間、先生は本当に行ってしまったとの実感が胸に一杯となった。



池田亀夫教授を偲んで

平 林 冽 (39)

池田亀夫教授を偲ぶと、どうしてもお若い頃の柔道で鍛えられた頑丈で、大柄な温顔の先生を思い浮かべます。

小生の結婚式で先生から頂戴したスピーチは、岩原先生が当時よく揮毫されていた「鬼手仏心」についてであったと記憶しています。恩師から受けつぎ、ご本人も big surgeon としてこれを遵守し、後輩にもそれを託そうとされたものと理解し、小生も以後これをモットーに先生の足許にでも達しようと心に決めたものでした。

しかし先生の大胆で、しかも日夜を分かたぬ勉強に裏打ちされた挑戦的な big surgeon の域には到底及ぶ可くありません。先生は文献から得た知識を解剖書だけでなく、実際の屍体解剖によって直接確認の上、実行に移しておられました。酒豪でお酒もよく飲まれましたが、そのような日でも夜半には起き出し、早朝まで勉強されてから登校される由、当時、奥様より伺い、やはり自分の努力不足を反省させられたものでした。

教授に就任する直前、その時には影も形もなかった生化学的研究の端緒を開く可く、先生は大学院の学生を集

めて、早朝医局で抄読会を開くことから始められました。今も小生の書棚の片隅で埃をかぶったままの大学ノートが当時の猛勉ぶりをなつかしく思い出させてくれます。

生化学班の発足だけではなく、教室では当時まだ症例報告の域を出なかった O P L L の研究についても、現在に至る隆盛をすで見通すかのように、先生ご自身しっかり勉強され、我々若い者にも適切なアドバイスを与えて下さったものでした。やはり日頃からの猛勉の裏づけによって、教室の主宰者の資質として不可欠な先見性を立派に備えられていたと申せましょう。

先生には、ご自分で勉強して感じた疑問を我々若いものにつけて下さる癖がありました。先生が判らない疑問に我々若造が答えられる苦もなく、先生にあってものことでした。ところが、我々を刺激し、鞭撻すると共に、いわば自問自答することで疑問の本体を整理し、究明する糸口を掴もうとされていたのだと思います。その証拠に一向に答えられない我々のメンツも考えて、「ホウカイ、ホウカイ」といってご自身が納得した形で、いつも矛を納めて下さっていました。

脊椎腫瘍の全摘術、胸椎肋膜外進入法や横隔膜の処理法など、当時、他学では殆どやられていない手術を沢山

見せて頂きました。お蔭で学会では若造の小生に身分不相応な発言をも可能とし、その結果、他学からはいらまれても手荒な反撃をうけずにすんだものでした。

先生は又、大変率直な方で、若造が改良した前方固定用のスプレッターや開創器やケリソン・パンチなどでも素直に使って下さり、具合が良いとほめて下さったものでした。

ご存知ない方も多かもしれませんが、先生は頸椎の椎体亜全摘による前方除圧兼固定法の創始者であります。外傷例でしたが、破壊された中間椎体を亜全摘して頸髓の完全除圧を世界で初めて行つたのです。この術式は今でこそ国の内外で、退行性疾患に広く行われていますが、当時は air-trill もなく、精々単椎間 (the Smith-Robinson 法) か、Cloward 法だけでした。先生は、この亜全摘法をノミやパンチ、鋭把を巧みに使ってやっておられました。今、思うと、いささか恐ろしい気もしますが、そのようなやり方でも先生がやると不思議と増悪させることがなく、先生には卓越した技量とともに、なにか判りませんが、something といったものを備えておられるような気がしていました。それ以後この術式に我々が付け加えたものとすれば、移植骨片の脱転防止用の工夫くらいのものでしょうか。

当時すでに我が教室のお家芸になっていた腰椎の前方固定法は、経腹膜的には他の一部の大学で盛んにやられていましたが、先生には岩原先生の方式を踏襲され、それを腹膜外式にやっておられました。当然のこととはいえ、今やこの方式が国の内外を問わず主流となつています。しかしこの前方固定法はたしかに力学的には優れていますが、脊柱固定術のもつ宿命としてやはり偽関節の頻度が四〇%近くにみられ、術中出血量を減らす努力とともに、先生は何とかこの偽関節の発生を減らすべく、種々工夫をこらされました。そのひとつが椎間板前面の視野をいかに広く確保するかであり、いくつかの臨床解剖学的研究を展開されましたし、実際、術中の大胆かつ手際の良い手技にはいくたびも脱帽した思い出があります。その後、この術式に我々がつけ加えられたものとすれば、ノミを使わずに軟骨板をそぎ落とし、出血量を減らしたことと、それによって、一層懸念される偽関節の増加に対してワイヤー・タイトナーによる A—O 螺子締結を加えて偽関節の頻度を一〇%以下にまで減少させて得たことくらいでしょう。

今や、脊椎外科は instrument surgery の花ざかりです。先生が今少しお若ければ、きっとこの方面にも多大の興味を示され、大きな足跡を残されたに違いありません。

ん。

このように長い伝統と実績を土台として発展してきた教室における脊椎外科。小生自身もすでに若くなく、これからのさらなる発展は後輩に託するしかありませんが、学問に厳しく、日々努力を惜しまなかった池田亀夫先生の後姿は必ずや後につづく者にとっての鑑みとなり、先生はその若い後継者達に対して厳しくも温かい眼差しの中にきつと限らない期待をこめてその行方を見守って下さることでしょう。

最後に生前、先生から受けた数々の御指導に深く感謝申し上げるとともに、いつの日か先生の墓前に胸を張って報告できるような沢山の業績が教室から輩出されることを願いつつ、先生のご冥福をお祈りしたいと思います。

「池田亀夫教授の思い出」

山根 宏 夫 (40)

私共昭和三十七年入局の者は、岩原寅猪教授の晩年の弟子であるとともに、池田亀夫助教授、泉田重雄講師と、いわば教室の黄金時代に、偉大な三先生から、直接御薫陶を賜わることができた誠に幸運な学年に属するものです。当時は整形外科医の数もそれ程多くなく、全国の整形外科の教室の数も、現在の半数以下であった頃で、学会での岩原教授の権威たるや、若い僕等でも、はらはらする程強いものでした。大学院の二年生位の時に、例のサリドマイドによる「フォコモリヤ騒動」が起こり、催奇形物質が胎児に及ぼす影響が注目される契機になりました。当時の池田助教授はいち早く整形外科領域におけるこのことの重大性を認識され、当時この子供達が収容されていた重度心身障害者施設の「島田療育園」が、慶應小児科の関連病院であった関係で、私と加藤哲也先生にサリドマイド児の調査を命じられ、更にこれが発展して、「死亡例の解剖」、「内反手の治療」、「アザラシ肢症の幼小児の義手の作製」と進み、遂に我々の学位のテーマ「四肢の先天異常の発生に関する実験的研究」となりまし

た。すべて池田先生の発案、御指導によるもので、親身になって、細かいことまで相談のつて頂きました。三重県津市での先天異常学会で、旅館の和室に蚊帳を吊って一緒に寝食を共にし、学会発表と、常に行動を共にし、親しく池田先生の警咳に接することができ、今から思えば懐かしい思い出であります。一連の障害児の研究が、池田先生の第一回高木憲次賞受賞につながり、加藤君と二人で、少しは恩返しができたと言んだことでした。

教授になられる直前の池田先生の御活躍は誠に目覚ましい迫力あるもので、朝早くから夜遅くまで、六号一階の、あるいは「は号二階」の自室で勉強され、疲れるとフラリとは号の整形外科研究室に遊びに來られました。午後の三時頃、有馬君と浅井君（在ドイツ、42回）がお茶代りに一升びんをかかえて飲んでいるところを見つかったりしたこともありました。臨床面では、特に椎体への侵襲手術は当代随一といわれ、頸椎から腰椎まで、どのレベルでも得意とされ、北大・東大へも模範手術に招かれたりしておられました。私が主治医であった第三胸椎の腫瘍の患者の手術に際しては、そのアプローチが当時未経験であったため、心臓外科の井上講師、肺外科の吉松講師（当時）に集まって頂き、井上先生は胸骨を割って入る心臓外科のルートを、吉松先生は、開胸して

胸膜外的に椎体に達するルートを示され、結局、実際の手術では、吉松先生と一緒に入って、椎体側面に達するまで手術をお願いして、大成功を収めたことがあります。この時も、自分で納得する迄、何回も病理学教室へ通って、屍体に臨床解剖を試み、勉強されておりました。池田先生の手術は、泉田先生の器用で、丁寧な手術とは又、異なり、時には強引なと思えることもありましたが、度胸がよく、余計なことは一切せず、病巣に直達し、出来上りがいつもきちんとして決まって、迫力のある、気持ちのよいものでした。

いつも自信にあふれ「○○（ある医大）のヤッコさんには負けるわけないよ」というセリフをよく聞かされました。教授になられた直後の張り切り振りも又、ものすごく、朝七時からの医局での生化学に関する最新文献の抄読会には泣かされました。英語の論文を読むのには、自信があるつもりでしたが、とにかく新しいことばかりでチンプン、カンブン、自分で抄読して理解できないものですから、聞いている先生方にわかる筈がなく、よくおこられました。これが実って、今日の新名教授、中川先生以下の教室の生化学の業績があるわけです。

池田先生の比稀なる資質に、学問の進歩に対する先見性、新しいことに対する興味、人一倍の好奇心、対象の

幅の広さ、進取の気性が挙げられると思います。凡人の及ばない、気力・体力・知力に恵まれたことが、あのオーラウンドプレイヤーを作り上げたと思われれます。教授になられた最初の三年間は、弟子からみれば、馬車馬の如き、疾風怒濤の三年間で、機関車がどんどん先へ行き、我々は、フウフウいいながら、後ろからついて行くのがやっとという状態でした。今から思えばもっと御自愛され、血圧を含め、お体を大事にされておればと悔まれます。お元気の時の御活躍が華々しかったため、病気に倒れたあとには、医学部改革の嵐とも重なり、弟子供にとりましても誠に寂しいもので、御自身も、さぞかしいろいろな面で思うようには、いかず御無念であったことと
思っております。ことに、発作が重なり、意識障害が重く、識別力もなくなれてからは、御見舞に行く方も気が重く、ただただ陰ながら御回復を祈る毎日でした。

先生の残された業績は偉大で、単に教室だけでなく、学会全体に、永く語りつがれ、貢献されることに間違いない
ありません。

先日、お久し振りに、昔と変わらずお元氣な奥様の温顔に接し、何かほっとするとともに、三十年前にタイムスリップし、もう一度、あの活氣にあふれた昔の医局生活に戻りたいような誘惑にかられました。筆をとりますと、

思い出は盡きなく、ありし日の先生のいろいろなお姿が走馬燈のように頭を馳せめぐり、淋しさがつのるばかりです。

池田亀夫先生、ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。心から御冥福をお祈り申し上げます。合掌。



池田亀夫先生のおもいで

土方 貞久 (41)

私が池田先生にはじめて親しくお話しさせていだいたのは、学部四年の時に先生が私達のいわゆる懇親会グループの指導を担当され、東中野の御自宅に私達五、六名の学生がお招きいただき御馳走していただいた時であつた。

この頃の先生は柔道部の部長もしていらしたが、まことに威風堂々の御体格であり、そのお話しぶりも磊落であり、先生の故郷の名産である下仁田のネギなどを御馳走になりながら、ローマオリンピックのチームドクターとしてのおもい出話などをうかがい、誠に意気軒昂の御様子であり、授業中の印象とはまた一味ちがうものであつた。

そうは云つても学生の懇親会でのおつき合ひでありそれ以上のおつき合ひもなかつたが、昭和三十八年、整形外科入局以後は本当にさまざまの御指導をいただくこととなつた。

云うまでもなく当時の整形外科教室は、岩原先生の絶対君主制とも云える時代であり、池田助教授、泉田講

師のお二人でさえも岩原先生の前では随分と気を使って居られる御様子であり、最近の教室の雰囲気からみると今昔の感に耐えない。

そんななかでも、池田先生の脊椎外科、泉田先生の脊椎外科は教室の看板であり、私達フレッシュマンも何となく誇らしく感じていたものだった。

当時、岩原先生御自身も骨端線などのテーマから再び脊椎、椎間板などの問題に回帰されていらした時期でもあり、私達の先輩、同級生などには膝関節のテーマのほかに脊椎関係のネーベン、ハウプトが多く与えられていた。

そんななかで、私にもフレッシュマンの十二月に椎間板関係のネーベンが与えられたが、その手術標本は池田先生が一塊の摘出標本としてとって下さり、論文作成に關してもいろいろ御指導をいただいた。

ひばり学園、塩原温泉病院の出張から帰局した二年生の十二月、岩原先生から椎間板損傷の修復機転に關する実験的研究なるハウプトを頂戴しいよいよ主論文に向けての研究生活に入ったが、昭和四十一年五月に岩原先生が停年を残して村山療養所の所長職に転出され、十二月に池田先生が後任教授となられた。

後任教授としての先生は、まず岩原教授の与えられた

テーマの見直しに着手されたが、あるものにはその続行を、そしてあるものにはテーマの変更を指示された。

私自身はまだまだ道半ばであったが、岩原先生のテーマの継続を希望しお許しいただいた。

その後約一年半、台東病院から毎日のように有馬君と当時の「ろ号下」の研究室に通ったが、当時「ろ号」の二階にいらした池田教授が夜遅くふらりと研究室に姿を見せられ、私達の実験の進み具合を御自身で御覧になり激励の言葉をいただいたことは、どれほどの励みとなったか判らず、後年私が及ばずながら後輩の先生方の研究の指導をするさいのひとつの接し方とさせていただいた。

昭和四十三年四月岡山の日整会でのハウプトの発表をおえて、五月から高岡市民病院の出張を命じられたが、その夏の西太平洋整災学会に池田先生が私の主論文の要旨を発表されたのでとその準備を命ぜられた。

その夏の或る日、この件で高岡から慶應の教授室にお電話を差し上げたところ、思いもかけず電話口には矢部現教授が出られ、理由も判らないまま、準備だけはすすめるように云われた。後で判ったことだが、この日池田教授が最初の脳血管障害で倒れられ、矢部先生以下が善後策を話し合っていた最中であつた。

結局、伊勢亀先生が池田先生の代役をつとめられると

のことで私のスライド、原稿は伊勢亀先生にお渡しした。幸にも池田先生の回復は早く翌年には臨床にも復帰されたが、往時の威風堂々の御様子からは遠いものであつた。

昭和四十四年五月、池田先生から帰局を命じられることとなつた。その帰局第一日、教授室に呼ばれ、腰部椎間板症をはじめとする腰痛の問題を担当するようにと命じられたが、そのさい、「三年間時間を上げるから頑張りなさい。そしてそれで駄目なら辞めてもらう。」とのお言葉をいただいたことは忘れられない。大変な機会をいただいたと同時に先生の教室作りの厳しさを身をもって体験させられた。

腰痛のほかにもうひとつ池田先生からいただいた御好意としては、当時発足したばかりの「側弯症研究会」への千葉大学井上教授からの案内状を私に下さり、第二回の研究会に出席の機会を与えられ、その後の実験側弯症への道を進む端緒ともなり、現在大谷、鈴木信正先生と共に同研究会の幹事の末席につかせていただけるとは、池田先生が教授就任とともに骨腫瘍や生化学のグループの育成に着手され、それぞれ学会に数々の業績と人材をおくり出していることと併せて先生の教室作りの成果に他ならない。

昭和四十五年夏、折りからの医学部改革の影響で池田先生は教育主任職に専念されることとなったが、大学院医学研究科の委員として教室員のために尽力されていた。

昭和五十三年秋、医学部に再改革の動きがあり、泉田、池田両教授が話し合われて、池田先生が教室主任となられることとなったが、わずか二ヶ月半のうちに外来診察中に再度の脳血管障害の発作に見舞われ、その後はついにお仕事に戻られることはなかった。

池田先生が復帰される見込みがないとのことで昭和五十四年の春からは泉田教授が再度教室を主宰され、日本整形外科学会の会長もつとめられ、昭和六十一年度からは矢部先生が教授となられ、三年後には再び慶大整形外科学教室から学会会長が生れることとなった。

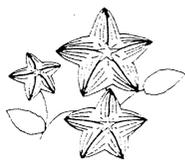
去る七月二十四日の池田先生の教室葬では、第一線を退かれてからの長い年月にもかかわらず、あれ程盛大の御葬儀となったことは、今は亡き岩原、池田両先生はじめ、泉田、矢部先生など歴代の教授のみならず、各分野、職域で活躍された諸先輩の御努力の結果に他ならないと感じているのは私ひとりではあるまい。

私も入局三十年を過ぎ、その間教室内外のさまざまな出来事を見て来たが、今回ここに記させていただいた池田先生はじめ諸先生方の教室に対する愛情と御努力は並

大抵のものではないと感じている。

今は亡き池田亀夫先生を偲ぶ時、教室の若い先生方が、諸先輩の御努力を無にすることのないように、それぞれの持場で、御自身のためだけでなく、教室の将来を見据えて努力されることを切望して池田先生追悼の一文としたい。

池田亀夫先生本当にありがとうございます。御冥福を心からお祈り申し上げます。



池田先生のご病状経過報告

岩田清二 (41)

横浜の自宅にいた小生に主治医の添田医長より、池田先生ご危篤の電話が入ったのは、七月三日午後九時半過ぎであった。直ちに、矢部教授、堀内医局長に連絡し、月ヶ瀬に戻る支度中、折り返すようにご臨終の報告があった。

この四月、所長就任後間もなく、奥様が来院され、最後まで面倒を見て欲しい旨がお話があり、お約束をしておりましたが、このように早くその時が来ようとは思ってもよらないことでした。

先生のご病状については、毎年同窓会総会の席上、斉藤前所長より報告されておりましたので、最近の経過について報告いたします。

昭和六十三年四月十二日慶應義塾大学月ヶ瀬リハビリテーションセンターに再入院された当時、不整脈は認められるものの、バイタルサインは安定しており、呼吸掛けに対し手を握り返されるほどの反応がみられ、奥様がお見えの時、特に、お孫さんのお話をされると、非常に嬉しそうなお顔をされていたそうですが、最近では、調子

の良いときに辛うじて眉を動かされる程度にまで、意識状態は低下しておられました。就任直後にご挨拶に伺ったとき、僅かに瞬きをされたような気がしましたが、付添婦によれば、先生にはお解かりになられたとのことでした。

平成三年一月三日、急性呼吸不全のため気管切開が施行されましたが、前からあった腹部大動脈瘤は徐々に増大し小児頭大となり、腸管を圧迫し、貯留した腸内ガスのため横隔膜が押し上げられ、亡くなられるまで、年一〜二回肺炎様症状を起こされ、その都度、なんとか凌いでまいりました。

また、数年前より、ときどき呼吸欠滞がみられ、この四月頃からは無呼吸時間が延長してきておりましたが、血液ガス等に異常はなく、EKGも安定しておりました。七月二日午後より三七・五℃程の発熱がみられましたが、翌三日には解熱し、特に、お変わりないご様子でした。

七月三日午後八時頃、いつものように左側臥位に体位変更した際、嘔せられたため、喀痰吸引を行いました。吸引中に努力性呼吸となり、チアノーゼが出現し、血圧測定不能となったため、直ちに、心マッサージ、酸素吸入、イノバン点滴などの蘇生術を行い、一時的には血圧

が一〇〇／四三となるも、八時三〇分には再び四二／〇と下降し、測定不能となった。人工呼吸器を接続し、蘇生術を継続施行するも、反応はみられず、九時四五分帰らぬ人となられた。

夜半過ぎ、小生が病室に着いたとき、先生は静かに眠っておられるような、穏やかなお顔で、今にも目を開けて、「おい、岩田君。」と話しかけてこられそうな気がいたしました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

池田亀夫先生とわれわれ入局当時のこと

有馬 亨 (42)

池田名誉教授の御逝去にあたり心よりお悔やみ申し上げます。

先生の追悼をかねて思い出話を二、三書かせていただきます。われわれ四十二回が入局したころは岩原先生がまだ現職教授であってその下に池田助教授、泉田講師がおり、松井先生が医局長で取りまとめ希望を受けていたようです。教室のシステムは岩原天王制で単純明解でした。とくに研究班の体制はなく脊椎外科が主体でした。池田先生の印象もこの方面に偏りますがご容赦ください。

*当時の脊椎前方手術のこと

その頃の教室は脊椎外科の中でもとくに前方固定術が教室のお家芸として盛んに行われていました。池田先生は腰椎の前方固定がとくに得意でその適応は椎間板症、迂り症はもとより分離症まで行っており、また頸椎や、アプローチとして難しい胸腰椎移行部までこなしていました。

池田先生の手術は豪胆にして、なかなか繊細なことはよく知られています。前方固定の際、時には腹膜を破いたり、血管剝離のさい出血がかなりのもありましたが、先生は解剖学的によくご存知で修復方法も慣れていました。また採取した腸骨片を落としたときも慌てず煮沸消毒させて使っており、われわれは助手をしていてスムーズにいく手術よりも何かが起こった方がよい勉強になりました。

以前、池田教授退任記念号の「ふるさと」に書いたことがありますが池田先生の手術で今でも思い出される症例があります。胸椎血管腫とはつゆしらず巨細胞腫の術前診断で開胸して第10胸椎椎体腫瘍にリニールを敢然と入れたとたん、突如血しぶきが上がり慌てて手で押さえました。総出血量は一万ccに及んだが腫瘍摘出の目的は達せず、術後の血胸は続き、さすがの池田先生もこの時ばかりは参ったようでした。

しかしその当時は大学といえどもまだ脊椎の血管造影技術すらなく、また今日のようにCT、MRIは勿論ない時代で画像診断はX線のみでした。出血対策にしても塞栓術もなかったので術中に氷嚢を使うくらいのもので、手術の成功如何は術者の腕一つにかかっていました。この頃、椎体血管腫に対して前方侵襲の椎体置換術が出来

るのは国内では池田教授以外にまだ何人もいない時代であり、出血量の一萬、二萬ccは当たり前でした。それでも捻げず敢行していた池田教授の度量は見上げたもので、学会でも高く評価されていました。

*脊椎外傷の手術のこと

昭和四十二―四十三年の池田教授は脊椎外傷に対しても前方侵襲の手術に積極的で、関連病院でも時々手術をしておられたのを記憶しています。筆者が芳賀日赤病院に行っていたとき柿の木から落ちた年寄りの女性に遭遇しました。胸腰移行部の脱臼骨折による完全麻痺であり早速大学の池田先生に連絡したところ、これから行くから手術の用意をしておくようにということで、そのころ四―五時間は東京からかかりましたが到着を待ってその夜緊急手術となりました。手術は前方後方の同時進入でまず後方より整備後、前方固定を行いました。術中の脊髄損傷程度はひどく回復の期待は薄かったのですが、麻痺の程度にかかわらず早期手術は早期リハビリのために必要であることを教えていただきました。以来私は完全麻痺といえどもなるべく早期に整備固定術をすることをモットーとしております。

*カリエス患者の摘出肋骨移植のこと

脊椎前方固定の移植骨については通常は自家腸骨片を用いていましたが池田教授はときにヒト肋骨片をどこから持ってきて使っていました。これは池田先生が助教時代に村山病院でよく脊椎カリエスの手術をしていたらしく、その肋骨を持ち帰りストマイ液につけて冷蔵庫に保存し、これを椎体置換術に移植骨として使っていたのでした。しかし岩原教授はあまり面白くなかったらしく回診時にみつけると、また池田君はカリエスの骨をまた使っておる”と怒っていました。そのころまだ同種骨を使うことは少なく、またカリエスの肋骨を使うのもあまり気持ちのよいものではないのですが先生は心配ないと言って使っていました。しかし岩原先生の前では一言もなかったようでした。

その後、椎体置換術に用いた肋骨片が後療法中に骨折して後弯変形を作った症例があったのを機会に、カンフアレンスで先生に伺ったことがあります。ついてしまえば移植骨の種類には関係ないご自分の信念を強調していました。しかし骨癒合までの後療法段階で腸骨のようなしっかりした骨と強度の差があるものと私は考えており、それも肋骨の椎体移植はしたことがありません。

*改革当時のこと

医学部の改革の波は整形外科にも押し寄せてきました。診療、教育、研究の三部門に分かれ泉田教授が診療科長・運営委員長となり池田教授は教育主任として教室内の臨床から離れました。このことはその後の教室に大きな波紋を及ぼすことになりました。そのため臨床家であった先生は大学での手術症例が減り専ら関連病院の外回りの手術で、不満もかなり溜まっていたようでした。その後、昭和五十三年教室会議が開かれ選挙で教室主任に帰り咲きましたが、教室員にとっても後味の悪いものになりました。しかし新たな体制を目指したものの、整わないまま約半年で病に倒れ復帰出来なくなったことは運命のいたずらとしか言いようがありません。

*結婚仲人のこと

岩原教授退職後は池田教授がその役となりました。われわれ四十二回生は大半が昭和四十四―四十五年頃に仲人のお世話になりました。その頃池田先生は軽い脳卒中の病み上がりで心配されていましたが、ご本人はダイエツトで体重も減らし至って元気で安心しました。菫山温泉病院のリハビリ治療でゴルフもかなりやられた様子でした。われわれ同級は先生の快復を待ちかねて既に結

婚していた浅井、西郷を除き、佐々木、真崎、稲垣、富田、熊谷、樋口と順番は忘れましたが立て続けに行い最後にもお世話になりました。

*おわりに

昭和五十四年脳幹部出血で倒れられて以来、野間院長の頃、国立箱根病院に長く入院し、その後慶応月が瀬リハビリテーションセンターに転院して斎藤所長の看護のもとにまた長らく入院していましたが、この度新しく同センター所長となった岩田先生の見守る中ついにご世界されました。われわれ門下生にとってまことに残念ですが、先生を持ち前のバイタリティー故に十五年という長い闘病生活に耐えてこられたものであり、また奥様、ご家族の看病の努力に敬意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

池田先生の思い出

小林 慶 二 (74)

私が整形外科教室に入局した昭和四十年当時、池田先生は岩原教授の下で助教授とし精力的に学問に励んでおられた。入局間もなくして、我々四十三回生フレッシュマンは、先生から一冊のリハビリテーションの洋書を渡された。「この本を抄読してみろ」とのお話があったように記憶している。この本を私がお預かりしたまま一ヶ月余りが過ぎた時、私自身が十二指腸潰瘍ようにかかり長期の療養を強いられることとなった。自宅でひたすら安政に努めるばかりで、同期の皆から取り残される不安で、いらいらしていたところ、医歯薬出版社から原稿用紙が多量に配送されてきた。「池田先生からお聞き及びと存じますが、先生がお持ちの本は先生に翻訳して戴くことになりましたから宜しく」との手紙が同封してあった。こんな話ではなかったので、先生に問合させたところ、「君は暇を持て余しているようだから訳してみろ。僕と共訳ということで印税が君に行くように計らうから頼む」の一言であった。整形外科の知識はほとんどないし、英語の論文など読んだ事もないフレッシュマンの分

際ではと思ったが、二〇〇頁足らずの本を暇にまかせて
曲りなりにも翻訳し、先生に校閲していただき完成した。

岩原先生に推薦文と「機能訓練の進め方」漸増的運動
療法」というタイトルを戴き、池田先生との共訳という
ことで昭和四十一年に出版の日の目をみた。思えばこれ
が先生と私の縁の始まりであった。お陰で英語の読解力
は大分ついたし、印税もかなり入り、無給時代の私には
随分生活の助けになった。

その後一年間のフレッシュマン出張を終えた頃、先生
が教授に就任された。教室へ帰ると早速、副論文のテー
マを先生から戴いた。池田教授第二号のネーベンと記憶
している。タイトルは「第四腰椎椎体Fibromaの手術
治療」であった。直ちに骨腫瘍の勉強に取りかかった
が、骨腫瘍の分類に異なるFibromaというCLINI-
CAL ENTITYはなく、Chondromyxoid Fibromaと
かDesmoplastic Fibromaとか、Non-Ossifying Fi-
bromaとかばかりで、ごうしたものかと悩み続けてい
た。病理の入先生に度々相談に乗って戴いて、この症例
は今までの「…Fibroma」に属さないということでは
「Fibromyxoma」で落着いた。池田先生は私にネー
ベンを出してからは、廊下などでお会いする度に論文は
まだかまだかの催促で、思えばこの頃から私に目をかけ

て下さっていたのかと感謝している。論文を仕上げで発
表したところ先生は大変喜ばれ、臨床整形外科の視座で
Fibromyxomaという新しい骨腫瘍をClinical en-
tityにしよと提案されたのには恐縮した次第である。

副論文が完成すると教授室に呼ばれて、学位論文の
テーマを戴いた。題して「いろいろな頭位における頸椎
損傷の発生機序に関する実験的研究」である。津布久君
(四十三回生同期生)が既に始めているので一緒にやる
ようにとの事であった。うさぎを使って実験を繰返した
が、うさぎでは頸椎損傷がほとんど起きず、途方に暮れ
ていたところ、先生から軸椎菌突起骨折の臨床データを
まとめてみるとこの指示があった。実験と並行してこのネ
ーベンをやっているうちに実験では時々菌突起が折れる
し、臨床データと一致するところがあるようだという事
が分ってきた。そこで意を決して先生に「先生の出され
たテーマではとても出来ませんが、上位頸椎がテーマな
ら何とかかなりそうですので、テーマを変えて下さいい」と
内心びくびくしながらお願いしたところ快く承諾して
下さった。

学位論文の仕上げの頃になって、先生がどこの雑誌
社に依頼されて上位頸椎の原稿を書かれた事がある。そ
の論文を見せられ、我々の学位論文の主要な部分を書か

れているのに驚き、これが世に出れば我々の論文は駄目になるなと思った。津布久君とどうしたものかと思んだが、思い切って二人で教授室に出向き、先生にこの旨を伝えると先生は、「よくわかった」といわれて、我々の目の前でその原稿を破り捨てられた。その時、学位をとった後は上位頸椎の仕事については、先生のために出来るだけの事をしようと心に誓った。

今と違って当時は主論文は勿論の事、副論文も教授が出したものでないと認められない時代であったが、軸椎歯突起骨折の論文が完成した後は津布久君と私で勝手に上位頸椎の論文を交互に書いては先生の所へ持って行くという従来の慣習を破る事をやり始めた。先生はこの事には全く意に介されず私達に自由にやらせて下さったお陰で、私達の研究意欲がどれほど出たか計り知れないと感謝している。そして昭和四十六年の終わり、七年生で津布久君と同じ時期に学位を授けられた。ネーベンと同じく、この学位が池田教授が指導された第一号となった事にも先生との縁をつくづくかんじている。

学位授与の翌年、昭和四十七年金沢での日整会総会で先生が「上位頸椎損傷の治療について」を発表される事になった。臨床データは私が全部持っていたので、それを先生にお渡しして発表原稿を書いて戴き、私がスライ

ドを作る役目を担った。先生は「小林君、原稿を書いたから見てください」と発表原稿を渡された。読んで見ると大分直さなければならぬ部分があったが、七年生の立場で教授の原稿に筆を加えることにちゅうちょしたが、思い切ってかなり直して先生にかくの理由で直させて戴きましたとお返しした。無事発表が終わり、先生がよく手伝ってくれたからと、所属しておられた桜ヶ丘ゴルフクラブへ連れて行って戴き労って戴いた思い出がある。それからもコペンハーゲンでのSICOTの発表や日本各地での講演、依頼原稿など、その都度お手伝いさせて戴いた。

話は変わるが、昭和四十年頃の日整会総会だったと思うが、先生は宿題報告で脊椎の前方侵襲について発表されたが、上位頸椎に対しては現時点では我々は組まないと結んでおられた。その直後、Fang & Ongによるtransoral approachの論文がJ.B.J.S.に発表されたが、岩原先生のお許しが得られなかったと、日本でのこの手術は東大の津山教授に先を越され、随分悔しい思いをされたようである。教授にならなれたから早速transoralの手術をやらせられ、症例を重ねられていた。私は臨床経験を積みたいと思い、最初の頃は症例を見付けては先生に報告し、カバンならぬエアードリルを持って先生

にお供して地方の病院へ行って手術をして戴き、術前、術後の管理や follow up を私が行なうという具合で、大学病院でも同じ事をやっていた。そろそろ私も transoperative をやってみたいと思い、例によって症例を見付けては先生に報告すると「今度は僕がやるよ」の繰返しで、結局先生の指導でやる事はできなかった。が、お陰で助手として随分手術に立会い、その後独立して transoral をやるようになって大いに役にたった事は事実である。

振返ってみると、先生が日本で初めて上位頸椎に着眼されて、津布久君と私の二人に思う存分やらせて下さったお陰で、手前味噌ではあるが、一時期上位頸椎の臨床に関しては慶應が群を抜いたレベルに達していたと思う。そして私自身もライフワークといえる仕事ができた、今も先生に対する感謝の気持ちを持ち続けている。

昭和五十三年六月、私は都立大久保病院へ出張を命じられた。先生は当時教育主任という閑職に就いておられたので、時々大久保病院へ遊びに来られていたが、随分寂しそうであった。その頃、胸腰移行部のカリエスの手術を教えて戴いたのが、思えば先生に助手になって直接指導して戴いた唯一の手術になってしまった。大久保病院へ着任して数ヶ月して教室を二分するような選挙が行われ、結果は池田先生が教室の代表になられた。先生は早速私

に医局長として慶應へ帰って来いと言われたが、大久保へ来て数ヶ月しか経っていないので都に対して申し訳ないからと理由を付けてお断わりした。その三、四ヶ月後かと思うが、先生は外来診療中に倒れられ再起できない体になられた次第である。その時私が医局長を引き受けていたら自分の人生は随分変わっていただろうと、池田先生に対しては勿論のこと何とも複雑な気持ちである。

病床にふされた先生を時々見舞っていたある時、私に盛んに同じ事を繰返しておっしゃっているのに気づいた。何の事か判らず、暫くの間、口唇の動きや表情等を観ているうちにやっと理解できた。「お前は何故大久保病院へ出たんだ」とおっしゃっていたのである。今でもこの言葉を思い出す度にやり切れない気持ちになる。

フレッシュマンの時に先生と共に共訳ということを出したことが、最初のネーベンを誉められたこと、先生が書かれた論文を破らせたこと、先生の原稿を直したこと、助手として Fessenden の手術をお手伝いしたこと、また「きみの球はよく飛ぶが、よく曲るな」嫌味を言われながら何回かゴルフのお供をした事等、つい昨日のことのように懐かしく思い出されます。

最後に、先生のご冥福と奥様をはじめご家族のご多幸を心からお祈り致します。

池田亀夫先生と慶大整形外科学化学班

新名 正由 (44)

池田亀夫先生は、長い闘病生活の後、平成五年七月三日、遂に永眠されました。生来、頑健であられた先生が、昭和四十三年突然倒れられてからの二十五年間は、完全に恢復された僅かの期間を除いて、病の床に臥せられる事の多い毎日でしたから、御令室様はじめ御家族の思いは如何ばかりであったかと推察されます。

池田先生が慶応大学医学部整形外科学教室の第四代主任教授になられたのは、昭和四十一年十二月でした。我々四十四回生は同じ年の三月にインターンを修了し、期待をもって整形外科学教室にはいったので、偶然池田整形の誕生と軌を一にした訳です。水島斌雄君と私は、岩原寅猪先生の最後の大学院生でしたが、そのような事情で、学位のテーマは池田先生から頂きました。その後、全国の医学部に吹き荒れた改革運動のおおききを受けて、整形外科専攻の大学院生は数年前迄おりませんでしたから、池田先生の最初で最後の大学院生になってしまいました。そのような意味でも私達は池田先生の数少ない門下生の一員と言うことが出来ます。

池田教授が打ち出された主要な方針には二つあったかと記憶しています。第一の方針は臨床に関するもので、関連病院も含めた整形外科ベット千床余を有機かつ統合的に利用し、臨床研究を幅広く行おうとするものでした。第二の方針は基礎研究の重視でありました。先を読む能力にきわめて卓抜し、かつ実践力をも伴っておられ、助教授時代迄にも、手の外科、骨腫瘍、リハビリテーションなどの重要性を予見され、率先して勉強されておられ、今日それらが大きく発展していることは誰しも認めるところであります。そんな先生が基礎研究のなかで、まず注目されたのが生化学でありました。「形態学だけの時代は終わった。骨や軟骨の成分とその機能を明らかにする必要がある。従って生化学的研究が重要だ。」といつも我々に説かれておられました。最初に始められたのが、週一回、朝七時からの勉強会でした。大学院生を集めて開かれたこの勉強会で取り上げられた単行本は文字通り「Biochemistry of Connective Tissue」でした。コラーゲン、エラスチン、ムチンといった聴きなれない生化学用語と亀の甲に、大変戸惑い、発表の順が廻ってくる、毎日図書館で辞書と首っぴきで、四苦八苦しながら英文和訳を行ったものです。学院一年生の私達以上に先輩諸兄には辛い勉強会だったろうと推測致します。

富士川恭輔先生(43)が、生化学に関する学位テーマを拝受した第一号でした。医化学(故関田教授)への学内留学を命じられ、ヘキソサミン定量法の確立に取り組みました。それから約一年後、水島君とともに四カ月間の医科学教室への出向を命じられました。水島君は「骨コラーゲンについて」、私は「骨のアミノ酸について」という学位テーマを頂きました。時を同じくして、当時川崎市立病院整形外科部長の菅野卓郎先生が、日本リウマチ学会のシンポジウムにおいて、慢性関節リウマチにおける骨萎縮の生化学を担当することとなりました。富士川先生と我々がそれに協力することにより、さらに四十三回の斎藤守先生、森田孝文先生、横山みどり先生も助っ人として生化学研究に加わることになりました。話は相前後致しますが、四十二回の関宏先生、真崎裕介先生がその頃、既に椎間板老化の生化学を始めておられました。

当時、整形外科の研究室は「は号棟」にありましたが、勿論生化学が行える研究室ではなく、我々は医化学の地下の研究室を一室拝借して、少しずつ器械や器具を揃えていったものです。研究成果は、月一、二回行われた生化学班のミーティングで発表されました。池田先生、菅野先生が出席され、骨のヘキソサミンやハイドロキシブ

ロリン含有量の加合やRAにおける変化が発表されました。当時、私達は医化学教室の桜田先生、間宮(当時臼井)先生や助手の先生方に随分迷惑をかけながらも、熱意と馬力だけで、研究に熱中しておりました。当時の整形医局の先輩からは、臨床にはまるで役にたたない「ヘミ一班」とかけ口をたたかれながらも、何ら気にすることなく、夜にもなれば毎日、医化学の地下の研究室に集まったものです。今にして思えば、これは池田教授の生化学研究への熱い想いが我々にも乗り移ったものと思われます。

菅野先生のシンポジウム発表も無事終了し、落ち着いた研究ができるようになって、早くも壁にぶつかってしまいました。骨や軟骨の生化学は当時全く「マイナー」で、生化学者にもそれらを扱う研究者はほとんどおらず、試料の作製から始まり、すべてが試行錯誤の連続でした。そのような時、薬研の稲山誠一(特)先生を通じて、東京医科歯科大学医学部、硬組織研究生化学の永井裕教授を紹介されました。永井先生はハーバード大学のJ. Gross教授のもとでのコラゲナーゼの研究をされて、帰国され、着任されたばかりでした。ハーバード大学のM. Glimcher教授が「Treatise on collagen」の三冊におよぶコラーゲン専門書のなかで、骨のコラーゲンの綜説

を書いているのを読み、Glincher教授のもとに留学したくて、相談にいったのでした。永井先生は私の生化学における実績を聞かれ、とても紹介出来るレベルではないと判断されたのでしょうか。ともかく、ここに一、二年来たかどうかと勤めてくれました。当時は、基礎のしかも生化学の教室へ整形外科医が留学することなど考えられもしない雰囲気でしたから、私も大分悩みました。そして意を決して、池田先生に留学のお願いに参りました。池田先生は私の話を聞いてしばらく考えてから、「私も研究を発展させるにはそれが一番良いと思うが、整形外科医としては大分遅れをとるぞ」と言われました。「遅れても整形外科医になれますか」と伺うと、「それはその気さえあれば大丈夫」と答えられましたので「それでは参りますから、永井先生にお願いに伺ってください」と頼みますと、「いいよ」と答えられ、すぐに永井研究室に同道して頂き、国内留学の話をもとめて頂きました。私の人生にとって、最大の転機はこの時だったと今もつくづく思います。

池田先生が最初に倒れられたのは、それからまもなくでした。そして大学改革の嵐の中で、医学部も騒然とした状態になり、そのため、留学中の私の事など余り医局内でも問題になることなく、かえって研究一途の日々が

送れたのは幸でした。余談になりますが、永井研究室には当時、東大理学部野田春彦教授の研究室からスタッフが来ており、理学部出身の若い研究者たちに、科学の素晴らしさ、面白さを十分教えられ、目からうろこが落ちて行く思いでしたので、一日でも長く研究室にとどまりたい気持ちが強かったのです。それから数年は永井研と慶應の医化学地下室の研究室を往復する毎日でした。暁雅太郎君、長沢正彦君(以上45)、中川智之、中川研二、生越英二君(以上47)達が既に生化学を始めていましたので、医化学の間借りだけでは手狭となり、教室のお願いしたところ、別館の医局の隣に二室を頂けることになり、改造し、生化学研究室はまがりなりにも完成致しました。へミ一班とかげ口をたたきながらも、心底では理解し支援して下さった慶大整形の諸先輩の理解があったからこそでした。その頃、池田先生は、既に病から相当回復されておられました。余り積極的には何もおっしゃいませんでした。むしろ、私達の方から出向いて報告する事が多かったように思います。そのような状態にはがゆい思いを抱いて、塩原温泉の旅館の一室でお酒を飲みながら、津布久先生と一緒に、以前のあの強烈な指導性を發揮してほしいとお願いした事もありました。大変穏やかになられたのも、病の為せるわざかと残念に思ったもの

です。私はその後、帰局することもなく、国立村山療養所に勤め、岩原先生のお世話でシドニー大学整形外科 Raymond Purves Research Labsへ留学、そし帰国後、思いもかけず、防衛医大に勤めることになりました。昭和五十二年十二月、防衛医大病院の開院式には池田先生も出席して下さいました。私の防衛医大への出向については大変心配して下さい、数々の御忠告を頂きました。その御忠告は十五年余を経た今、全心的を射ていたことを、身をもって知りました。一見豪放磊落、細かい事には無頓着で、「ホーカイ、ホーカイ」で万事が結着といった印象を与える池田先生でしたが、事実は全くそれとは逆でありました。

防衛医大の開院式から数カ月後、外来診察中に池田先生は二度目の発作を起こされ、それ以降、とうとう最後迄、意志の伝達は困難のまま逝かれてしまいました。私にとって、防衛医大の廊下を歩きながら与えて頂いた貴重な御忠告が、最後のお言葉でした。そしてその御忠告がなかったら、現在の私はなかったかもしれないと思えるのです。

池田先生の御逝去を最初に知らされたのは、バルセロナのホテルの一室でした。静寂の午後のホテルの窓から青い空と木の緑を見つめながら、遂に池田先生も安住の

地に旅立たれたことを想い、むしろほっとした気持ちが致しました。池田先生が教授になられた時の決意を御自分で成就することができなかったのは無念と思われませんが、御元気であられた僅かの期間に育てて頂いた「へミ一班」は今も存続し、その意志は受け継がれております。私も防衛医大の教室責任者となり、今後もこの道を進むつもりです。人生の岐路にたった私に適確な指針を示して下さいた池田先生は、実際に御教授頂いた日々は短くとも、私の生涯の師であり、御意志のいくらかでも受け継いで行く決意でありますので、御安心下さいますよう。池田亀夫先生、安らかにお休みください。

池田教授の教授選考委員会の日の思い出

三 笠 元 彦 (44)

我々四十四回生は岩原教授の最後の弟子であり、池田教授の最初の教え子です。ということは我々がフレッシュマンの時に、教授選考会があったことになりました。確か昭和四十一年十二月X日の午後でした。対抗馬は東邦大学教授の西先生でした。野口講師が十一年生、矢部医局長が九年生、赤坂先生と伊勢亀先生が八年生、池田彬先生が七年生、平林先生と芝田先生が六年生でしたが、皆、緊張して医局で待っていました。

その時、伊勢亀先生が私を呼びつけ、

「三笠、教授選考会を覗いてこい」

「教授選考会は何処でやっていますか」

「北里図書館の二階だ」

「覗いていて見つかったら、怒られませんか」

「おまえなら学生に見られるから、大丈夫だ」

「見つかったら、なんて言えばいいのですか」

「二階のトイレと間違えましたと言え」

「はい、行ってきます」

というわけで、私はしぶしぶ北里図書館の二階に出かけ

ました。

確かに、私は当時若く見えて、なかなか医局員にみたくれませんでした。

岩原教授は教授回診の時、私が前に立っていますと、

「プラクチカント君、よく見ておきなさい」

と学生と間違えていました。

矢部先生があわてて、

「いや、彼はフレッシュマンです」

と紹介してくれましたが、最後までプラクチカント君でした。

池田助教授も同様でした。

「インターン、インターン、前に出なさい」

と私を呼んでいました。

土方先生曰く、「おい、少しは出世したな」

私はおそるおそる北里図書館のラセン階段を上って、

二階へ行きました。右手にトイレがあって、左手に会議室がありました。そっと近づいて鍵孔から覗きますと、

医史学の大鳥教授と衛生学の外山教授の顔が見えました。

おふたりとも、何となくにこにこしていました。

医局へ走って帰り、伊勢亀先生に報告しました。

「大鳥先生と外山先生がにこにこしていました」

「よし、それなら、亀さんに決まった。大丈夫だ」

一時間後、電話がなりました。

「池田教授に決まりました」

すぐ、矢部先生が池田先生に電話をして、十分後に池田新教授が医局にきました。そして最初に言った一言が、たまたま、私が入り口にいましたので、

「おっ、三笠君か、わしもやっとなと君の名前を覚えてたな」。

池田教授には仲人もしていただきました。その時、いただいた毛布のおかげでふたりの子供にも恵まれました。あまりよい弟子ではありませんでしたが、六年前に月が瀬にお見舞いに伺った時、「三笠です」と言って手を出しましたら、意識のないのにもかかわらず、ぎゅっと握りかえして下さいました。ご冥福をお祈りいたします。



近況報告



- ① 近況
- ② 家族
- ③ 趣味
- ④ 医局に思っていること
- ⑤ 医局の思い出

井上雅夫 (20)

- ① 昭和三十年肢体不自由児施設信濃医療福祉センターを設立、施設長、理事として三十年間勤務、現在は名誉所長ですが、週一回は出勤しています。健康です。藍綬褒章(昭和53)、高木賞(昭和62)、日本整形外科学会功労賞(平成4年4月)をいただきました。
- ② 妻と二人暮らしの老人世帯、二男一女(皆社会人)、孫四人
- ③ 野菜作り(三百坪の畑に鋤で挑戦しています)、短歌(毎日歌壇に数回入選)
- ④ 東京医大に整形外科が新設されて、助教授として赴任してから、今は母校には知っている方も少く、足が遠のいてしまい申しわけないと思っています。
- ⑤ 戦地より帰り、焼野原の病院を見て呆然としました。外科から整形外科が独立して、岩原教授のもとで医局長を致し、焼残りの精神科の病室で診療し、少い病室を各科で取り合った苦い経験が思い出されます。



上 牧 恭 一 (23)

① 患者の年齢層が高令化して毎日お年寄相手に診療を続けています。昨年七月より娘婿の原洋二（慶大整形外科で研修）と一緒にやっています。

② 妻久美子、長男信と三人暮し。長女滋子（原洋二に嫁し孫二人）が隣に住んでいるので賑かです。

③ 洋蘭、山口先生（24回）の手ほどきを受けて始めました。他に能楽、書道、古文書に興味をもっています。

④ 「ふるさと」は昭和三十四年創刊号（始めは会員名簿も兼ねていた）より次第に内容が充実して来ました。教室の歴史として永久に残して世代の交替を超えて申し送られるもので、益々の発展を期待します。年一回の発行は無理かな？

⑤ 私の入局は昭和二十一年六月一日で始めての出張は昭和二十三年東京女子医大（大内教授）でしたが、教授以下三名という小世帯で余り大きな手術は無かった様に思います。午後、手術・ギプス等のない時は、時間を頂き解剖学教室の伊東俊夫教授の下で脊損患者の皮膚の汗腺の細胞学的検索の手ほどきをして頂きました。これは岩原教授から頂いたテーマで、後に箱根療養所の先生方にもお世話になり主論文となりました。

翌年日本鋼管病院に出張、医長は星野先生（16回）で野崎教授も週一回手伝いに来られていました。病院の性格上労災による比較的大きな外傷が多く、大変活気のある忙しい半年を過し急患の対応などいろいろな御指導を受けました。

この病院は工場の現場並に月給の他に能率給が支給され、結婚したばかりの我家の家計が短期間で潤いました。昭和二十六年に国立栃木病院に赴任することになり、私の医局の生活は終わりました。

当時岩原教授の方針（？）で医局で遊びの話は御法度、テレビ、車もなく金も乏しくては余り遊べなかつたかもしれませんが、昭和二十四年岩原教授の宿題報告「脊髄損傷の……」の研究部門の分担が昭和二十三年始めて医局員全員に決められていたので、学問志向の雰囲気があり皆よく勉強したのではないでしょうか。



金井 司郎 (24)

① 昨年は開業してから満二十五年になりました。そろそろ開業を終りにしようと考え始めました。開業する時の考えでは、卒業してから勤務医として二十年、開業して二十年たったら全部を止めようと思っていたのですが、何となく二十年を越えてしまいました。ある程度は市民の役に立ったと思います。ただ経済的には全くゼロ、これは始めから諦めていたことですが、終りに近づいてみると矢張り駄目だったかという思いです。

さて、止め方ですが、之が案外むずかしいようです。患者さんに迷惑をかけない止め方というのが。幸い？にして、後を引き継いで下さる方があり、あとは事務的なことだけと思っています。さて計画通りうまく運ぶかどうかです。

② 特になし

③ 特になし

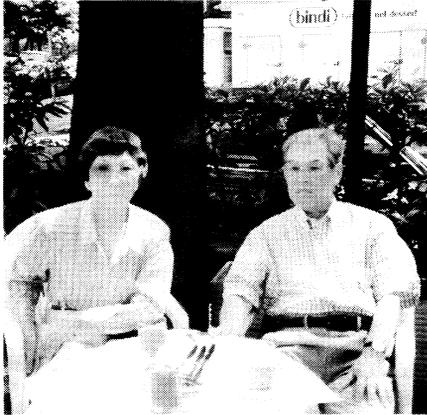
④ 私の知る限りでは特にありません。私のように漫然と年月を重ねないでほしい。

⑤ 昔のことを話すのは年をとった証拠なので止めます。



田 中 一 雄 (24)

- ① 整形老人科でお年寄のお世話をしています。港区内の身障者の方々のリハビリのお手伝いをしています。
- ② 妻・恵美小児科開業、長男・望大阪大学文学部教授、長女・久仁子ミラノ在住(今後一年間在日)
- ③ 陶芸(どろんこいじり)
- ④ 優秀な多くの後輩をのびのび勉強させてやって下さい。(老婆心)
- ⑤ いろいろ、いろいろありますが過去のものと捨てさりました。



岡 田 衛 生 (26)

- ① 昭和三十四年十月に「故郷」創刊号が発刊されてより三十余年の間、同窓会諸兄弟の絆である「ふるさと」紙上に数回私も投稿して来ましたが、同窓会々員名簿(平成四年度版)によると、六百八十余名の会員の大世帯に成長して心強く感じ且、教室のニュースでは、矢部裕教授の統率の下に研究施設の完備の体制で、研究班、診療班が新機軸を目標に奮闘され、多数の関連病院の勤務医、各地の開業医のスタッフと連繋して、慶大整形外科教室の和と伝統の精神で、一流の誇りを顕示されてる事と確信しています。
- 小生は昭和二十年代より日本鋼管病院、立川共済病院、大田原赤十字病院での約四十年余の勤務医生活で、教室の多数の新進気鋭の同窓諸兄弟と勉学を共にし親交を深められた事と、御指導をうけた恩師の存在を私の財宝と考えております。
- 現況は、豊島区の自宅より西武池袋線にて埼玉県入間市の新装改築された豊岡第一病院(山根宏夫院長・40回)で、臨床の一部を担当し、地域からスポーツ外傷や腰痛症の診療に年令を忘れて対応しております。
- 趣味としては、八年前に菅野卓郎先生の御教示で日

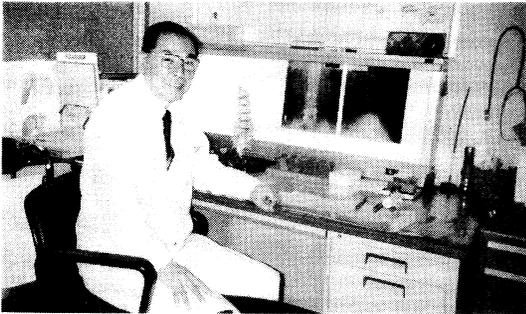
仏医学会の会員となり、医史学上の仏人 Ambroise Pare の偉業をしのび、仏語での交流を楽しんでいます。昨今の時代にマッチした慶應スポーツクリニック外来部門の発展と、教室員の御奮闘を期待すると共に、特に各地方にて御活躍の開業同窓会諸兄弟の御健勝と益々の御盛業を切望する次第です。

「雑感」

蛭窓雪 勉 幾十年
 貴和・伝統・教室訓
 今 吾憶 幸得 恩師
 一意 唯聽 運・鈍・根
 忘却 塵機 心亦清
 平成 佳氣 滿故郷

丁未年七月

敬



金 成 俊 男 (28)

- ① 昭和四十一年四月開業、最近は患者も減ってきたので、ボツボツやっているという感じです。周りの様子は激変しました。
- ② 老妻と二人
- ③ 囲碁、読書位です。二年前腰椎の手術をしたので、ゴルフとはお別れです。
- ④ 特になし
- ⑤ 十万枚のカルテめくりの最速記録を作ったこと。

大谷 孝雄 (32)

① 昭和四十年二月、当地に開業して二十八年になりま
す。最近は十年位入院も止め、外来診療を行っており
ますが、現在も結構楽しく働いております。

② 妻・愛子健在、長男・俊郎(59回)現在医局でご指導
いただいております。長女・深雪本年平成五年十一月
結婚予定、家事見習中

③ 未だ代車を主に楽しんでおります。健康の為月に二
〜三回位のゴルフを楽しんでおります。

④ 患者さんを依頼して大変感謝しております。若い先
生方も大変親切に面倒みて下さいます。唯もう少しベ
ットの都合が早くつくことが希望です。

⑤ 最近股関節の患者さんの年令が一変しました。昔の
医局生活を思い出しつつ、股関節研究会には毎回出席
させていた
ささせていた
だき、勉強
させていた
だいており
ます。楽し
いです。



奥村 守彦 (特)

① ベッドを持っていませんので、整形外科というより
整形内科(ペインクリニック)をやっているという現状
です。港区医師会理事、東京臨床整形外科の世話役を
やっています。

② 妻―診療所を手伝っています。長男―整形外科(日
大医局)、二男―心臓外科(日大医局)、娘二人―未婚
野球を毎年見に行っています。

④ 御ぶさたばかりですみません。ぶらりと思いつきで
訪問しても歓迎してくれませんか？

⑤ 開業は邪道と当時の教授に叱られたこと。



田 辺 雅 久 (37)

① 数年前、ペインクリニック学会に入会。神経学的なペインクリニックをやっております。整形の開業としては、自己流ですが、ムリがなくて、いい線いってると思っております。

② 妻・美代子（総婦長兼専務理事）、長男・賀則（北里大整形外科）、長女・晶代（東京女子医大内科）、次女・華也（宝飾デザイナー）

③ 多趣味です。ジムカーナ、四駆ダートラ、キノコ・山菜採り、ジョギング、ランニング登山、別荘ライフ、オーディオ、弓道、アーチェリー、日本犬、釣り、絵画他

④ たまには医局に顔を出してみようと思いつつ、なぜか、ためらってしまう。いまの生活があまりに多忙なため、予定がカチ合ってしまうのです。そのうち出ます。楽しい医局であってほしいと思います。

⑤ 大学院五年間と無給助手三年間に、楽しい思い出は殆どありません。しかし、面白くない医局生活があったからこそ、その後の楽しい人生が展開したのだと信じております。タイミングよく医局をとび出し、ホントによかったと思います。



河野通隆 (特)

① 開業二十一年、地区医師会役員七期目、国保審査委員も同じく七期目。地域医療と福祉、それに保健と瞬間に一ヶ月が過ぎます。

② 妻、息子三人の計五名ですが、次男は昨年結婚し別世帯。犬が二匹、長男は医局のお世話になっています。

③ 豆柿の盆栽作りを計画し、台木と接ぎ穂を育成中。樹高一尺五寸四方に枝を張った樹形を頭に描いています。

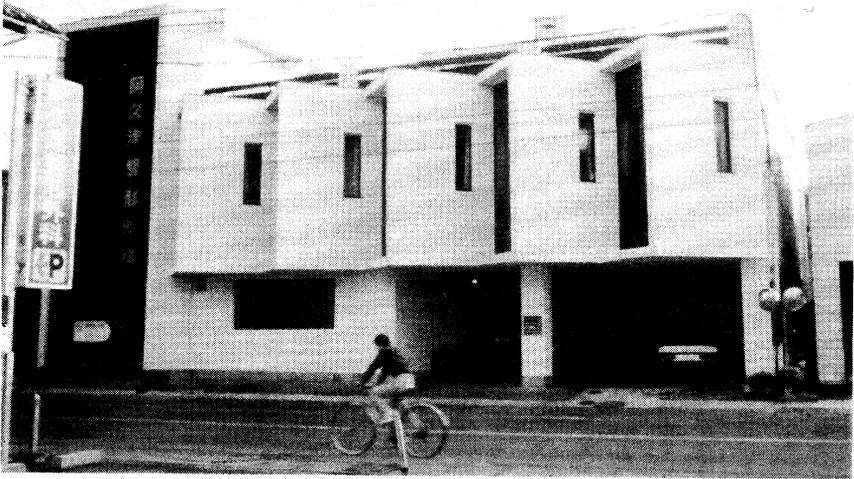
④ 後輩へ！ 病院勤めの間に友人（特に他科）をたくさん作ること。将来お互いの助けになるでしょう。

⑤ ①岩原教授室でのお茶の美味しかったこと、②平林・奥島兄と凍結背骨をいじっていたとき昼食を羽田空港の食堂で摂りました。三人共誰かが払うだろうと合点して出て来てしまった。（……逃げ）



阿久津 寿 一 (特)

- ① 毎日、外来診療等、又、雑用に追われて居ります。那須郡市医師会理事、兼西那須野支部長
- ② 玲子(妻)・・毎日忙しく裏方をやっています。三奈(長女)・・薬剤師；間もなく結婚の予定、政司(長男)・・今春より慶応義塾大学医学部整形の研修医、武史(次男)・・今春より、独協医大、越ヶ谷病院麻酔科研修医
- ③ 篆刻……約三年前より覚える。書道展(謙信書道展三回、読売書道展一回、県美術展三回等入選)、ゴルフ：練習せず、ぶっつけ本番のため上達せず。
- ④ 指導態勢が確立されていて、云うことはありません。
- ⑤ 医局旅行(箱根)……病院を同時に各車出発し、馬券を作り先着を競ったこと。学会中、オーベンがないのを幸い、肩鎖関節脱臼の手術をして教授に叱られたこと。



山根宏夫 (40)

① 昭和四十八年に開業以来二十年になります。

旧病院が商業地域に属し、手狭になりましたので、平成四年五月に現在の地に新築移転しました。二〇〇坪の駐車場を持つ三、〇〇〇坪の敷地に五階建一、五〇〇坪の建物です。

整形外科・外科・内科・眼科・皮膚科を常設しリハビリは三五〇㎡に理学療法・作業療法を共に承認施設をとり、PT三名・OT一名(ハンドセラピスト)視力の良いハリ・マッサージ師二名おります。慶応リハビリ教室からリハビリドクターもパートで御指導に来て頂いております。

MRI・全身CT・カラードプラー超音波装置を導入しフル活動しております(レントゲン技師六名)。レントゲン車を持ち集団健診・会社健診・学童健診にも力を入れております。

整形外科は大田原日赤を定年退職された岡田衛生先生がお元気で手伝って下さっており適応さえあれば手術もどんどん行っております。又、新名教授・山岸助教以下防衛医大の先生方が近くですのであらゆる分野に亘って応援して頂いております。

整形外科のベッドは約四十床いつもほぼ満床です。

② 妻・ミドリ 日高カントリークラブ(HD10)競技

委員をしております。長男・吉人 獨協医大で勉強中、二男・誓二 今春聖マリアンナ医科大学を卒業し慶応の整形外科に入局させて頂きました。アメフトをやっておりますので体力の方は丈夫だと思っておりますので先輩諸先生にピシビシご指導頂くようお願い申し上げます。三男・輝彦 現在浪人中です。あとシヨコラならぬヨークシャテリアが一匹おります。

③ 日曜日もっぱらお天気のいい時にはゴルフ(武蔵C C HD12)なかなかパレーイ出来ません、あとは時々サウナ・カラオケ等で英気を養っております。

④ 各分野とも優秀なスタッフがおりますので、これからはますます他の大学に比べて秀でた業績がどんどん出てくること期待しております。できる中堅の先生方がくさる事なく又、気持ち良く研究・診療ができる態勢を教室・同窓が一体となって作り上げる必要があると思っております。慶応整形開業医会もそのうちお役に少しは立てるようになるつもりで努力しております。若い医局の先生方には、若いうちにはできるだけ努力して先輩を助け一例でも多く経験を積んでその都度良く勉強して、労を惜しむなといいたい。又、患者の

心がわかるハートのある医者になって下さい。

⑤ 私は昭和三十年予科入学三十六年卒業一年慶応病院でインターンの後、岩原教授のもとで大学院に入りました。大学院三年生の時に先日亡くなられた池田亀夫教授教授（当時）から当時はやっていたサリドマイド児の影響にて「四肢の奇形の発生実験」の学位のテーマを頂きました。

同僚の加藤哲也先生と国立名古屋大学の環境医学研究所に国内留学し、マウスの妊娠のさせ方から、何から何まで何も分からない白紙の状態から勉強し、現在の医学部長の病理の細田先生にも御指導頂き、病理の動物小屋の一部でマウスを飼い「は号棟一階の整形研究室」で毎日毎日夜中まで実験をやりました。加藤先生は独身で私は新婚早々でした。ご存じのように加藤先生はねばり強く勉強が大好きの先生ですから夜何時になっても帰してもらえなくて困りました（学会の準備のときも同じく常に徹夜に近い状態が続きました）。

Subspecialty²⁾の手の外科を選び矢部先生の手の外科のスタート時で殆どの手術の助手をさせて頂いた。矢部先生の丁寧で確実な手術は大変勉強になりましたが、反面麻酔科・手術場の看護婦さんにならぬ内助の功に苦労しました（おそらく矢部教授は御存知ない

でしょう）。

田島先生（新潟大）のせっかちな早い手術と対照的でした。

医局に十年以上お世話になりましたので多数の先輩・同僚・いい後輩に恵まれ思い出しても懐かしい医局生活でした。誌上をかりて厚くお礼申し上げます。



田 辺 碩 (40)

- ① 市医師会の庶務担当理事として、雑用に追われています。
- ② 長女昨年六月に結婚、長男十二月に結婚、次男四月松山（愛媛大）へ下宿、三男五月東京へ下宿で、一年の間に老夫婦のみとなった。
- ③ ヨット「ヤマハ26CEX」、セール№2913、主に相模湾内でクルージング、テニス月一〜二回、年頭に自動車二輪の免許をとり、ホンダCB400に乗っています。
- ④ 日整会総会の主催に向けて、頑張っていたきたい。開業医の支援体制を作っていたきたい。
- ⑤ 岩原教授時代の土曜の昼食会、池田教授の回診風景、泉田教授の日整会総会での塾歌の演奏。



山崎 正一 (40)

- ① 開業して丁度二十年になりました。同窓の先生方の御支援により、今日まで頑張ってこられたものと心より感謝致しております。
- ② 四人家族です。長女は日本女子大の三年に在学中です。長男は今年塾高より塾医学部に進学でき、喜んでます。これから先、いろいろと先生方に御指導頂くことになると思いますが、よろしくお願い致します。
- ③ しばらく体調をくずしていたため、ゴルフ等から遠ざかっています。
- ④ 昨年一月に体調をくずして入院したときは矢部教授をはじめ、同窓の先生方に大変御心配をおかけしましたし、又大層お世話になりました。おかげ様で元気になり診療に従事しています。本当に有難うございました。
- ⑤ 医局在局中はアフターファイブではありませんでしたが、診療後または手術終了後に医局でビール等のみながら先輩の先生方から貴重な体験やアドバイスなどいただいたことが、とてもいい勉強になりましたし、いい思い出となっています。

奥島 平八郎 (40)

- ① 雑務とゴルフ、時に医業に追われています。
- ② 母・喜代子八十二才、妻・佳子五十五才、長女・飯塚典子(慈恵医大卒)、次女・武井悦子(塾医学部卒)以上売却済、長男・雄一郎(塾医学部学四)
- ③ USAの周辺諸国のリゾートゴルフ場めぐり
- ④ 勉強ばかりでなく、お祭りごとでも
- ⑤ もはや遠いセピア色の写真のようです



真崎 祐介 (42)

- ① 奥島病院に来て十四年になります。最近やけに Schekelhals Fr. が多い気がしまして、昭和六十二、平成四年迄のカルテを調べましたところ、当院で約二四〇例もありますので、現在、データをとっているところですが、当院では頑固にマルチプルピンニングです(ワイヤで補強もしますが)。
- ② 妻(四十七)専業主婦、長男(二十四)東京銀行、長女(二十一)跡見学園四年生
- ③ 暇があればゴルフ(HCG)、昨年九月桜ヶ丘CCの理事長杯をとりました。府中市の整形外科開業医のグループ(八人)で国内、国外と隔年で旅行するのが楽しみです。今年はアリゾナに行つて来ました。
- ④ 医学部新聞(小生も部員でした)は読ませてもらってますが、時には「医局便り」みたいなものもあったらいいなと思うことがあります。
- ⑤ 日整会総会が東京で行われた折、後楽園球場で東西対抗戦があり、東軍のピッチャーとして、マウンドに立ったことがあります。平林先生も出場されたと思います。



西郷 恵一郎 (42)

① 整形外科のクリニックで外来患者さんだけを診ています。市の中心から約4kmの所ですが、周りは農家と一般住宅の混在した所です。地域の人達と親しくし、楽しい日々を送っています。

② 妻…熊本シンクロナイズド・スイミングクラブを主宰、私のクリニックの事務、長女…私のクリニックの事務・劇団「石」団員、長男…司法書士事務所勤務、次男…大学四年生、次女…大学二年生

③ クリニックの敷地が約一、五〇〇坪ありますので雑草とりや、芝生や草花の手入れに診療以外の殆どの時間を過ごしています。週二回、YMCAの英語の教室に通い、日曜日にはゴルフを楽しんでいます。

④ 遠くにいとと医局への思いは一人です。私の知人が慶応大学病院の整形外科でお世話になることがあり、親切に診療していただき、感謝しています。医局の発展と繁栄を常に祈願しています。

⑤ 慶応大学病院、出張した病院での楽しい思い出は枚挙にいとまがありません。岩原先生はじめ医局で出会った先生方のお陰で整形外科医としての生活ができると感謝しています。医局は家庭・出会った先生方は

家族同様の思いでおります。



家 田 浩 夫 (49)

① 開業も今年で丸十年になり、外来のみの診療自体は、日々マンネリの繰り返しです。妻が週二日半皮膚科の診療をやり、手伝ってくれています。近くの国立埼玉病院に、石名田先生のお世話で非常勤医として籍を置かせて戴いており、以前はよく手術の手伝い等させてもらっていました。最近若く上手な人が多い、手術も大分変わってきているので、ほとんど出る幕はありません。月二回、紹介した患者を見舞って様子を見る程度です。年に八回位ある埼玉整形外科の研究会和、毎月一回の慶応系埼玉三病院の症例検討会に顔を出し、なんとか整形外科の進歩から遅れないように努めています。

② 学生時代から数えるともう三十年もつきあっている妻とは、既述の如く仕事の間でも毎日顔つき合わせた生活を送っています。三人の息子のうち長男は、今母校学Ⅲでサッカー部在籍のため、サッカー部O、Bの多い整形外科同窓の先生方の所にも会費集め等で廻らせてもらっているようです。親に似てあまり授業には出ていないようですが、先日、最近カリキュラムに入った自主学習の野田賞というのをもらったという

で発表論文を読んでもたら、いつの間にかこんなものを書いたのか、また、書けるようになったのかと驚くと共にその親である自分の年令を感じました。次男はたっぷり廻り道をした後、ようやく本年四月より近くの埼玉医大のお世話になることになりました。こちらは毎授業出席をとられるということで、毎朝学校へ行き、放課後、週末に青春を謳歌しているようです。三男は高Ⅲで、兄貴二人の遊びっぷりをうらやましながらの受験生生活を送っています。

③ 在局当時から変わらず、麻雀、ゴルフ、読書です。麻雀も診療と同じでハングリー精神がなくなってマンネリに陥っていますが、たまに刺激を求めうまい人達とやりに東京へ行っています。ゴルフは近くに沢山コースがあるので、ハンデイは13、18を行ったり来たりでうまくはなれません。常に何か忙しくしていないと気が済まない性格のため、老後に不安を感じ、最近昔やっていた絵画(昔は油絵でしたが、今は水彩画から始めました)と碁を、むりやり趣味の一つに加えるよう努力していますが、前記三種に時間を費やしがちです。もう一つ、これは趣味とはいえませんが、最近週一回妻に連れられてエアロビクスに行くのを義務と課しています。

④ 特にありません。

⑤ 五年生の時足利日赤に単身で出張中、四谷の独語会話の学校とTital Arbeitの準備等では号棟と、週三回東京へ通っていた時のことがなつかしい思い出です。先輩でやはり実験に励んでおられた畠中卓士、小林信夫両先輩が時々オーベンの石井良章先生の目を盗んで麻雀に誘ってくれ、お小遣いをくれました。臭く、汚くない実験室でしかも決められた時間内に結果を出さなければならぬという時期だったはずですが、楽しかったことしか思い出せません。それにしても若い身で週三回も夕方から病院を抜け出して上京してしまい、当時足利日赤にいらした医長の長谷川善吉先生、戸松泰介先生、塚原健司先生には大変御迷惑をかけたと思います。申しわけありませんでした。この場を借りておわび申し上げます。



宮川 準 (53)

- ① 義弟の田中耕一君(59)と館山で開業いたしまして四年経ちました。医局の先生方の御助力もあり、勤務医時代とあまり変わらぬ生活を送っています。
- ② 妻(二十九才)、長女(十四才)、長男(十一才)、当地に単身赴任ですが、週二回帰京し家族との親交に努めております。
- ③ ゴルフ、競馬、読書、以前はまっていたRPGは視力低下のため休止しています。
- ④ 学会活動や論文を通して、現役の諸先生の御活躍を知り、益々の御発展を祈る次第です。
- ⑤ 最終勤務病院の光が丘総合病院では色々と苦勞いたしました。他大学のユニークな先生方と知り合うことができました。今もこの人脈を大事にしています。



藤田保健衛生大学整形外科

吉 沢 英 造 (41)

この原稿を書いている最中に、池田亀夫教授の訃報に接しました。お元気だった頃の颯爽としたお姿を思い出して、長期療養中の先生のご心中を察する時、さぞかし無念であったであろうと涙を禁じえません。先生のご冥福を心よりお祈り致します。

時の経つのは速いもので、私達の教室も開講二十周年を過ぎ、二十一年目に入っている。矢部教授の後を引き継いで満七年を経過したが、教室は依然としてただ忙しいだけで充実せず、特に若手の指導に充分な時間をとれないことが悩みである。本来であれば昨年末に開講二十周年の行事を行なうべきであったが、このような状況下において教室員の間からも祝賀会をやるとういう雰囲気が生まれなかったこともあって取り止めとなった。二十五周年までには何とか一人前の教室に育てたいものと思っている。

本学の特徴は藤田総長（理事長）のワンマン経営にある。医学関連総合大学を目ざして多くの学校を次々と作り続けてきた。以下に本学の組織を示します。

学校法人藤田学園本部

藤田保健衛生大学大学院医学研究所

総合医科学研究所

医学部医学科

衛生学部衛生技術学科

衛生看護学科

診療放射線技術学科

短期大学衛生技術科

看護専門学校医療専門課程（看護科）

医療高等課程（准看護科）

リハビリテーション専門学校理学療法科

作業療法科

環境検査センター

藤田学園医学技術専門学校

藤田コンピュータ専門学校

藤田保健衛生大学生薬研究塾

藤田保健衛生大学病院（第一教育病院）

坂文種報徳会病院（第二教育病院）

静心会桶狭間病院（第三教育病院）

七栗サナトリウム（第四教育病院）

救命救急センター

最近ハニサクル保育園が開園した。すばらしい日本式

建物と設備であるが、入園料が高いらしく、職員はあまり利用していないようである。

私の講座がある第一教育病院では中川研二助教授（R A、膝）、安藤謙一郎講師（股・小児）、中井定明講師（脊椎）、鈴木克侍助手（手）が教室を盛りたててくれている。関恒夫教授の所属する第二教育病院の講座には高山眞一郎講師（手）、釘持政男助手（脊椎）がおり、今年度から新入局者が入りはじめた。またリハビリ講座には慶応卒で岡山大整形を経て川崎医大リハビリ助教授であった土肥信之君が教授として来てくれ、それまで本学のリハビリを育ててくれた梶原敏夫君が助教授として現在七栗サナトリウムの責任者になっている。

キャンパス内には、全学学生約二、〇〇〇人が一堂に会せる場所として藤田二、〇〇〇人ホールが作られたが、総長が大のクラシック音楽ファンであることもあって、集会だけでなく音楽会にも使用できるよう音響可変のホールとして設計された。まだ未完成とのことであるが、海外から頻回に音楽家を招き、定期的に音楽会場として利用されている。また仲代達也率いる無名塾の演劇も二回程行なわれた。かなりの時間とお金を注ぎ込んで作られた総長自慢のホールであるが、入場料は一般市で、プレイガイドでも売られている。このように一般市

民にも開放することにより有形無形のメリットを得て有効利用する心憎いばかりのやり方には驚嘆している。このようなことのできるのも、ワンマン経営の利点であろう。

職員の管理は元々厳しかったが、このところ益々その厳しさを増している。病院の医師は勤務中院長秘書から渡されるパーソナルコールを持つことを義務づけられている。患者さんのために、医師がどこにいても連絡が直ぐつくようにとの説明で始まったが、無給である大学院生や研究員には配られず、本当の目的は医師の管理にあったようである。加えて、毎年届出させられる兼業届や診療時のコンピュータ入力などによって、各医師の行動を毎日適確に把握できるように色々な手が打たれている。今年度からは学会出張などにも制限が付き、前年度の業績によって許可される出張期間が決められるようになった。このようなことも各医師の行動が把握できてはじめて可能になることであり、当地特有かと思われる細かな管理方式には感心させられる。慣れるまでは、そこまで信用されないのかと腹立たしかったが、最近は大分慣れてしまったようである。あまり気にしないようにしている。

この一〜二年、私にとって大へん嬉しいことが続いた。

それは教室員の仕事が評価され、いくつかの学会で賞を頂いたことである。教室の組織がまだ充実せず、超多忙な臨床のなかにあつてやって来たことだけに殊更嬉しい。

小林茂ほか：脳脊髄液の変化が神経根に及ぼす影響について

第六回日整会基礎学術集会学会奨励賞（平成三年八月）

吉沢英造ほか：腰部神経根障害の病態——慢性圧迫に伴う根症状発現機序の解明——

平成三年度ジンマー・ジャパン奨励賞（平成四年四月）

藤原康洋ほか：神経根結紮が脊髄血流に及ぼす影響について

第四回大正Award（平成四年六月）

小林茂ほか：圧迫性神経根障害の病態について——急性圧迫に伴う痛覚伝達物質の分布および変化

第五回大正Award（平成五年六月）

小林茂ほか：Vasogenic edema induced by compression injury to the spinal nerve root : Distribution of intravenously injected protein tracers and Gadolinium-enhanced MR imaging

国際腰椎学会 Volvo award.（平成五年六月）

今年六月Marseilleで開かれた国際腰椎学会で、小林君がVolvo賞受賞論文を口演し、私が質疑に応じた。その後、共同演者も含めて一人一人にprof.Nachemsonから賞状が渡された。私の師であるCook先生も非常に喜んでくれた。直後の昼食会では私と小林君にProf. Nachemsonからお呼びが掛かり、一緒に食事をしながら親しくお話できたことに幸わせを感じた。日本独自の研究でVolvo賞を頂いたのは初めてだと日赤医療センターの蓮江先生からお聞きした時は、苦勞することの多かっただけに喜びも大きかった。小林君をはじめとして昼夜を徹して頑張ってくれた一同に大へん感謝している。ペンシルバニア大学に留学中の蜂谷裕道君も駆けつけて、共同演者が全員揃ったので、会場の一隅で一緒に記念写真を撮影した。このことが自信になり、励みとなって、教室員が更に努力してくれることを秘かに期待している。振り返ってみると、矢部先生と一緒に無名の新設医大に赴任し、伝統もないため肩肘を張る必要がなかったことが幸いして、詰らない仕事でも平気で発表でき、まわりからも特に非難されることもなかった。研究をするには環境が厳しかっただけにかえって仲間の絆は強くなり、教授も若手もなく夜を徹して夢中で議論することもしば

しばであった。整形外科の研究室自体は粗末なものであったが、研究者の熱意が通じたのか、徐々に他の基礎系研究室が出入を認めて頂けるようになり、組織学教室、電子顕微鏡室、動物実験センターなどを自由に使えることが大きかった。本学では大学院生に学位を取らせることが教授の義務とされていることから、論文の締切日が近づくと私も徹夜を覚悟で付合ってきた。そんな形でスタートした研究ではあったが、学位取得後も臨床の合間に研究を続けようとする者が出てきて、それが更に後輩を研究室に引き込むうちに自然と研究グループができあがり現在に至っている。有難いことと感謝している。このようなグループが幾つもできて教室を盛りたて、支えていってくれることを夢みている。

危なげな私達の教室を温かく見守り、ご支援頂いた同窓の先生方に心より感謝致しますとともに、今後も益々のご支援ご鞭撻を改めてお願い致します。



防衛医科大学校整形外科の近況

新名 正 由 (44)

一、歴史

防衛医科大学校は、一九七三年(昭和四十八年)十一月二十七日に設立されました。本校の設立目的は医師である幹部自衛官を養成することです。今年で二十周年を迎えます。病院の開院は一九七七年(昭和五十二年)十二月です。対象患者は一般大学付属病院と全く同じで、広く一般に開放されています。

整形外科科学講座は、一九七六年(昭五十二年)四月に開設されました。下村裕先生が初代教授に着任され、教授以下七名で診療・教育・研究を開始しました。今年で十七年になります。昨年三月に下村教授は停年退官され、四月に第二代教授として私が昇任いたしました。それから一年余が経過し、漸く新しい教室が整いつつあります。

二、構成

現在の教室のスタッフは次の通りです。教官として、教授(整形外科部長)・新名正由・膝関節外科、リウマチ、スポーツ医学、骨系統疾患

助教授(教育主任)・山岸正明・脊椎脊髓外科
講師(医局長)・根本孝一・手の外科、末梢神経外科、マイクロナージャリー

講師(研究主任)・山田治基・股関節外科
助手(外来医長)・小林龍生・膝関節外科
助手(病棟医長)・塩田匡宣・脊椎脊髓外科
助手(卒訓主任)・伊崎寿之・腫瘍外科

自衛隊医官として、
後藤達彦・二等陸佐(教務二課)、二期生

根本 理・三等陸佐(研究科医官)、五期生

中島秀人・三等海佐(研究科医官)、五期生

専修医官(一尉)四一五名と研修医官(一尉)五一六名が常勤、その他、近隣の自衛隊病院から医官若十名が非常勤として勤務しています。

教務技官として、菊地寿幸、茂呂恵子両技官が勤務し、最近、関根桃子嬢が教授秘書として勤務しています。

三、教育

学生の定員は四八〇名(各学年八〇名、最近は約七〇名)で女子が約一割です。学生の身分は防衛庁職員で学生手当が支給されます。全員学生舎で団体生活を送ります。進学課程と専門課程は他の医科大学と同様ですが、

幹部自衛官として必要な基礎的資質および技能を育成するための訓練課程が設けられています。体育系および文化系の課外活動も盛んです。本校の卒業生は優秀であり、ちなみに今年の医師国家試験合格率は全国第二位でした。他大学の大学院医学研究科(博士課程)に相当する医学研究科(医学研究課程)が、最近、設置されました。学位授与審査機構が行う審査に合格すれば博士の学位が授与されます。

四、診療

一九九一年(平成三年)の当科における診療実績は、外来患者総数は二三、六六〇人、一日平均患者数は八〇・二人、新患率は二八・二%でした。取扱入院患者延数は二〇、一〇〇人、一日平均五四・九人でした。手術件数は約四〇〇件で、膝関節が最多で、ついで脊椎、股関節、手の外科の順でした。

現在の外来担当医は次の通りです。

月曜日：新名、山岸／塩田、小林／伊崎、吉原

火曜日：塩田、桑原、中島、伊崎

水曜日：後藤(達)(初診のみ、要紹介状)

木曜日：山岸、山田、堀川

金曜日：根本(孝)、小林、根本(理)



五、研究

研究については、「軟骨代謝」が教室のメインテーマです。国際・国内ともに多数の学会報告と論文刊行を行っています。さらに、脊椎、手の外科、末梢神経に関する実験的研究、および各種の臨床的研究を行っています。以上が防衛医科大学校整形外科の現況です。本校の卒業生は資質に優れ、将来大学教官として後輩の教育、整形外科学への学問的寄与を行い得る資格は十二分に有しております。只、残念なことに、自衛隊医官としての拘束は厳しく、防衛医大教官への配置転換の道は、極めて厳しいのが現状です。一日も早く、卒業生の中からも教室スタッフをと希望しているのですが、なお実現できておりません。本校卒業生と慶大整形外科教室員などからなる、常に刺激的教室を設立し、相和し、競合していくことが、本来の教室のあるべき姿と確信しております。常に群れあう集団では進歩が見られないのは過去の歴史にも明らかです。慶大の後輩諸氏のなかで、そうした刺激的教室で自分を試してみたいと思う人が居られたら、何時でも大歓迎です。

国立小児病院の現況と将来

村上 實久 (34)

本院の沿革と特色

本院は、昭和四十年四月に我が国における最初の小児専門総合病院（対象は原則として十五歳以下の小児）として設立され、昭和四十五年四月には視能訓練士の養成機関としての付属視能訓練学院が付設され、さらに昭和五十九年十月に小児医療研究センターが併設された。以来、我が国の小児医療の中核的、指導的役割を果たすべき病院として位置付けられており、小児の診療・研究・研修の場として広く活動している。また、平成四年四月からは都立光明養護学校の小学部と中学部の院内訪問学級が新設され、三カ月以上にわたる長期入院患児を対象に九名の教諭がベッドサイドで授業を行っており、患児は休学することなく治療を続けることができるようになっていく。

本院の現況

本院には標榜診療科として、小児科、外科、整形外科、形成外科、心臓血管外科、泌尿器科、皮膚科、眼科、耳

鼻咽喉科、精神科、神経科、婦人科、麻酔科、放射線科、齒科の十五診療科が設けられているが、小児科はさらに、新生児・未熟児、血液、感染、循環器、呼吸器、内分泌・代謝、腎・消化器、アレルギーの八専門分野に細分化し、専門医師による診療と、相互連携による効果的な診療を行っている。

本院の医療法による病棟・病床数は、十病棟、四〇〇病床数となっているが、現状は看護体制の関係上、八病棟、二四〇病床数で運営している。なお、整形外科の病床定数は二十四床である。

スタッフは、院長(小児科、東大)、副院長(小児科、慶応)、小児科(慶応、東大、慈恵)十八名、外科(慶応、東大)六名、整形外科(慶応)四名、心臓血管外科(東大)三名、泌尿器科(東大)二名、皮膚科(慶応)二名、眼科(慶応)二名、耳鼻咽喉科(慶応)二名、精神科(慈恵)二名、神経科(東大)二名、麻酔科(信大)六名、放射線科(慶応)一名、歯科(東歯)一名、検査科(慶応)三名の、五十六名である。なお、形成外科(東海大、慶応)と、婦人科(慈恵)は非常勤のみによる診療となっている。その他、レジデント四十一名、非常勤十二名、研究員(無給)十九名がそれぞれの診療科に所属している。

併設の小児医療研究センターは、小児薬理研究部、病

理病態研究部、内分泌代謝研究部、免疫アレルギー研究部、先天異常研究部、感染症研究部、小児生体研究部、実験外科生体工学研究部、共同利用室の八部門十六室で構成されており、センター長以下三十三名の研究スタッフで運営されている。

当科の沿革と現況

初代整形外科医長は、泉田重雄前教授であるが、昭和四十五年六月に教授として慶応に帰室された後、筆者が二代目を引継ぎ現在に至っている。その間、多くのスタッフが入れ代わり勤務されたが、現在は、村上寶久、下村哲史、逸見 治、田辺 巖の四名で、片田重彦が非常勤で週一回診療を行っている。

整形外科の外来患児は開設当初から多く、一時はかなりの数の入院待機患児を擁していた。しかし、出生率の減少とともに受診数も年々減少してきており、現在では当初のおよそ1/2程度にまで減少している。疾患の種類は、小児の三大疾患である先天股脱、筋性斜頸、内反足をはじめとして、指・趾の先天奇形(多指、合指など)や、O脚、X脚、外反扁平足、骨折などcommonな疾患が多いが、その他まれな疾患も含めて、小児整形外科領域のほとんどの症例を網羅している。しかし、先天股

脱と筋性斜頸は顕著な減少傾向を示しており、二十年前の約1/10程度となっている。

本院の将来

厚生省の国立病院・療養所の統廃合計画の一貫として、国立大蔵病院との統合が予定されており、母子の総合医療を中核とした国立生育センター（仮称）に転換される予定で、現在その計画が進行中である。



浜松リハビリテーションセンターの 現況と将来

月村 泰治 (35)

浜松リハビリテーションセンターは、静岡県浜松市の北部、三方原台地に位置している。その昔、武田・徳川両家が雌雄を決した三方原古戦場跡に近く、周囲は自然が多く、静かな環境である。最近では、近くにテクノポリスが開発され、近い将来には工業団地ができ、人口の増加、発展が期待できるようになってきた。

当センターは昭和三十八年十月に、静岡県立、日本赤十字社静岡県支部経営の肢体不自由児施設『浜松療護園』として発足した。開設当時は、病床数三〇床であったが、昭和三十九年四月に六〇床、昭和四十六年五月に一〇〇床と増えていった。

そして、肢体不自由児への医療と並行して、成人患者（一般整形外科患者、脳血管障害患者など）の受け入れ、および地域への医療サービスを目的として、昭和五十四年七月に病床数三十八床の成人病棟（整形外科）を開設した。これにより、病床総数は一三八床となった。入院患者は小児（肢体不自由児）が多数を占めていたが、昭和六

十年以後から成人入院患者が激増し、現在小児入院患者を上回っている。昭和六十一年四月に名称を『浜松リハビリテーションセンター』と変更し、整形外科とリハビリテーションの機能の充実を図り、今日に至っている。小児リハビリテーション活動では、平成三年に第三十六回全国肢体不自由児療育研究大会を当センターが担当して、浜松市で開催し、その際、矢部教授にも教育研修講演をしていただいた。

外来診療も年々増加をしており、最近では一日平均一五〇名(整形外科)程度の外来患者を扱っている。

病棟は成人棟(三十六床)、本館(四十床)、訓練棟(小児整形外科)の三つに分かれて、整形外科、リハビリテーションを行っている。

本センターは、日本整形外科学会の研修施設認定を受けているが、日本リハビリテーション医学会の研修施設認定も受けている。また、平成四年七月にリハビリテーション総合承認施設の承認を受けている。したがって、将来の整形外科認定医だけでなく、リハビリテーション臨床認定医の資格取得にも、当センターでの勤務は有利である。

診療科目は整形外科、理学療法科、内科、皮膚科で、医師は常勤が五名、非常勤が四名である。リハビリテー

ションスタッフは、PT十一名、OT六名、ST三名、MSW二名である。PTでは、スポーツ療法、エアロビクスダンスなど運動療法の一つとして取り入れている。また、高次脳機能障害へ積極的に対応し、OT、STが主になって訓練プログラムを実施している。

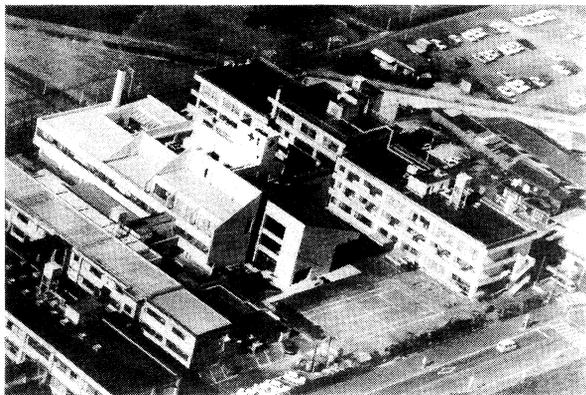
整形外科的治療は、手術件数で次第に増加してきているが、以前は小児整形外科(脳性麻痺に対する筋解離術、変形矯正手術、股関節痙性脱臼に対する手術、先天股腕に対する骨盤骨切り術、大腿骨骨切り術など)が多く、主であったが、最近では一般整形外科手術(THR、TKR、骨折手術、膝関節鏡視下手術、腱板断裂に対する手術、椎間板ヘルニア手術など)が多くなり、昨年は一六五例の手術を行っている。

研究面では、体重心動揺に関する研究が主テーマで、毎年リハビリテーション学会で主に三〜四題の発表を行っている。本研究は二十年を越える研究実績があり、昭和四十七年には『足跡と重心位置及び重心心に関する研究』で、日本肢体不自由児協会により高木賞を受賞した。

今後、起立、歩行解析の一旦を担ってゆくつもりである。

将来的には、一般整形外科、小児整形外科、リハビリ

テーションの臨床内容を更に発展させるとともに、研究の面でも充実をはかってゆくつもりである。そのためには、施設、設備の充実は大切なことではあるが、一番大事なことは人的資源であり、優秀な、心あるスタッフ、特に医師の充実であると思っている。慶大整形外科の優秀な人材の協力を心から期待しており、関連病院の一つとして、よりよい教育の場にするために努力してゆきたい。



川崎市立川崎病院の現状と将来

赤坂 勤二郎 (37)

川崎市立川崎病院整形外科は、現在、赤坂勤二郎部長(37)、木原未知也医長(55)、河野亨副医長(62)、須田康文副医長(65)、渡辺雅彦医員(66)、直長圭植医員(平成二年北里大)の六人で構成されております。

病床数は、看護婦不足のため病棟閉鎖をしております。関係上、定床五十五床と臨時にありところに入れて頂くプラスチックということになっております。

外来は、通常の午前の外来以外に、午後の特殊外来を、月曜、脊椎外来(河野)、R A外来(須田)、火曜、形成外科外来(第二、第四。慶大形成外科小林先生)、水曜、脊椎外来(木原)、R A外来(須田)、木曜、身障者外来(赤坂)、金曜、脊椎外来(木原)、R A外来(渡辺)と、ほとんど連日おこなっております、五月の一日平均外来患者数は一八五人で、これは内科に次いで病院第二位であります。

手術日は、火曜と木曜であります。件数は非常に多く、本年一月から六月までの手術件数は二八五件(うち全麻手術二二五件)でありました。一般的な骨折、抜釘

などを除きますと、やはり脊椎の手術が多く、五十四件でトップであります。また当院内科のリューマチ診療は全国的に有名であります。木原医長のご努力で、内科との連絡が非常によくなり、コンサルテーションも多く、リューマチの脊椎、関節手術は十六件に及んでおります。

このように活発な診療活動の結果、五十五床プラスアルファでのベッドのやりくりはなかなか大変ですが、患者サービスの立場から、入院待ち期間を出来るだけ短く、また入院したら、なるべく早く検査、手術をしようというお考えの木原医長のリードよろしきを得まして、ベッドの回転は順調で、五月の平均在院日数は二六・三日でありました。これは整形外科の在院日数としては、大変短い方であると思います。看護婦が充足されて、閉鎖されていた病棟が開かれれば、手術件数もさらにアップすることが考えられ、また内科からのリューマチ患者の紹介も増加の一途をたどっておりますので、ますます発展の余地があると信じております。

さて将来のことではありますが、待望久しかったMRI導入の予算がつき、来年三月稼働開始を目指して、1.5テスラーのMRIの機種選定が最終段階に入っております。従来のように近隣の病院におねがいしていたわずらわしさから、やっと解放されることとなります。また1.5テス

ラーであることにも、その画像に一回大いに期待している次第です。



最後に、老朽化が著しく、改修に次ぐ改修をもってしても医療の内容に追いつけず、市民の中からも市議会へ改築の早期実現をとの請願が出される有様でありました病院の改築は、日本設計の手により、ようやく基本設計の段階に入りました。建築予定地であります現在の看護専門学校が、市内の別の場所に建設が始まっており、平成七年の開校ということになっております。新しい病院が建つのは、そのあとになる訳ですが、近代的なインテリジェントビルの機能を完備した新病院の姿が、次第に現実のものとしてはっきりして参っております。

川崎市立川崎病院が、地域の中核病院として、市民からの非常に高いニードにこたえるため、スタッフは日夜全力をつくして頑張っております。今後とも教室のバックアップを心からお願ひ申し上げて筆をおきます。

新装なった都立大久保病院

三笠 元彦
大谷 俊郎
(59)(44)

改築のために昭和六十二年八月から一時診療を休止していた都立大久保病院が、平成五年七月に新装オープン致しました。新病院は、旧大久保病院の敷地(一〇一、一八五㎡)に建てられた十八階建てのツインタワービルにある、東京都健康プラザの構成する中核施設で、写真向かって左のビルの大部分を占めています。この度の一次開設で二〇〇床がオープンし、また来年四月の全面開設後には三〇〇床(整形外科関連病床五〇床)の病院として運営される予定になっています。教室からは整形外科に三笠(整形外科医長、44)と大谷(59)の二名が、また整形外科兼リハビリテーション科に吉峰(リハビリテーション科医長、54)と岩本(65)の二名が勤務しております。この機会をお借りしまして新病院の概要を紹介して、皆様の御協力をお願いしたいと思います。

1. 病院の沿革

大久保病院開設の歴史をたどりますと、明治十二年八月に伝染病院として開設された府立大久保病院にさかの

ばります。従って同年開設された本所、駒込、癩狂病院（現在の松沢病院）と並んで、都立病院の中では最も古い歴史を持っております。

一般病院としての本格的なオープンは、大正十五年に、関東大震災の帝都復興事業の一環として近代的な病院としての第一歩を踏み出した時に始まります。昭和十四年に伝染病棟を廃止して、整形外科と歯科が設置され、ようやく総合病院としての形態が整いました。その後は、昭和三十五年にがんセンターが、昭和四十七年には透析センターが、そして昭和五十一年に腎不全センターがそれぞれ竣工し、昭和六十二年八月に全面改築のための診療休止となるまで、教室の諸先輩の御協力により、地域医療に大きく貢献して来りました。

2. 新規オープンの主旨

東京都はこの度の大久保病院の開設に当たり、次の四点を開設の柱と位置付けております。

(1) 健康づくり関連医療

双子のビルのもう一方（健康プラザ「ハイジア」）の三、四階に、専有面積延べ四、八〇〇㎡を持つ東京都健康づくり推進センターがあります。ここは東京都が都民の健康づくりを支援するための中核施設として、健常者を対

象に指導者の養成や都民向けの実践指導などを行なう総合的な運動施設です。六〇〇㎡余りのトレーニングルームやランニングデッキ、二〇mプール等の運動指導施設のほかに、循環器内科の専門医師三名が常勤して、健康測定や医学指導などを行なっています。

この健康づくり推進センター（健常者対象）との連携を図りながら、大久保病院では非健常者を対象に、スポーツに起因する疾患や成人病の治療並びにその予防を行ない、健康づくり医療を提供する事を目指します。

(2) 腎医療

人工透析装置二十五台を備えた腎不全センターとして、高度の腎医療を提供いたします。

(3) リハビリテーション医療

リハビリテーション専門病床を備え、一般のリハビリテーション医療に対応する他に、スポーツリハビリテーション、心臓リハビリテーション、腎臓リハビリテーションなどの専門化されたリハビリテーション医療にも対応いたします。

(4) 救急医療

いわゆる救急告示医療機関として、休日夜間を中心とした二次救急医療を提供いたします。

以上の四つの柱のうち、整形外科は特に(1)と(3)に深く関係しています。整形外科スタッフの構成から、特にスポーツ関係の症例の多い肩(三笠)、膝(大谷)、脊椎(岩本)の何れの分野にも専門的に対応出来る上、整形関連のリハビリに経験の深い吉峰医長が居られますので、設立の趣旨に添った医療を提供する様に努力して行く所存です。

3. 地域医療機関からの紹介予約制

地域医療機関との不必要な摩擦を防ぎ、円滑な病診連携を行なって患者さんの待ち時間の短縮などのサービスの向上を図るため、大久保病院では原則と紹介による予約診療制をとっています。従って、患者さんを紹介して頂く場合には、簡単な紹介状を持たせて頂き、診療予約受付(03-5285-8811)に患者さん自身が電話して、診療予約を取って頂く必要が有ります。万一予約が満員で希望の日に予約出来ない場合には、整形外科のスタッフに直接電話を頂ければこちらで対応致します。

4. 土地信託制度の導入

都立大久保病院は、いわゆる第三セクター方式によって、その敷地を信託銀行に信託し、受託者が信託財産で

ある土地の管理運用を行ない、その成果を東京都が配当として受け取る土地信託制度を導入しています。



5. 今後の展望

さて、この紹介文の主旨は、生まれ変わった都立大久保病院の整形外科及びリハビリテーション科を御理解頂き、今後に向けて、慶大整形外科関連施設のひとつとして活用して頂く事に有ります。

開院セレモニー当日、隣接のホテルで殺人事件が有った事でも分かる様に、大歓楽街に囲まれた環境は必ずしも「健康的」とはいえませんが、病院は大変綺麗で患者さんにも好評です。

開設に向けての柱のひとつにスポーツ関連疾患に対応出来る事がうたわれています様に、医師のみならず設備の面でも、パラメディカルを含めたソフト面でも、様々なレベルのスポーツ選手の治療に対応出来る様になっています。一般整形外科と共に、将来はスポーツ整形外科の更なる充実を目指して行きたいと考えて居りますので、皆様の温かい御支援をよろしくお願い申し上げます。

地球的文化の構造と環境 文化と歴史、国際貢献、安全と人権

左奈田 幸 夫
(13)

はじめに

フジTVニュース・コメンテーター竹村氏は、「日本の常識は世界の非常識」といった。単一民族と多民族国家間の差はあっても、共に民族とは文化、伝統の分野と歴史的経験とを共有する共同体同志といわれる。異質な集団と緊密な関係を保つ国々との国際交流は、相互の、協力、貢献によって偏見や差別を避けつつ文化、生活の向上を計っていく。

戦国時代の帯刀や、西部魂の開拓時代を経て成長してきた日米の歴史、人権、倫理から法律、習慣の異なる国際協力や貢献には両国の或はその民族の階層化、偏見が生れ易く、理解していないと危険や反感を招くので注意する必要がある。

一、行動倫理と国際モラル

米国で服部君という高校留学生が訪問先を間違え玄関で射殺された事件は最近のことだ。米国では、拳銃は護

身のため単に届出るだけで誰でも許可される。止れと
いっても止らない場合、危険を感じて発砲し相手が死亡
しても正当防衛として無罪となる州の陪審制度がある。

米国では、高速道路で停止させたり、道路で止めといっ
て止らない場合警官は発砲してもよいと法定されている。
これを規制しようという意見は多いが、禁止すると、か
つての禁酒法で失敗した経験から地下組織にうまくやら
れて、第二のカボネが生れる。

学問、研究の分野も国際交流が盛んとなりまた高校、
中学生も米国で履修すれば日本での修業と同様に認定さ
れる制度ができてから留学生が増えている。この留学生
の死もNHKの国際レポートを聞いてもアジア、西欧で
皆その行為倫理を非難しているが、州法によって合憲と
されている行為を陪審制度で無罪となったものを他国の
人がとやかく言えないし、国際裁判に提訴しようとする
国もない。

日本人の常識からみて意見は大いにのべ反省は求める
べきである。文化交流や円高で気軽に外国に行く日本人
は多い。経済、科学、生活共に大国となった現在では外
国旅行はチャンスである。

日本で国際的科学研究開発プロジェクトチームは一五〇
もあるのに日本主導のプロジェクト成功例は只一つである

という。科学大国、経済大国といわれる日本で、創造的
研究や技術の開発に積極的にアクセスしてほしい。

二、PKOと国際貢献

イデオロギー喪失の冷戦終結後、これから世界の平和
を保障し、維持していく対策には国連は大きな使命をも
つが、悩みもある。このために多国籍のPKO（平和維
持機構）とPKF（平和維持部隊）が国連で編成され、
生命や人権を護るために活動している。

平和のための国際協力活動は、日本憲法の精神に合致
しており、停戦の合意、PKO許容など参加五原則を満
している。ところが日本の国連への分担金が全部の十二
・五%を負担しているのに「顔がみえない国」といわれ
る人材派遣がなかった。(1992. 9. 9現在)

国会審議は、政治改革を優先し、自衛隊や文民ボラン
ティアの海外派遣などの国際的世論には、文民警官の死
亡事件で、安全という論拠は空論化してしまった。

戦争を永久に放棄した憲法をもつ国は日本だけだが、
その自衛隊と称する装備は世界で何番目かの戦力をもっ
ている。この感覚は、中立国スイスとは較差がある。そ
れは、戦力のある中立は抑止力をもって紛争を未然に防
ぐ平和維持戦略の国際常識だからである。このボラン

ティアの人材派遣が日本で非常識とならぬよう政治ポリシーの意志決定を確立し、国民の納得のいく社会的哲学がほしいものである。

このPKOもアンタックの目的達成（六月六日現在）があっても、一方で国連安保理事會が民族紛争の旧ユーゴにいる国連防護軍に強い武力行使の権限を与え、国連ソマリヤの平和維持軍PKFにも最大の武力装備によって二十二人の死亡者を出している。（1993. 6. 5現在）これが国連活動の行為実態である。

これはわが国の「PKO協立法」には平和維持部隊PKFには参加できないことになっている。PKOの参加五原則には、停戦合意は含まれるが、武力行使を目的や任務とするなら憲法上自衛隊の参加は不可能である。これが政府の議會での見解である。

未熟なPKO参加国日本が、国連で上記二国の紛争国対策に賛成した事実がわが国にとって重大である。賛成は協力実行によって意義あることになる。PKOの強化が国際社会モラルの合意の方向へいくとするなら日本もこれに対応していかねばならない。ポリシーの変革と法制面の合憲的検討が必要になってくる。

三、技術革新と文化交流

日本で技術出の社長は「研究所で優秀な生産技術を開發しても、これを買ひ易く、利用しやすくする生産技術に結びつく同等の水準をもつ生産技術グループがいなければ成功しない」といつている。これは研究開発と生産経営とが同等のグレードをもたないと成長發展は長続きしないといいつているのである。

技術革新の波は、第三の波としてバイオ、エレクトロニクス、多品種少量生産の時代になったが、第四の波はこれからのような知的競争時代になるか。知識、技術情報、創造力などのソフトが重要となり、メーカーは研究・開発と企画・販売に投資し、消費者の個性化、多様化、アメニテイ、ウエルネスに対応したサービスの經濟化を目標にいつている。

ライフサイクルの成熟期に向つて、健康投資である生存生産のために医薬品、各種医療機器、生活関連器具とそれらのサービスの機能化をめざす複合的産業が盛んになってきた。これは高い社会ニーズと消費者の選好感に一致して変貌していき、行政はこれを側面的に支援していつている。

冷戦が終り、安全保障の担保のため、自らが輸出した武器と戦つた湾岸戦争を経験した。即ち二極対立時代か

ら、よりオープンな多極構造へ移り、かつ情報化時代へ移ると、各国間の格差は急速に縮少するのに役立った。それは逆説的には、実像通信のスピード化、普遍化がもたらす結果である。この情報技術は、知能・創造力・意識の向上に役立つ資源であり、その通信網は地球的连接のスピード化に成功した国際貢献である。

技術革新として、企画、設計、プロセスをコンピュータでモデリング、シミュレーションを行い、それを光速度で世界へ送信することが可能になった。即ち電波技術は、地球上の情報の一つにまとめる影響力の大きなもので、将来は地球社会の一体化へ向うメンバーシップを構成する。

総括すれば、終戦後の日本の発展は、イデオロギー、ポリシー、ウエルネス共にその方向を誤りなく経済、技術、生活などの大国へと成熟しつつある。さらに将来に向けてリーダーシップを果す一員として大成したいものである。



卒業五十年に思う

永井 隆 (22)

昭和十八年に医学部を卒業して今年で五十年になりました。本年三月の卒業式に招待されましたので出席致し、学生時代の感激にひたり、多くの感銘を受けたことでした。とりわけ石川塾長の式辞(三田評論、九十三年五月号に全文記載されている)を拝聴し改めて慶應義塾に学んだことの喜びと誇りと意義を感じました。

それはさておき、卒業して五十年間、医療にたずさわって思うことは医療そのものや医療のあり方が著しく変わったということです。言うまでもなく疾患そのものも変わって来ています。私が卒業してすぐ陸軍軍医として勤務し昭和二十年に整形外科教室に戻った頃も幼児先天性股脱と脊椎カリエスを主とする骨関節結核の患者が双壁でありました。また例えば腰部椎間板ヘルニアの手術が行われ初めたのはその後であり、私が当時の整形外科集談会東京地方会で「後部椎間軟骨結節による脊髄神経根の変化」を発表したのは昭和二十二年一月のことでありました。検査について言えば、検査技師はレントゲン技師しかおりませんでしたので、脳脊髄液、関節炎の検査は

勿論のこと、尿、血液の検査も自分で行ったものです。赤沈検査については岩原先生が大変にやかましかったことです。現在のように多くの検査結果によって患者の疾患についての情報を詳細に知ることは出来なかったのではありません。治療法特に手術方法の変遷についてはふれる必要もないことと思います。

このような事にも増して大事なことは医療のあり方が根本的に変わったことでもあります。結論的に言えば医療が過去の医師主導から患者主導になって来たことでもあります。我が国で医師の説明義務に関する裁判例が出たのをきっかけに、昭和五十年代から医師の説明義務について医事法学的立場から主として法律家によって議論がなされていたところ、昭和六十三年に「インフォームド・コンセント」(医師の説明を理解した上での患者の同意)を取り上げて以来、医療におけるインフォームド・コンセントということが医師間においては勿論のこと一般に重要視されてきました。他方、一部の辯護士がとなえる「患者の権利宣言(案)」、更にはその後に表示された「患者の権利を守る法律(案)」によってインフォームド・コンセントの重要性が一般にますます浸透してきました。このことは医療裁判の増加傾向、とりわけ医師の説明義務に関する判決例が増加していることでも明らか

かであります。要するに医療は医師の裁量と患者の自己決定が一致しなければ出来ないということであり、これが患者主導と表現されるわけであります。

また現在の医療は医師だけでこれを行なうことは出来ません。各種の多くのパラメディカルの人々の協力を得て遂行出来るものであります。特に昨年の第二次医療法改正にみられるように、医療の場における看護婦と薬剤師の立場が明確化されて、看護婦、薬剤師は医師と全く同格におかれることになりました。他の職種のコメディカルの人達についても同じであると考えるべきではないと思います。

つまりこれからの医療はそれぞれがそれぞれの人格を認めた上での医師とパラメディカルおよび患者との協同作業であるということであります。これからの新しい医療に主力となって携わるであろう若い医師の方々には患者の人權を尊重し、多くの医療従事者の立場を理解して、これからも進歩するであろう医学を裏付けとした正しい医療のリーダーとなって活躍されることを願うものであります。



平成5年3月23日、塾卒業式当日。日吉キャンパスにて。
左より、塩路君、本多君、永井、野口君。

宝 物

田 中 一 雄 (24)

平成五年七月九日午後一時五分、AF275機は成田を離陸、一路パリ・シャルル・ド・ゴールに向う。更にAF616機に乗りついでミラノ・リナーテ空港に向う。リナーテの到着ロビーには我々夫婦にとってかけがえのない大事な、大事な宝物が待っているのだ。我々の一人娘が数年前イタリアに勉強に行きイタリア人、アニバレ・ザンバルビエリ君と結婚、一昨年五月十九日にミラノの病院で出産した。アニバレ君はミラノの南、一時間位の所にある古い街パビヤの大学の文学・哲学部の歴史・地理学科の教授、誠に好人物で娘を大事にして呉れるのがせめてものなぐさめだ。結婚そのものはいいも悪いもない。そしてそのままイタリア人になってしまった。出産に関しては母親がついてやるのが普通らしいが、小児科医の案内は何とも気がでなかつたろうが、どうしても長い間ついていてやる事が出来ず、遠い異国で一人で出産する娘の健気さを感じ乍らもうじらしくて、時に胸がいっぱいになる事もあった。アニバレ君はじめ、周囲の日本人の友達が皆いい人でいろいろお世話になり感

謝している。出産までは毎日の様に心配して電話していたのに、無事生れたとなると勝手なもので今度は早く赤ん坊を見たくて一ヶ月目、六月二十一日に出掛けて行った。はじめて見た時は感激した。中学や大学の仲間比べて遅く七十代になってはじめて恵まれた孫。男の子、手、足、股関節をさっと診て「ああよかった、何ともない。」きれいな顔をしている。二日後の二十三日に地区の教会で洗礼をうける。我々夫婦ははじめての経験だったが、割合に気軽く、お祝をして呉れる知人達と共に神父さんのしぐさを注視していた。然し両親と親戚の者は緊張していた。洗礼名はリーノ・ケン・ザンバルビエリ。式後ごく簡単なパーティーでおもてなしをする。彼は静かにベビーベットで寝ている。

家内はオシメをとりかえたり、風呂に入れたり楽しんでやっている。私は時に抱いているようにと渡されるが床が大理石なので落したら大変とばかり緊張する。幸いまだ動かないからいいが。赤ん坊がいてはドーモのある中央にも、レストランにも行けず、ただただ子守りに明け暮れた。日ならずして喜びと心配を織りませた心境でリテーナを後にする。リーノ丈夫に成長しますように。帰ってから毎月彼の名前で貯金している。続く限り積んであげるよ。

その後六ヶ月、一週間に一回電話する。時に先方からかかる時は何か変わった事があったのではないかとドキッとしますが、特別の事もなく至極元気でやれやれ。その間ちよこちよこ成長の寫真が送られてくる。

十二月二十七日再びリナーテに向う。

アニバレ君に抱かれて現われたリーノ、ああ可愛い。でも小さいと思う。只馴れない家内の顔にげんげんな泣顔をしたが、翌日からは気嫌よくなった。半年たったからこんなオモチャがいいか、あんなオモチャがいいかと幾つか買って持って行った。はじめての経験、孫のオモチャを買うのがこんなに嬉しいものか。イタリヤにもないわけでもないのに。電話のオモチャが一番気に入ったようで、テーブルつきの椅子に坐らせられてガチャガチャやっている。何かというと受話器を上下の区別なく耳にあてようとする。親のしぐさを見ているのだろう。相不変、食欲余りないが至極元氣。一月一日家内と「初もうで」の積りでドォーモに行く。お正月のミサが行われていた。莊嚴だ。私は日本流に「リーノ始め家内安全でありますように」と祈り、廻って来た獻金箱に何がしか入れる。どうもよくわからないが我々は神様、佛様にお願いばかりしているが、あちらの人は感謝のお礼が主題のように思われる。私一人の勝手な想像か。

一月三日、濃霧でリナーテ飛行場は閉鎖。心配した四日だけ晴れて無事帰る。寒さは厳しいが老いも若きも毛皮につつまれた女性の姿の恰好いい事。冬のミラノは素敵だった。

またまた週一回の電話と送られて来る寫真。特別の事もなくいい子になっているようだ。平成四年のゴールドインウイークを過ぎると、はや気持はミラノにとんでいる。満一才を迎えて浴衣に兵児帯をもって行く。あんまり大きくならないがすっかりしてよく動き廻る。つかまり立ちをし乍ら時々二、三步歩く。四つ這が早い。お誕生日にオモチャを沢山頂いて狭い家の中おき所がない。今回は古くから我が家にいる二人の従業員にイタリヤ旅行ツアーをプレゼントし、帰国の前日に皆で買物をし食事をして喜ばれた。何時もの通りリナーテの別れはいやだった。

またまた電話と寫真の半年を過ぎし昨年の暮は、娘は待っていたようだが冬は霧がひどく帰りの飛行機が不安なのでやめる事にした。それに家内も体調をくずし、今年一月に入って私も心臓のトラブルを起し、今も薬の世界になっっている。暮、正月に行かなくてよかった。

ついでアニバレ君の一年間の休暇が決まり、娘、リーノと共に日本に来る事になったので家の中の空いている

部屋をいろいろ修理し、ようやく整理が出来た所で迎えに行く事にした。リナーテでリーノを喜ばしてやろうと思っ
て私はフォルクスワーゲンのミニカー、家内はパンダを積んだトラックをもっている。早く手渡して喜ばしてやりたい。

機内のスクリーンに現在の飛行位置が寫されている。

やっとライン川を越えたところだ。早くド・ゴールに着け!! 早く早く。

リナーテには夏時間の九時三十分に着く予定。

バレエダンサーのあしについて思うこと

小川 正 三 (29)

歩行様式に蹄行型 (Unguligrade) と趾行型 (digitigrade) と蹠行型 (plantigrade) の三通りがあることは周知のことと思う。蹄行型の代表的な動物といえばウマ(奇蹄類)やウシ(偶蹄類)などがあり、趾行型の動物にはイヌ、ネコを始め多くの動物をあげることが出来る。蹠行型の代表的なものは霊長類がある。ヒトの gate pattern は蹠行型が大部分で、趾行型も加味されている。

ではヒトには蹄行型はないだろうか。実は女性のクラシックバレエダンサーは蹄行型で立ち、歩き、踊るのである。勿論趾行型や蹠行型での踊りがないわけではないが、バレエの華はこの蹄行型——バレエ用語ではポアントという——にあるといっても過言ではない。しかし一般の人がこれを真似しても爪先だけで立つことすら出来ない。ウマの足の接地部分には爪の変化した蹄があるが、ヒトの爪は接地面にはない。この蹄の役目をするのがトウシューズ (toe shoes) である。蹄行型であるためには先ずトウシューズが不可欠である。次に五本の趾をまとめて、趾先で体重を支持出来るものではない。体重

例えは疲労骨折でいえば第二か第三中足骨で、他の中足骨の疲労骨折は見たことがない。下腿では圧倒的に脛骨である。

女性のバレエダンサーは、始めから終りまでポアントで踊るわけではない。趾行型——バレエではドミ・ポアントという——の踊りもあり、蹠行型の踊りもある。ただ何といってもポアントの踊りはバレエの華であり、そのために血の滲むような訓練をするわけである。

女性のバレエダンサー以外に蹠行型の踊りが無いわけではない。トロカデルロというバレエ団は全員が男性で、女のパートも男が女の衣裳でトウシューズをはいて踊る。しかしこれは歌舞伎の女形とは違い、所詮、奇を衒ったものと思う。しかし、あしの医者としては彼女ら（本当は彼ら）のあしを調べてみたいものである。

足だけで蹠行型、趾行型、蹠行型を述べてみたが、ヒトとウマとはその目的が全く異なるものである。ウマは速く走るために蹠行型になったのであり、ダンサーは芸術のために蹠行型になったのである。しかもウマは四足獣で四本、又は二本の肢で体重を分散させ、安定もよい。ダンサーの場合は先ず一本の下肢で立ち、高度の踊りを演じ、高度の安定性、平衡感覚、鍛えられた筋力がなければならぬ。ヒトが歩くときは障害物をまたいだり、

よけたり、いろいろの複雑な運動が出来るが、四足獣や類人猿ではさえない。こうした器用な使い方は出来ない。これを可能にしたのは骨盤の成り立ちにあるといったのは水野祥太郎博士であるが、この辺のことは水野先生の名著「ヒトの足」創元社、に詳しく出ているし、紙面の都合で省略する。ヒトが直立するようになってまだ百万年かそこそこのことで、骨盤を中心とした諸問題も少なくない。今後調べてみたい。

クラシックバレエを医学的に深く掘りさげることによって、ヒトの足の不可思議さを解く鍵が隠されているように思われる。

リリーフ院長の記

藤原 由利夫（専3）

二十年間勤めた社会保険病院（埼玉中央・都南総合）を辞し、五十二年から高崎市・医療法人・野口病院に勤めております。救急医療を主眼とした六十余床の外科系病院に整形部長として週四日の勤務。休みの一日は永寿病院で整形と形成の研修をさせて頂いておりました。当時五十一歳。一寸遠方ですが快適な選択と思えました。

しかし幸運は久しからず八年目の六十年一月、野口俊和前院長（31）はクモ膜下出血で急逝されました。突如として思いもかけない院長という大役を負わされることになり未知で苦手な経営管理職に立たされることになりました。この時、野口家の後継者三名はまだ医大生、スタッフは私と外科の三名、それに脳外と内科の少数のパート医だけでした。街では早くも病院閉鎖の噂が流れました。病院内の維持と職員の生活をかけ、行ける所まで頑張ろうと全職員が涙ながらに誓い合ったのでした。

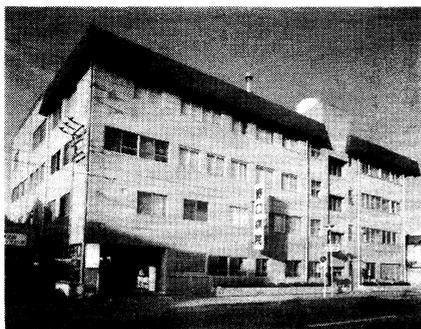
週五日の勤務となり一日の実働時間は十時間余、休憩は昼食をとる間ぐらいのもので昼休み時間は「病院運営会議」「臨床連絡会」「リハビリ検討会」「主任会議」

等に当て今に至っております。土曜日の診療も十八時まで行うのでこの日に多い研究会等各種イベントには殆ど参加出来ません。一人整形では無理なので既に十年前から群大整形に医師派遣の申請を続けてきましたが今だに実現出来ません。宇都宮の高瀬君の好意で自治医大から応援を求めようとしたのですが理事長（前院長夫人）から「三男坊を群大整形に入局させたいので他校に頼まず群大からのパートですまされなにか」と云われ孤軍奮闘が続いている次第です。

外傷、腰痛、関節痛等が多く、外科では消化器外科に力を入れております。学閥色の濃い異郷での仕事はやはりづらいもので患者を紹介してくれる医師も接骨師も限られます。救急車は宝船の到来ですがパートの当直医は必ずしも受け入れてくれるとは限らず経営陣をいらさせます。ベッドの利用率は約八五％、どうしても波があります。時代は基準看護を要求しておりますが看護婦と建物面積不足で当分の間実現出来そうにありません。三十年前の建物には構造的欠陥があり近代化しつつある国の基準に対応し切れない部分があり悩みのひとつです。さりとて過剰投資も出来ず少しずつ全館化粧直し、ベッドの入れ替え、病室、トイレ、待合室、面会室の美化にとめてきました。経営は低空飛行ながら先ずは順調に

推移いたしましたがいままでそうは行きませんでした。先ずは類焼による看護婦寮の焼失、再建（部分焼失のため保険金は少額）でした。最大の問題は医療技術者の不足問題で（引き抜き合戦とも云われ）当院でも可成りの被害を受けました。残った看護婦の心の動揺もあり給与改正や内部努力等を重ね、どうやら流れを止めました。しかし職員の週休二日制には至っておりません。今年になり准看生が五名新採用された上、先きに辞めて行った看護婦が三名戻って来ました。これは「出てはみたが矢張り古巣が好かった」とのあかしで明るいムードが甦り、ほっとしました。今年で当院に来て十七年になり整形の手術件数は三、〇〇〇件を越えました。（この中、他医によるもの三五〇件）。今でも手術結果に一喜一憂いたしますが管理職となり六五歳になると体力と能（脳）力の限界を感じ好きな手術も重荷に思え、この頃は週一回群大から来るパート医に任せるようになりました。通勤は週二回往復、週三日は高崎のマンションに泊りますが昔日の夜遊びの力はずでなく明日を考えて早く休むことにしています。日・水曜の週休二日は勉強と休養に欠かせぬ日、この日あればこそ明日があるとの思いです。過去も将来も私に課せられた仕事は病院を維持発展させ後継者につなぐことです。幸い三名の子供のうち次男

坊は昨年群大から戻って来て、外科常勤医として診療に当り、皮膚科の長男と整形の三男坊もパートながら診療に加わるようになり明るい前途が近づいて来ました。誰にでも色々のゆき方があるように、私の医人生の後半は吾が家も自分も半分捨て、他人の病院を守ることが責務となりました。これも乗りかかった船、天命と思いつつ最後まで「リリーフ投手」の役目を立派に果そうと思っております。私以外により良い院長が存在したかも知れませんが、七十年の歴史ある病院のお役に立てたことを一生の誇りとし、バトンタッチする日の来るのを楽しみに待つております。



近頃の夢

森 雅 文 (30)

アリストテレス自身はイエスともノーとも認められぬ「あいまいさ」を認めているにもかかわらず、科学の世界では彼を源とするイエスカノーしか存在しないと仮定した記号論理学に従って、「あいまい」を排除しなければ理論として認めないという状態が続いておりました。

これが「複雑なものは、いくつかの部分に分割し、それぞれが客観的に、明確に認識できるまで繰り返し分割を行って説明し尽くそう、その分析された結果を合成して全体を把握しよう」という物質と理性について分析的、客観的、普遍性を重視するデカルトの要素還元主義的方法論に支配された物質中心主義とあいまって、永い間科学界を支配し続けました。

デカルトの方法論は後に近代合理主義にまで育って、現在の科学技術の隆盛を招きまして、その功績はまことに大なるものであります。

そして近代合理主義に基づく科学技術は、それまでの「あいまいなもの」を次第に説明してゆきましたが、非線形なものにはあるところまでしか立ち入れなかったの

で、なお多くの「あいまいなもの」が誤差あるいはノイズなどとして取り残されておりました。

パスカルの確率論は「あいまいさ」を取り扱った唯一の理論とされておりませんが、確率論のみでは「あいまいなもの」を十分に説明できません。また彼の主張した個別性、主観性、総合性を重視した考えは世に受け入れられぬままでした。

しかし主流になりえなかったパスカルが考案した手動計算機は、デカルトの後裔たちの技術によって、皮肉にも現在の花形であるコンピュータとなり、これを駆使して約二十年来、数学者や物理学者が「あいまいなもの」を解きあかそうとして新しい理論を發展させつつあります。

特に日本において研究や実用化が進んでいるのは東洋と西洋の哲学の相違によるのか、本タイトルの「近頃」などもあいまいですが、平素全くあいまいさの多い日本語にどっぴりと漬かっているので有利なのか甚だ興味深いところでありませう。

ファジィは皆様すでに御存知のように扇風機や洗濯機に実用化されておりますが、その他カオス、フラクタルなどの今まで馴染みのなかった理論が生まれ、非線形を取り扱うようになり、すでに海岸線や樹木の形など自然

界の様々な現象が、非線形振動の微分方程式によって解析されており。

医学の対象であるヒトは生物であり開放系であるので、心情や身体各器官の状態にも動きにも非常に「あいまいさ」があり、しかも「ゆらぎ」がある非線形なものであります。

ゆえに正常時には一定の秩序あるソリトンの状態でありますが、病的になったときにはカオスの無秩序になってしまうのではないのでしょうか。

いずれにしても生体のなりゆきを確定することは、自然界を分析するに比べてはるかに困難であります。すでに心電図R-R間隔のパワースペクトルが1/fノイズとして「ゆらぎ」、脈波の波高にもおなじく「ゆらぎ」があるという研究は可成り進んでおりますし、今後これらの理論を医学に導入する余地はいろいろあると考えられており、将来がおおいに楽しみです。

さあ今夜も整形外科の分野において、いままで「わからない」「誤差だ」とされていたところを見直せるうれしい夢を見ることにいたしましょう。

では諸兄おやすみなさい。

「港区慶應整形外科の会」

奥村守彦(特)

この会は、一九七五年、済生会中央病院、東京専売病院、北里研究所病院の三病院のカンファレンスに都内で開業の仲間十四名が参加して発足しました。開催は年六回(原則として奇数月の月曜日)で、この三病院が一年交替で世話役の幹事をつとめ、三田の讃岐会館で行われています。各病院や開業の先生方が、珍しい症例やむずかしい症例のX線写真やスライドを持ちより勉強会を行っております。また、夏(八月)は納涼会、冬(十二月)は忘年会ということで勉強会はなく、親睦の会としています。

特にむずかしい会則はなく、慶應整形外科出身の先生ならば、地区は問わず、参加は自由です。会費は一回四千円で、準備とか案内などは科研製薬に手伝って買っています。

この会も昨年、平成四年五月で第一〇〇回を迎え、OBの先生方にも出席いただき「記念の会」を行ないました。年数で云えば十七年間も続いているわけで、このよ

うな会は余り他に例がないのではないかと自負しています。現在のメンバーは三十二名です。矢部教授御就任までもなく、この会に讃岐会館まで、おいで戴いたこともあります。

『港区慶應整形外科の会』

一九九三年五月一日現在

- (1) この会は、慶應出身港区整形外科医を中心に、都内慶應出身の会員で構成されています。
- (2) この会は、二月月に一回開催され、カンファレンスを中心に実施されます。
- (3) この会は、下記 三施設一年ごとの、もち回り幹事で運営されます。

北里研究所病院

(代表 芝田 仁)

東京都済生会中央病院

(代表 鈴木 信正)

※本年度幹事

東京専売病院

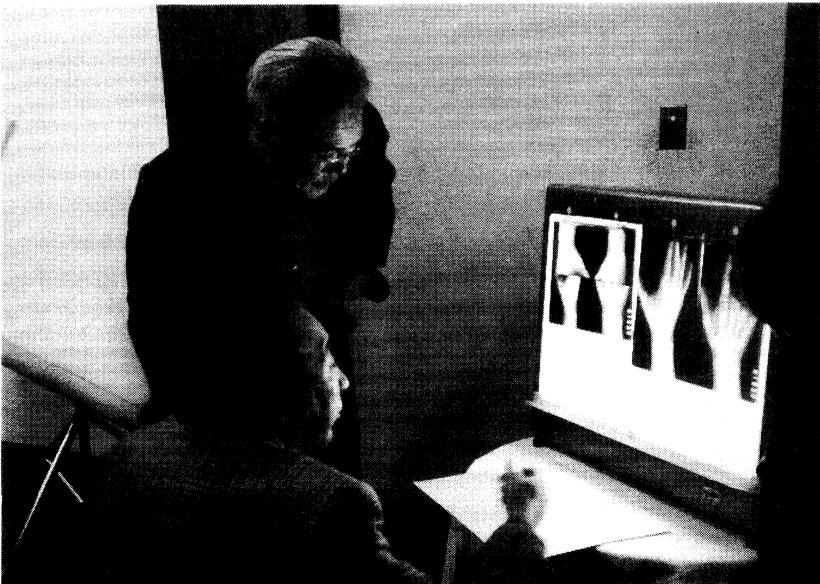
(代表 彦坂 一雄)

来年度幹事

- (4) 会員 三十三名

他の会合と重なりたりして、出席率のよくない私ですが「ふるさと」発行ということですので報告させて戴き

ました。



日中脊椎・脊髓損傷 学術交流の経緯

大谷 清 (37)

第二回日中脊椎損傷学会は一九九二年十月三十、三十一日の両日、中国上海市で開催された。日本から約二〇名が参加し、成功裡に終了した。詳しくは教室藤村祥一講師が第二回日中脊椎損傷学会印象記として整形外科四十四巻三号に書かれているので、拝見頂ければ幸甚である。

日中脊椎損傷学術交流の経緯をたどると中国の周天健先生の両国学術交流にかける熱意と努力によるものである。先生を簡単に紹介すると、私とはほぼ同年齢で、旧満州で生れ、第二次大戦中、戦後を旧満州で経験された。中国政府の命令でソ連留学を目的にロシヤ語を学ばされたが、留学直前で中ソ間の不穏から中止となったそうである。一九八四年日本政府によって北京に中国リハビリテーション研究センターが開設されるや、先生は当センターの脊椎損傷部長に就任され、今日に至っている。一九八五年津山直一先生の好意で国立身体障害者リハビリテーションセンターへ留学されたのが日本との交

流の始まりで、留学中は日本の脊椎損傷外科を学ぶために精力的に各施設を見学されていた。先生は大へんな親日家で、帰国されるや、日中両国の学術交流にかける先生の熱意を持って、中華医学会を説得し、両国間の学術交流の道を開いた。当時の中国はすべて国営で、中華医学会も政府機関であり、中国の医学会はすべて中華医学会が主宰した。先生は、中国有数の医学雑誌『中国脊椎損傷学』の創刊者であり、現在も編集主任として活躍されている。

第一回日中脊椎損傷学会は一九八八年十月三十日～十一月一日の三日間中国西安市で開催された。日本側から国立リハビリテーションセンター総長津山直一先生、徳大井形高明先生、愛知医大丹羽滋朗先生、神奈川リハ安藤徳彦先生（現横浜市大）等と私を含め約十数名が出席した。中国側からは選抜された約二〇〇名が出席したが、彼らの学会出席費用すべては中華医学会、つまり政府負担とのことである。中国は組織化を重視する国柄で、開会式には西安市長を始め、地域の保健衛生関係者多数の役人が出席し、挨拶を述べるといった形式だったセレモニーであった。

第一回学会が終了して中華医学会役員、中国側学会関係者と我々との懇談の場で、引き続き両国間の学会を当分の間中国で開催したい旨の強い意向が中国側から出

され、さしあたり第二回同学会は一九八九年十月五〜七日、北京市中国リハビリテーション研究センターで開催することが決定された。日本側でも第二回に向けて準備が進められ、約三十題の一般演題、六題の教育講演が私のもとに集まったが、開催直前で天安門事件という不測事態のために中止せざるを得ない結果となった。その後、中国側から開催に向けての要望が寄せられたが、中国国情を見守りつつ、一九九二年十月三十、三十一日第二回同学会を上海市で開催できるはこびとなった。

第一回から約四年経過して第二回が開催されたが、この四年間に中国は大きく変貌した。急速に民営化が進む中で、中華医学会も民営化され、かつ幾つかに分化された。その一つの中国医学基金会が昨年の第二回同学会を主催した。中国の学会は最近、日本でもみるように、いわゆる学会屋が開催している。学術面では、今日の中国は日本を始めとする先進諸国の医学情報は容易に知り得る。しかし、医療機器、設備などを欠くことから臨床実施ができない分野もあるが、この四年間で臨床面でもすばらしい進歩がみられていることを実感した。分野によっては日本が遅れをとっている面もある。例えば骨髄性腫瘍の全摘手術に彼ら独自で開発した器具を使ったクライオサージェリーが積極的に行われ、すぐれた成績を

出していた。中国は今や急速に経済成長をとげているが、それに並行して医学も進んでいる。計り知れない力を秘めている国のようなだが、あの大国、大民族を統治するとは容易でない。社会主義的経済発展が中国にとっては望ましい途と思う。

次回の第三回日中脊椎骨髄損傷学会は一九九四年十月頃北京市で開催予定である。中国はどこへ行っても古い歴史のあるところばかりです。同窓諸先生、観光を兼ねての参加を歓迎します。



蘇州旅行中、寒山寺前で
左より藤村祥一先生、小生、王東先生、
岩坪暎二先生（脊損センター）
(1992年11月2日)

ポルシェ 911 カレラ 2

田 辺 雅 久 (37)

在局時代から、ちょっとエンスーなクルマに憧れたが、無給の身では高価なものには、とても手が届かず、エントリーカーは、ルノー 4 CV の中古になってしまった。

先輩の矢部教授と組んでやった日比谷病院のバイト当直料が、当時八〇〇円の時代に中古ルノーが十六万円というのは、かなりの出費であった。一九六〇年といえば三十年以上も昔のことだ。4 CV にはいろいろのトラブルで悩まされたが、自分にとっては、初恋のクルマのように、生涯忘れることはできない。ルノー 4 CV のエンジンレイアウトは RR で、水冷四気筒、OHV、748 cc、21PS / 4000rpm、日野のライセンス生産になる、非力なシロモノではあったが……。慶應病院内では、純フランス製の 4 CV に小佐野教授（前病院長）が乗っておられたのを記憶している。

その後、クルマ遍歴がはじまり、エスカレートしていく。夢はふくらみ、いずれ、ポルシェかフェラーリに乗ってサーキットを走ってみようと考えてるようになる。この夢は長年実現せず、決断がつかないままに過ぎてきた。

と、ある時、友人からアドバイスを受ける。「今乗らないと、チャンスなくなるヨ。あの手のクルマは年をとってからではシンドイぞ」。

この一言でポルシェ 911 カレラ 2 (MT) の購入が決まる。一九九二年四月納車となる。ポルシェ 911 は カレラ 2、カレラ RS、カレラターボ、いずれも後輪のみ駆動の RR。エントリーカーのルノー 4 CV と同じ RR であるのも何かの因縁だろうか。911 のうちでもカレラ 4 はフルタイム 4WD だ。はじめ、カレラ 4 が一九八八年に新世代の 911 として華々しく発表された。この時、911 はカレラ 4 がファイナルかと思われた。しかし、911 というクルマは RR でなければ面白くないというフリークの要望がつよく、翌年再び RR のカレラ 2 が出てくる。その後、一九九二年から始まったカレラ カップレースに刺激され RS とカレラ 2 の人気が、いやが上にも盛上がつてくる。カレラ 2 のエンジンは 3・6ℓ 空冷水平対向 6 気筒、俗にフラット 6 OHV をリアアクスルのオーバーハングに積み、加速時リア荷重増大に伴うダウンフォースと強大なトラクションにモノ言わせて、F1 なみの走りを表現する。最高出力 二五〇 ps / 六一〇〇 rpm、最大トルク 三一・六 kg / 四八〇〇 rpm。ブレーキは四輪ともベンチレーテッドディスクで、三

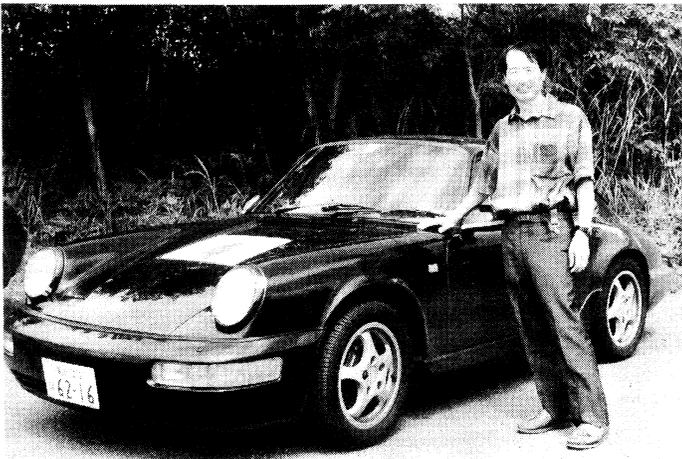
○ km速のフルブレーキングでもフェードしないというほどタフなやつだ。

一九九二年四月、ボルシェ911カレラ2の試走を谷田部テストコースで行う。一速発進時、一点でカチッとくるクラッチミートは、このクルマ独特のものだ。素速く二速にシフト、スロットルを全開する。大きな加速で上半身にGを感じ、のけぞるようにシートに押しつけられる。シフトアップ毎に全開のまま、四速まで入れる。レブカウンターの針はレッドゾーン六八〇rpmに軽く到達。二〇〇km速まで一気に吹け上がる。五速でも加速は続く。このクルマのゼロヨン十三秒台がウソではないということがわかる。スタート1kmで二五〇km速をマークした。

一九九三年四月、富士スピードウェイを走る。まず、(1)コースのラインどり、(2)スロウイン、ファーストアウトによるコーナリング、(3)タックインとヒルアンドトウのテクニク、(4)ブレーキングのタイミングについて、プロドライバーの指導を受ける。そして、タイムトリアルに挑戦。しかし、自分にとって、富士スピードウェイ全長四四七〇mで二分を切ることは、なかなか難しいということがわかる。

過日、小佐野教授をボルシェにお乗せしたところ、先

生は、いたくボルシェがお気に召され、さっそくボルシェ968を購入された。先日、先生の箱根ワインディング攻略のお供をした。先生のドラテクはお見事なもので、十年、若返られたようにお見受けした。



1993年4月、富士スピードウェイにて

ポルシェというクルマは、乗れば愉快になり、走れば元気の出る不思議なマシンだ。気分さえいい時にシートに坐わり、エンジンに点火しただけで精神が高揚してくるのがわかる。フラット6の、いかにも刺激的なサウンドがモヤモヤを、たちどころに吹っ飛ばすこと受け合いだ。生きている自分が実感できる。このマシンには、何かオーラといったものが充満しているように思われる。それにしても、ルノー4CVに始まって、三十三年間にマニアックなクルマ数十台を乗りつぎ、ポルシェ九一一カレラ2まで、自分ながら、よく走ってきたものだ。この先は、フェラーリ512TRか、ケータハム・スーパー7あたりでサーキットをカッとばしてみたいと考えている。(完)

「医局の思い出として開業して二十年……」

阿久津 寿 一 (特)

大田原日赤勤務を最後に、開業して早や十九年が過ぎ今二十年目に入って居ります。三十八歳で開業した当時は未だ馬力もあり、大田原日赤時代からの関りのあつた横紋筋肉腫のフォークオーター、アンプレーションとか人工股関節置換等もやって居りましたが、最近では五十七歳という高齢(?)に加え医療環境の変化に伴い徐々に億劫さが増し、医師会、ライオンズクラブ・アマチュア無線等の会合、最近覚えた篆刻の作品製作等に追われている毎日です。今夜は何も予定はないなとほっとしていると、先生書類を書いて下さいと、事務職員が、どっと診断書を持ってくるといった具合で、なかなか自分の時間が持てない現状であります。その間、教室も、岩原先生御夫妻の御他界、又、先日、池田先生がお亡くなりになり、しみじみと、世の移ろいを感じずには居られませぬ。顧みまずと池田教授が倒れられた報を当日、医局で知りましたが、丁度その時は北海道で、何かの学会(日整会?……忘却)中で、医局も比較的閑散として居りまし

た。私もその翌日、学会に行く予定でしたので北海道に行きました所、岩原先生にお逢いするや否や、「君！教授が倒れたというのに、こんな所に居る奴がいるか！」と吐られたことを想い出します。その後一時、御元氣になられゴルフなどもされたのではなかったかと思いが私の記憶も曖昧になって来て居ります。その後の長い闘病生活は、先生は勿論のこと御家族の皆様も大変だった事と思えます。慎んで先生の御冥福をお祈り致す次第であります。

さて、話を元に戻しますと、この那須地方も日々、変わりつつありまして昔日の面影は僅かに千本松農場附近に留めているにすぎません。信号三回待ちなど車の渋滞にまきこまれることも屢々です。現在この県北では、岡田先生、足立先生の頃より始まった、県北整形症例検討会を、日赤の大熊部長を中心に、隔月毎に開催し、他大出身の先生方も加えてお互いの意志の疎通を図り、又、日進月歩の最新知識をも得ることができ、私共開業医にとっては、大変勉強になって居ります。最近整形外科でも、種々の意味から、無床の診療所が増えて来ましたが、私の所は、ベッド十八、職員十七、パート三で何とかやって居ります。然し乍ら、まず満床になることは無くなりました。ただ、整形外科的外来患者は、まあまあで、

或る外科の先生によりますと、外来の八割方が、内科の患者というよりは、毎日でも外科の小手術（処子）が出来る整形外科医は幸わせかなと感じている今日、この頃であります。



『頸椎損傷実験』のころ

津布久 雅 男 (43)

昭和四十一年の夏は、三谷・浅井両先生と一緒に立川市の自衛隊航空医学実験隊の二十メートル以上もあるレール上を走る衝撃実験装置で猿を使って、頸椎損傷の実験を毎週のように続けました。当時交通事故がふえて、鞭打ち損傷が翌年の整形外科学会のテーマとなっていました。両先生は学会発表に向けて、自動車の追突事故をシミュレーションできるこの装置を利用することになったのです。

その時、私も池田教授から、いろいろの頭位における頸椎損傷の発生機序の実験的研究をするようにいわれていましたので、期限は特になかったのですが、両先生に同道して装置の応用はできないかと、実験の間をみては、猿を使って予備実験をしました。時速四〇〜六〇キロメートルで走るトロックが水柱のシリンドラーにピストンを突入させて急停車する時、負加速度が衝撃となって損傷をおこす仕掛です。両先生は着々と実験を進めますが、当方の実験は頭蓋や脳・胸椎などの損傷は衝突速度の増加とともにふえますが頸椎は強靱で仲々損傷がおき

ません。途中猿の費用も高くなるので兎にかえました。兎では頸椎損傷もおこるようになりましたが歯突起骨折が多いのが印象的でした。立川での実験のあと、兎の頸椎や猿の頸椎の特徴を調べたり、頸椎を損傷させる方法をいろいろ考えたのですが、実験はデッドロックに乗りあげたようです。

諸先生方から、損傷をした組織の修復過程をみる研究が動物実験の限界だろうとか、死体が使えればとか、光弾性実験の可能性を助言されたりしましたが仲々思うようにはいきませんでした。しかしその中で何と云っても新しい気持で再び研究に向うことができたのは、池田先生から、小林(慶)君と協同研究を進めるようにといわれてからでした。

今迄の実験経過を説明し、再検討しあった結果、今後の進む方向として、極めて緩徐な外力で頸椎を損傷させる実験をすること、臨床的には等閑視されがちな歯突起骨折の文献検索と症例を集めることなどを相談しました。翌年の昭和四十三年夏、国立塩原温泉病院の出張を終わろうとしていた夏、池田教授が脳卒中で倒れたといわれて驚いたものです。幸いに大事にはいならず、数ヶ月後小林君と韭山病院に入院中の先生をお見舞したところ、ゴルフを始めたよと言って大変元気で顔色もよく私達も

一安心しました。

新しい実験装置の完成をまって、秋から再び実験を始めました。今度は頸椎に損傷がおこるように、頭部と軀幹を別々にギプスで固めて、頭部は衝突板に軀幹は台車に固定した上で台車を動かし、頸椎に後弯を強制しながら圧迫力を加えるようにしました。弾力性のある円柱の両端を固定して圧迫を加えて挫屈をおこさせる要領です。徐々に力を加えつつ頸椎後弯を強制するといつも第4・5頸椎高位で損傷がおきます。環椎や軸椎の損傷は頭蓋からの衝撃的外力の作用でおきることが多く下位頸椎は達しました。この間に文献検索もすすみ、臨床的研究も小林君との協同で歯突起骨折をはじめとして、軸椎外傷性滑り症、環椎骨折と発展していくことができました。実験だけやみくもにやっている時は臨床経験の少ない私達でしたから、海図のない航海のような状態でした。そこから脱出できたのです。池田先生も喜んでいらっしゃるようでした。私はその後、立川共済病院へ一年出張しその後国立村山病院に行きまして、研究をまとめる余裕がありませんでした。しかし折角小林先生と協同でできた実験だし、臨床研究ですので、昭和四十六年に論文を書いて九月に、学位審査をしていただきました。小林君も十二月

に審査をうけました。池田先生は倒れてから三年目でしたが大変元気に回復し主査をとめて下さいました。



『五十代を駆ける』

津布久 雅 男 (43)

大学時代、陸上競技部に入って、中距離走と槍投げを始めたのがきっかけで、レースに向けての緊張感、勝敗の機微、走ることの楽しさを味わい、体力に自信を深めることができました。そしてまた機会があればと思っていましたが開業後仕事も一段落し、マスターズ陸上競技会が盛んになってきた六年程前から、短距離(百メートルと二百メートル走)の練習をはじめ、日帰りで参加できる大会に出してみることにしました。

今迄、千葉県大会、関東大会、東日本大会などに出ています。学生時代十一秒台であった百メートル走も、当初は十二秒後半だったのですが、この五年間に記録は徐々に短縮しています。最近はいつも十二秒前半で走り、時に追風参考ながら十二秒〇が出るようになりました。年齢によって衰えるよりも練習の効果が出ていることに驚いています。

二百メートル走はカーブの走り方の難しさやスタミナ不足の面があり、平均二十五秒後半です。練習方法によっては改善の余地があるかも知れませんがまだ研究不足

です。

槍投げの方は三十メートル台でその都度、好不調がはげしいのですが、これは練習不足のためようです。学生時代は四十五メートルは投げたのですが肩の力の衰えは脚よりも早いようです。

練習は週一回、土曜日か日曜日に一時間前後トラックに出ます。冬期は筋力低下を防ぐために二千メートル走を九分三十秒前後で三回やります。シーズンが近くなるにつれ、四百メートル、二百メートルと距離を縮めながら七分程度の力で走り、大会前には二百の全力走を五、十回程度はします。

また週一回は室内でローイングマシン(油圧式漕艇装置)を使って筋力練習をします。器械の上で仰臥位で足を固定し、上半身を起きあがる、腹筋群の練習と腹臥位でそりくりかえる背筋、臀筋群の筋力練習、膝をついて股関節伸展位での腕立てふせ練習による肩と肘の筋力練習です。百メートルが約五十四歩ですので、これを目安に四、五セット行います。最大筋力を増加させるよりも持久力を強めることを目的としています。これらのランニングや筋力練習もはじめは試行錯誤でやりすぎる面もありましたがこの二、三年は週一回ずつで充分と思うようになりました。

マスターズ大会は五歳きさまの満年齢わけです。私は今年八月を期して五十五〜五十九歳のグループに入り、大変有利な立場となります。昨年の記録（百メートル、十二秒三）で走れば県新記録となりますので練習にはげんでいましたが四月中旬虫垂炎が破裂して、開腹手術をうけるはめになってしまいました。七月に入り練習は再開できるようになりましたが、仲々元通りというわけにはいかないようです。

今迄も競技会に出ては、膝関節腸脛靭帯炎をおこしたり、下腿三頭筋や大腿の筋を傷めたりして回復するのに三、四週はかかったものです。治療には局所温水浴が有効だったり、筋力練習が大切であることを身をもって知ることができました。

現在、入院も外来も高年者が多くなりました。変形性脊椎症や膝や股関節の変形性関節症、骨粗鬆症による脊椎圧迫骨折で亀背のために腰背痛を訴える人々がいます。これらの人々の痛みの原因に筋肉の萎縮や筋肉の疲労が関係していることが多いと考えますので、理学療法のと、それぞれの人に必要な筋肉の練習を指導しています。老人達は理学療法のサービスばかりを期待して、何を今更とって仲々積極的に練習しようとする人は少ないのですが、まずは簡単な運動から、腹臥位になるだけ

でよいからとか、背のびをするだけでよいからとか、ばんざい練習とかを一緒にあって手をとり足をとって教えてやることで興味をもったり、自分から始める人もいます。根気のいる仕事ですが、いろいろな工夫と研究をしながらやっていきたいと思えます。



「これエ、本にしようよう」

―ある原稿がどのように本になったか―

片田 重彦 (51)

「これエ、いいねエ、本にしようよう」と言うのは矢部教授でした。私がスイスから名古屋に帰ってきて、チューリッヒ大学のものにならって、大学のレジデントのために『後療法のプログラム集』を編集し、矢部教授に見せたときの言葉です。矢部教授は名古屋時代によくこういう言い方を好みました。なにかを示唆するときは、命令形 (Do it) ではなく、かといって、Let's do でもなく、あえていうと Why don't you do? の形を好んだのです。私はこういうとき、たいてい、「そうですか? イイですかねエ。」というようなナマ返事をしました。というのは、矢部教授はいつも、『提案はすれども、統治せず。』なので、うっかりノリをよくすると、あとが大変なのです。

でも私は、本屋に売り込むのはタダだし、うまくいけばもうけもの、と思って、一応数社に企画書とサンプルを送って反応をみてみました。そのうちで、反応があったのはたった一社だけでした。南江堂の企画部の F 氏が

名古屋を訪ねてきたのは、その二〜三カ月後でした。

F 氏はちょうどシリーズになっている企画によいからと、私の話す内容に興味をもち、「とにかく原稿を作ってください。」というところまでこぎつけました。こうして思いがけなく矢部教授の提案が実を結びそうになりました。この F 氏、帰りぎわに私にそっと、こう言うのでした。「心配なのは、矢部先生原稿ですよ。あの人は遅筆で有名で、業界ではブラックリストの筆頭なんですよ。」

そこで私は、「それなら、矢部先生には原稿は書かせません、手の外科も含めて私と吉沢先生で書きますから、安心してください。」と言って東京に帰ってもらったのです。

それから三カ月間、私としては珍しく、日曜祭日返上で、寝る時間以外は大学につめかけて、文献、成書を読みあさり、リハビリテーションの写真を五〇〇枚ほど撮影するなど、この本の執筆、編集に没頭しました。

どうやらでき上がって矢部教授にお見せすることになりました。手の外科の部分を校閲してから矢部教授は、「題名は、『整形外科手術後療法ハンドブック』がいいな。」と決めました。

「著作者は、『矢部―吉沢―片田』でいいですね。」

と私が言うと、矢部教授は、「それはダメだ。君がほとんどやったんだから、『片田―吉沢―矢部』にしなさい。」と珍しく命令形を使いました。

F氏に原稿と写真一式を手渡すと、F氏はげげんな顔をして、著作者の名前を見ていましたが、『へんに書き直しをしてもらって、また完成が遅れるのも困るなあ。』と思ったらしく、そのまま原稿を持っていきました。

その後一年間も音沙汰がなく、本当に本になるのかどうか、不安に思っていたところ、F氏から、八十五年六月に初版本ができるご連絡がありました。あとできくと、F氏はこれを本にしても売れるのかどうか確信がもてず、しばらく机の中に温めていました。するとぶらりと東大の津山教授があらわれ、この原稿を見て、「こいつはおもしろい、これはいつ本になるんだい？」とおっしゃったそうです。このひとことで印刷部に原稿がまわされ、無事出版となったとのことでした。

さて、こうして本になった『整形外科手術後療法ハンドブック』は、はたして売れたでしょうか？ 驚くくらい、出版後の三年間で五刷という頻繁な増刷を繰り返し、早くも四年目に改定版が出ました。改定版も今までに五刷目に入りました。一、〇〇〇部売ればモトがとれるという医学書出版界において合計二万部ちかくという、

驚異的な大ベストセラーになってしまったのです。

昨年来日したチューリッヒ大学のシュライバー教授に、この本を贈呈しました。

「この本はシュライバー先生の作ったリハビリのシステムを私が日本に持ち込んだものです。日本では大変歓迎され、中国語にも翻訳されています。ですから、この本はあなたの孫のようなものです。」と私が言うと、シュライバー教授は、「私の大学のシステムがこのような立派な本となって日本に大変普及し、かつ中国もそれを学んでいるというのは全く驚きであり、かつとても感動的なことだ。たしかにこの本は私の孫に違いない。本当によいものを生み出してくれましたね。」と眼を輝かせて賛辞をくださいました。

後日談。八十七年の学会で私がエンダー法のシンポジストを終えたとき、矢部教授がまた言いました。「片田先生のエンダー法、あれいいねエ、本にしようよ。」

これで私は二冊目の本、『エンダー法テクニクマニュアル』を企画し、再び南江堂から出版することになったのです。

「歩んできた道をふりかえって」

梶原敏夫 (54)

慶應リハビリテーション科は、平成四年より千野直一先生が教授昇任となり名実ともに独立しました。現在では医局員の質・量とも豊富で専門医として活躍しており、日本のリハビリテーションの一大勢力となっています。

ここで慶大リハビリテーション科に入局し現在まで歩んできた道をふりかえってみたいと思います。私が慶應大学リハビリ科に入局したのは昭和五十年四月であり、同期には峰須賀研二先生（現産業医大）がいました。当時千野先生は米国にてリハビリ専門医の資格をとられ日本のリハビリを始めようとした時期で、泉田重雄教授（現高志リハビリテーション病院院長）のもとでリハビリ部門の責任者（講師）でした。リハビリ科は診療科としては独立していました。入局当時、二年先輩の石田暉先生（現東海大学）は整形外科医として出張し、一年先輩の木村彰男先生（現慶應大学）は国立療養所村山病院へ整形外科医・リハビリ医として出張し、大学のリハビリは千野先生が一人でリハビリセンターの診療にあたっていました。教育システムは十分ではなく創世期になり

ますが、同期の整形外科入局者とは異なり、整形外科だけでなく神経内科呼吸循環器内科を研修し、リハビリテーションについては、診断・処方・治療などについて千野先生直接の診療を中心としたぶっつけ本番の教育を受けました。昭和五十一年より国立療養所村山病院に出張し、整形外科とともに脳卒中、脊損、RAなどのリハビリを研修しました。整形外科の出張病院でもある村山病院はリハビリ研修の体制が整っており、リハビリ科入局者に対し優先的に研修するように配慮がなされていたものと思われまます。

リハビリ医として出張するようになったのは、昭和五十三年より慶應月が瀬リハビリセンター、昭和五十六年より昭和五十九年三月まで国立塩原温泉病院であり、その間の研修で自分なりのリハビリテーションができるようになったと考えています。その間、学会発表、学位、専門医試験を経験しました。このように見ると、慶應リハビリ科は我々の努力もあるが、整形外科の支援のもと、その出張病院で診療、研修体制ができてきたと思われまます。

学位が終了し、昭和五十九年より現在の藤田保健衛生大学に赴任することになりました。藤田保健衛生大のりハビリは、中央診療部としてのセンターで整形外科にて

長年指導が行なわれていましたが、今後はリハビリ医の指導の方向でという矢部裕教授の要請で私に白羽の矢が立ったと思われます（実際は、気が固まる前に履歴書を書くようにと言われて決ってしまった）。赴任時は整形外科に所属しリハビリを担当し、全科よりのリハビリ患者を診ていました（当時の千野先生と同じように）。

昭和六十年より診療科として独立しましたが、昭和六十年には矢部教授が、母校の整形外科教室に教授としてもとられることとなり、最大の理解者を失うことは非常に残念でした。矢部先生には将来の教室運営などを見せていただき有形無形の指導をされたものと思っています。その後は吉沢英造教授のもとでリハビリを行ってきましたが、昭和六十二年より千野先生の同期でもあり川崎医大より土肥信之先生を迎えリハビリテーション医学教室がスタートしました。医局員は十一名となり、第一教育病院（豊明市）、第四教育病院（三重県）の外來・入院診療、ポリクリや講義さらにリハビリ専門学校でのP・T・O.Tの教育などで多忙な状態です。また、大学院も入るようになり研究面も徐々に整えていきたいと思っています。

慌ただしく時はすぎますが、慶應での九年間を第一期とすると藤田保健衛生大に赴任して今年が九年目と

なり第二期が終ったと思われず。今後は第三期として今までの整形外科よりの支援に感謝するとともに、慶應の建学の精神に沿って頑張り、日本のリハビリの発展の爲にも多くのリハビリ医を養成していこうと思っています。



みみずのたわごと

内 西 兼一郎 (特)

平成五年三月から、私のわがままを矢部教授が聞き入れて下さり、ここ吹上の地の全く違う社会に参りました。ここ二十二年間、医長、講師、助教授としてスタッフの末席を汚してきましたが、現職中言えなかったこと、あるいは出来なかったことについて記してみました。

大学のスタッフの仕事、いや義務は、医師として立派な臨床を行なうのはもちろん、熱心に学生を教育し、絶えず医学の向上のために自ら研鑽努力し、後輩の若い医師の研究指導をすることにあります。しかし現在のところ、医師の評価は研究論文のみに頼りがちで、とくに臨床の様態は評価の対象になりにくいものです。したがって講師になり、更に助教授、教授をめざす「優秀」な先生はどうしても自分の研究活動が優先するようです。臨床の成果、学生および後輩指導の努力を、なんらかの方法で業績に反映させてほしいと思います。

教授の仕事は、学生の講義、教室員の研究指導ことに論文の校閲、患者の診療と手術などの治療を行なうことにありますが、慶大整形外科という巨大な教室の運営が

大変です。五十五の関連病院の人事を中心として、教室員全員の動向をつねに把握し、同窓生の要望に応え、教室の一層の発展のために対外的な交際が必要です。矢部教授は常にこれらのことを、すべて緻密にかつ後顧の憂いのないように遂行されるとともに、教授職、日整会の理事をされ、そのうえ慶應病院院長としてたくさんの方事を行なっておられます。他の医師の二倍、三倍の仕事量で、寝るとき以外は、院長室か教授室という生活です。幸いご健康な方ですが、お身体が心配です。

このように教授の仕事は超多忙です。すべての最終責任者は当然教授ですが、教授が全部の仕事を一人でやろうとしないで、なるべく多くを部下に分担させる必要があります。ある程度のミスは目をつぶって、部下を働かせることが、部下を育てることになります。また部下もそれに応えて十二分に努力しなくてはなりません。

スタッフは、教授を補佐し、常に教室に思いをよせることが大切です。私などは教授の庇護のもとに、割合甘えてのんびりしていたように思います。とくにスタッフは、少なくとも患者のことで教授を煩わさないよう、校園論文は完全な形で見せるように努力するとともに、絶えず熱心に研究活動をする義務があります。現在の慶大整形外科教室は、きわめて居心地がよくぬるま湯的で、

つみんな「いい湯だな」になっているようです。

わが国における人事は、どうしても年功序列の考え方が根強いですが、立派な「仕事」（単位論文だけでなく運営面、臨床、教育面も含めて）をした人は年齢に関係なく、抜擢すべきであります。

研究費が足りなくてとても困っているようです。スタッフは鋭意研究費の獲得につとめねばならず、研究者は積極的に自分のお金を出して頑張る気持ちをもってもらいたいものです。なるべく早く研究の成果をあげることが、プライオリティの点からも経済的面からも大切です。同窓生や関連病院に研究の補助をお願いし、実験場所と動物の提供、指定寄付の依頼などスタッフはいつも考えなければならぬと思います。

医師には時間のルーズな人が多くて困ります。特にスタッフは、最少限の出張（パート）とし、いつも時間を厳守し、能率よく働きたいものです。お互いに時間をきちんと守ることで、仕事を能率よく遂行することが出来ます。

レジデントの先生には、大学に戻っている期間が限られているので、寸暇を惜しんで勉強してほしいと思います。予定表をみて積極的に手術を見学し、スタッフや先輩の診察技術を学び、おたがいに大いに討論して、机上

の学問だけでなく実際的な目、耳学問をしたいものです。夜は大いに自分の研究活動をしてください。わずか一年間の教室の生活が一生の糧になります。お金のことはしばらく忘れましょう。

自分はあまりできなかったくせに、勝手なことをいふなどお叱りを受けそうですが、私自身このようにしたいとは常々思っておりました。私を育てて下さった、愛する慶大整形外科教室のますますのご発展を願って、愚見を述べさせて頂きました。

助教授就任に当って

花岡英弥 (37)

この度、はからずも助教授に昇進させて頂きました。泉田教授の後任として矢部教授が就任されました時、

私は学年が近いけれど還暦ぐらゐまでは大学で頑張っているのを続けたいと心ひそかに思っておりました。日が立つのは早いもので昨年暮に還暦を迎えてしまいました。

それに先立ち、昨春、将来のプランなどを教授にお話致しておりました所、内西助教授が突然、侍医に転進され、先を越されてしまいました。還暦を過ぎており、又、右のような事情もあり、今回の人事についても私には関係がないものと思っておりました所、矢部教授の御配慮により助教授に昇進させて頂き、大変感謝致しております。

この人事は、私自身にとっても大いに喜ばしいことですが、また、対外的にも色んな点でプラスであったかと思っております。例えば、今年の秋の日本整形外科学会基礎学術集会において教育研修講演を行うこととなっておりますが、教授に次いで教室を代表する助教授という肩書で講演できれば、同じ内容でも何となく重みが増して響くのではないのでしょうか。私自身も、「さすが慶應の

助教授の講演だけある」と言われるように、今迄の研究を集大成し、内容のある講演にしたいと思っております。助教授の仕事というものは、種々の気配りをしながら教授を補佐する必要があります。能力不足で十分な補佐ができないかも知れませんが、せい一杯努力致したいと思います。

助教授という立場で教室の発展にいくらかでも寄与することができましたら幸いと存じます。



研究副主任として考えること

藤村 祥一 (47)

平成三年四月、研究副主任に任命されたが、本来の仕事が解からぬまま、二年余りが経過しました。この間、矢部教授がうち出された研究重視の基本方針に沿って、基礎的研究室の整備、大学院の再開など教室の研究体制はほぼ確立されましたが、私は研究体制が果たして円滑に機能しているかという疑問を多少なりとも感じておりました。

毎年、十六〜七名の入室者のうち主論文研究をほとんどが希望し、同時に整形外科認定医の取得を義務付けられている教室員にとって、研究と臨床の両立が必ずしも容易ではなく、一部の研究を除いて、研究の進行が遅々とし、その弊害が起こりつつありました。毎年多くの研究希望者が続くため、研究施設や研究機器の限界、継続的研究が前任者の遅れから開始できないことなどであります。また教室人事にも影響をおよぼしております。主論文研究は教室員の義務ではないが、研究を希望し、研究テーマを授受すれば研究を遂行し、学位論文を提出する義務を負うことは自明の理であります。研究環境をつ

くるため一定期間を教室人事で配慮する必要がありますが、研究希望者全員を平等に扱うことは不可能であります。研究者各自の自覚が不可欠となります。教室人事を理由に研究を中断したり、放棄することは研究費の無駄使いに終るばかりでなく、貴重な研究テーマを無にすることにもなります。勿論、已むを得ない事情から、人一倍努力したにもかかわらず研究を断念した場合もありますが、さしたる理由もなく研究を中断している教室員がいないとは断言できません。

研究を円滑に行うためには、研究施設、研究機器、研究費などが十分であるに越したことはありません。教室内の研究施設に物理的制約がある以上、新規の研究機器の設置にも限界があります。利用できる研究施設があれば、今まで以上にお願いをしなければなりません。実験動物を扱う場合には特に飼育施設の確保が重要になってきます。研究指導者も今後はこの現状を十分認識した上で研究テーマを考慮する必要に迫られます。

研究費の調達も今後益々困難になることが予想されます。ここ一〜二年の情勢からみて、今までのように比較的安易な臨床治験による研究費の確保は期待薄といえます。研究基金や委託研究の獲得に積極的に努力を払うことは当然ですが、研究費の無駄をなくする方策を講じた

り、予算化に基づいた研究費の適正執行も考慮しなければなりません。しかし研究費不足の事態のために研究を停滞させることは回避すべきで、教室員に必要最小限の負担をお願いすることも一時的には已むを得ないことかもしれません。この処置が研究に自覚をもち、しかも研究の迅速化につながるならば決して高価な代償にはならないでしょう。教室員ならびに同窓各位には御協力、御援助をお願い申し上げる次第です。



専任講師就任にあたって

鈴木信正 (48)

この度、矢部教授より帰室が命ぜられ、十月一日より信濃町に赴任させていただくこととなりました。振り返ってみますと、昭和五十七年八月より、済生会中央病院に出張し、平成二年一月からは医長に就任いたしました。出張以来、早や十二年の歳月が過ぎたこととなります。その間は、一線病院での医療の充実を志し、年と共に馴染みの患者さんが増えると同時に、多方からの御紹介をいただき、私の専門とする脊椎外科の患者さんが増えて参りました。年間総手術件数は五〇〇〜六〇〇件ですが、脊椎手術は、当初五〇〜六〇件であったものが八年ほど前からは Major spine が一二〇〜一三〇件に落ち着いてきました。側彎症は大体三十五件くらいですが、国内では、非常に多い方に入ります。治療に非常に難渋した症例、既存の治療法では解決できず創意と工夫を要する症例、他院では治療不能といわれて来院した症例等の数々を、一応満足できる所まで治療し得たのは、極めて幸運であったと思います。同時に、常に挑戦意欲を掻き立ててくれる症例に恵まれたことも誠に有り難いこと

でした。

医師を取り巻く社会情勢、医療環境は益々厳しさを増しています。医療の進歩と共に、以前には問題とならなかったことが、大きな問題を含むようになり、医師の責任を問われる場合も少なくありません。例を挙げれば、院内感染であり、輸血合併症の問題です。これらは一線病院では極めて重大であり、その対応には多大な努力を払って参りましたが、大学病院においてこそ、他に範を垂れるシステムを確立するべきと考えております。自己血輸血は整形外科においてはもはや必須であるといえます。これまでの経験を生かして、他大学の先駆けとなるようなシステムを作れないものか、これから尚一層勉強させていただきたいと考えております。

浅学非才の身ですが、矢部教授以下、前任諸兄の御指導をいただき、慶應大学整形外科教室のため尚一層の努力を致す所存でございます。

教室幹事の一年半

井 口 傑 (49)

平成四年の十月一日に教室幹事(医局長)を堀内先生と交替してから早くも一年がたとうとしています。池田名誉教授の訃報に接した時も、走り出してから「アーもう医局長ではないんだ。堀内先生にまかせれば良いのだ」と立止まった有様で、なかなか医局長気分が抜けません。平成三年四月一日に前任者の藤村先生と交替してから堀内君にバトンタッチするまでの一年半は、歴代の医局長に比べて長いとは言えませんが、高校三年の娘、小学校六年の息子という受験戦争の戦士をかかえながら、雑用係ナンバーツーとして超々多忙の矢部教授の後から汗をふきふき追いかける毎日でした。御存知の様に医局長は庶務課長兼小使の様なものですから、何か事が起ると直ぐに忙しくなる商売です。どんなものか始めの1ヶ月をふりかえて手帳をめくり公私混同しながら回想してみます。公式の記録ではありませんので、誤りがありましたら御容赦下さい。

医局長の初日、平成三年四月一日は月曜日でした。前任者の藤村先生に会ったとたん、浦和の藤田先生の奥様

の訃報を聞き、逝去されたのは三月三十一日だが訃報が入ったのは午前〇時を廻っていたから君の役目だよとのこと、新医局長の初仕事は悲しいものでした。その日の人事は、平林先生の看護短大の学長就任、富士川先生の学務委員、藤村先生の研究副主任、小川先生の卒訓、堀内先生の教室副幹事でした。三日には明治記念館で平林先生の壮行会が行なわれました。七日の日曜日にはまもなく生まれたばかりの赤チャンをかかえて米国留学から帰る仲尾先生の結婚式がありました。当日は従兄の次男の結婚式もあり、朝から晩まで忙しかったのと、仲尾先生のパーホームannsが印象的でした。十日は日整会の予演会、十一日は70回生の謝恩会、十二日には久保（20回）先生の母上が逝去、十五日には村山の柴崎先生の父上が逝去されました。その日からフレッシュマン（70回生）の研修が開始され、冠婚葬祭、交通事故の始末に、肺炎、結核、心筋梗塞で入院した教室、同窓の先生方の補充員の手配、あい間をぬっての面会と目のまわる生活が始まりました。十七日には最終便で日整会の開かれる京都に向い、十八日には藤田ホテルで同窓会、二十日の午前中に発表して午後帰京、この日整会で矢部教授が副理事長になり、日整会の会長に向けての仕事も始まりました。折角の二十三日の開院記念日もパート日にあた

り、二十四日は富士川先生、坂巻先生の助教、講師就任の祝賀会が住友ホールで行なわれました。こうしてあつと言うまに一ヶ月が過ぎて、ゴールデンウィークで一息ついたわけです。こんな生活が十六ヶ月続き、あつと思つた時には堀内先生にバトンタッチしていました。おかげさまで、子供達もどうやら志望校に滑り込み、退任前にもかかわらず昨年の夏には十二年ぶりに留学していたスエーデンに家族旅行をさせてもらいました。怠けもので忘れっぽい私がどうにか任期を全うできたのは、前任者の藤村先生、副幹事で現幹事の堀内先生の御援助のおかげと感謝しております。又、教室員、同窓生の皆様の御協力にも感謝しています。医局長を雑用係ナンバーツと書きましたが、当時、日整会副理事長と慶應病院長を兼務されていた矢部教授の超多忙の生活を身近に拝見し、一見雑用と思えるまとまらない仕事も誠心誠意行っていけば、山をも動かす力になることを身を持って学ばせて頂きました。ありがとう御在居しました。

以下、恒例に従って任期中の主な出来事を年表にします。

平成3年

4月1日 富士川助教、坂巻講師就任

平林先生看護短大教授兼学長就任

学務委員・富士川先生、研究副主任・藤村先生、教室幹事・井口先生、卒訓・小川先生、副幹事・堀内先生

3日 平林教授壮行会

7日 仲尾先生結婚式

18日 同窓会（京都市整会）

矢部教授、日整会副理事長

24日 富士川助教授、坂巻講師就任祝賀会（住友ホ
ール）

5月1日 博士号説明会

6月12日 新井先生結婚式

15日 医局旅行（河口湖）

30日 田原君（医局秘書）結婚式

9月2日 スポーツクリニック開所式

23日 大田先生結婚式

10月1日 矢部教授院長就任

小川講師就任

9日 院長就任祝賀会（明治記念館）

23日 小川講師就任祝賀会（住友会館）

24日 同窓会幹事会

30日 整形外科の夕べ開催（ニュー大谷）

31日 慶應医学会例会（外人講演、アパリッシ、ワ
ーシンガー）

11月9日 同窓会評議員会、医長会、研修会

同窓会

11日 日仏整形よりクルピエ先生来訪

16日 中村光一先生結婚式

20日 独立祭

12月1日 塩尻先生開院式

4日 教室忘年会

平成4年

1月8日 フレマン勧誘会

11日 宮田先生結婚式

2月5日 フレマン説明会

16日 大山先生結婚式

22日 金子先生結婚式

集談会（540回）当番校

3月4日 フレマン面接

10日 シュライバー教授講演会

12日 同窓会幹事会

14日 研修会

18日 専修医面接

- 21日 高田先生結婚式
 29日 平石先生結婚式
 4月9日 謝恩会(71回生)
 11日 真木先生開院式
 13日 フレマン研修開始
 16日 同窓会(日整会福岡)
 5月5日 揚先生結婚式
 18日 国試合格祝賀会
 7月人事発表
 24日 上田先生結婚式
 6月10日 野球大会
 20日 医局旅行(伊豆)
 委託研究調査
 7月18日 第三土曜日休診開始(試行)
 9月12日 塩田先生結婚式
 30日 教室幹事退任

教室幹事就任にあたり

堀内行雄 (52)

平成四年十月一日付で慶應義塾大学医学部整形外科教室専任講師に就任すると同時に、井口傑講師の後を受けついで教室幹事の大役を仰せつかった。

就任当時、すぐに教室協議会の開催、同窓会幹事会の資料の作成、同窓会名簿の作成、同窓会総会の準備、同窓会委員会の準備、医長会の資料作成等今まで経験したことのないことを、次々かたずけて行かなければならず、またこれと並行して一月の人事異動、パート病院の割り振りや手の外科学会抄録の作成等々、胃に二つほど穴があいたと思われる充実した二カ月間を過ごした。

特に小生が教室幹事になった一年前から、矢部教授は慶應義塾大学病院院長をなさっておられるので、大学内の関心も当教室に向けられがちで寸分の手抜きもあってはならないと常に注意を怠らないようにしてきた。当初は、副教室幹事は当分おかないという教授のご意向があったためさらに大変さがかった。しかし、小生が副教室幹事を勤めたことや前々教室幹事の藤村講師、前教室幹事の井口講師の暖かいアドバイスでどうか今

まで大過なく努めることができた。

他の大学の整形外科学教室や他の科の教室の現状を正確には把握してはいないが、うちの教室はとても肥大化し過ぎていて感じがする。教室員は約三〇〇名(二九一名)で、約五十の関連病院(五十三病院)を持っている。七月の人事異動はなんと約一〇〇名(九十九名)にのぼるほどであった。しかもこれらには有能な人材を生かすために適材適所に行われなくてはならない。レジデントはともかくとして、教授の意向に合わせて、教室員を教室に呼んだり、電話で異動を説得したりする作業は、会社ならこれだけを専属とする部署が存在しても不思議もないようなものである。しかし、なんと病棟医長、外来医長、保健医長、研修担当主任(卒訓担当主任)は、医学部において正式に認められている職務で手当が出るにもかかわらず、教室幹事には手当が全く出ないのには、本当に驚いた。医局費から手当を出すことを考えて欲しいが、現役の教室幹事が自分で決める訳にも行かない。

教室幹事の仕事は、人事の他に、協議会の開催、教室内のさまざまなこと、教室員の冠婚葬祭に出席すること、対外的な問い合わせに対し迅速正確に答えることなどである。これに加えて同窓会の事務をすべて教室幹事がするのは、非常に大変なことである。今までの教室幹事は

まさにスーパーマンといわざるを得ない。

小生の今までの経験を踏まえて、教室幹事の仕事量や内容から、できるだけ早期に同窓会の事務などの雑事を、スタッフの中から新たに同窓会係を設けて委任するのが一番だと思う。

つい最近嬉しいことがあった。ついに、教授のお許しが出て七月一日より戸山芳昭病棟医長が副教室幹事になってくれたことである。有能な先輩が手助けしてくれることは何よりも大変心強い。これで小生も一安心である。

最近では、医師過剰時代を迎え、売り手市場から買い手市場になりつつある。その中で教室(医局)のあり方が、見直され問い正される時代でもある。幸い当教室は臨床面でもこの出張病院にも評判がよく、増員希望が絶えず、パートの先も困ることはない。非常に有難いことである。これは、現に頑張っている教室員の皆の努力もさることながら、多くの先輩方の努力が礎になっていることを忘れてはならない。また、教室の卒後教育の良さが評価されていることにも他ならない。これからもできる限り、良いところは守り、悪いところは改善しつつ、良い意味での人事異動(ローテーション)の続く活性のある慶應義塾大学医学部整形外科学教室を維持して行きたいと考えると同時に教室員としての誇りを持ち続けたい。

教室幹事に就任してからあっといふ間に一年が過ぎ去ろうとしているが、伝統ある当教室を発展維持していくことの難しさを痛感する。矢部教授が、全てに対して真剣で立ち向かわれる姿をみるにつけ、微力ながら努力を惜しまず頑張って行きたいと考えている。

専任講師就任にあたって

堀内行雄

(52)

平成四年十月一日付で慶應義塾大学医学部整形外科学教室専任講師に就任致しました。浅学非才ではありますが、先輩方の築いてこられた伝統ある慶應義塾大学医学部整形外科学教室の名誉と業績を傷つけぬよう微力を尽くして行きたいと考えています。

思えば二十年前、小生が慶應義塾大学医学部整形外科学教室の門を叩き、入室させていただいた当時、教室幹事は、現杏林大学医学部整形外科学教室教授の石井良章先生がなさっておられ、矢部裕教授は慶應義塾大学医学部整形外科学教室助教から名古屋保健衛生大学医学部整形外科学教室教授に就任された直後でした。当時の講師以上のスタッフは、池田亀夫教授、泉田重雄教授、伊勢亀富士朗講師、平林洸講師のたった四名であり、そのほかにも内西兼一郎先生をはじめ有能な人材がたくさんおられました。その当時は、新設大学医学部の設立が花盛りであったこともあり、慶應義塾大学医学部整形外科学教室専任講師は他大学の教授並と言われていました。現在もその通りでありたいと願いますが、それはともか



くとして、小生もとうとうそんな地位まで来たのかと思うと背筋を正さない訳には行かない感じがします。

いままでの講師でないスタッフとしての役割と専任講師としての役割の違いは、系統講義を行うことであり、そのほかの実務的には大差はありません。ただし、専任講師としての責任は、かなり重く感じられるのは事実です。

教室のスタッフは多忙を極めています。なかなか自分自身の論文を書く時間がありません。しかし、学業の評価は、いかに多くの論文を書いたかで評価されます。しかし小生ですら、教室の雑務の他に、週二回の外来（中でも手の外科の特殊外来は予約だけで一〇〇名を越すことが多い）、週三〜四件の全身麻酔手術、二〜五件の外来手術、カンファレンス、回診、学四のクルズス、系統講義など目の回る毎が続いています。また、これらの勤務医と教員の仕事の他に、次から次へといろいろな学会の発表演題、研究テーマなども考え、手の外科班員の発表原稿、投稿論文のチェックさらにフレッシュマンに与えた演題の発表、投稿の指導などが加わります。しかし、どんなに無理をしても、預かった原稿は、一週以内に返却するように努め、遅くとも二週を限度にするよう努めています。それはやる気のある後輩を伸ばすため

にも重要なことだと考えているからです。いろいろつまらないことを列挙しましたが、要するにこれらのことをすべて終えた後に自分の論文を書く時間が持てることになるのですが、最近では体力、気力とも疲れ果ててダウンしそうです。

小生ですらと、書いたのは、他のスタッフの先生方も同様であるからですが、特に、矢部教授の仕事量は大変なものです。矢部教授の予定表はいつでも過密スケジュールであり、精神的にも肉体的にもよく元気でこなされておられるといつも感心しています。朝から夕方までは、病院長としての職務をこなされ、会合のないときは十八時に教授室に戻られ整形外科学教室教授としての仕事をなされます。従って論文の校閲は、緊急の仕事をかたづけられたあとに寸暇を惜しんで行われます。そのため教授が帰宅の途につかれるのはなんと二十三時三〇分になります。

近ごろの若い教室員の中には、指導してもらったり、校閲してもらうのは当たり前で、当然の権利とでも思っている向きもあるようですが、上に立つ先生方の努力、特に教授のご苦労には深く感謝し、なお一層努力していただきたいと思えます。

小生も慶應義塾大学医学部整形外科学教室専任講師と

して、期待に違わないようにいままで以上に努力していかつつもりでおります。特に、先輩の先生方から暖かいご指導ご鞭撻をいただき、専任講師としての職務を立派に果たしていきたいと思っておりますので宜しくお願い申し上げます。

研修医担当主任(卒訓)就任にあたって

松本秀男 (57)

昭和五十三年、私が入局したときは卒訓は富士川恭輔現助教授でした。当時から毎週水曜日は朝七時三〇分からモーニングカンファレンスがあり、われわれフレッシュユマンは毎週交代で一つテーマをもらって、これを恐い先輩たちにむかって講義する「モーニングレクチャー」を行っていました。自分の番が来ると大変です。一週間寝られない日が続きます。何しろ右も左も判らないフレッシュユマンが講義する訳ですから、どの文献から読んでよいか。やっと思つけた文献を読むとわからないことが更に増えるばかりで、いつまで経っても終わりません。オーベンの先生に助けられたり、助けられなかったりして何とか火曜日の深夜に原稿ができありますが、まだまだホッとできません。明日が本番なのですから。

さて水曜日午前七時三〇分。カンファレンスルームの真ん中に富士川恭輔卒訓が手ぐすねひいて座っています。われわれは「自分はこのテーマは十分に勉強した、先輩達の誰よりもよく知っている。」という自信ありげな素振りでレクチャーを行います。やっと思つてもう一度



自信に満ちあふれた態度で場内を一周見渡し「何でも聞いてくれ。」といわんばかりに質問を受けます。しかしそこはフレッシュマン。実際にはちょっとした質問の一撃でアツという間にボロボロになってしまいます。約五分間、カンファレンスルームの演壇で気まずい時間が過ぎた後、富士川卒訓の一言、「ヴィーコン！」で、すべてが終わります。またつらい一週間が始まるわけです。と、いう訳で卒訓というのは鬼がやるものだと思っていました。事実、富士川卒訓の後、伊藤、里見、小川と受け継がれ、「卒訓は鬼がやるものだ」という考えはついに確信に変わりました。

さて、一九九三年の八月。私も十六年生になったある日、矢部教授に呼ばれて「卒訓をやれ」とのご命令を頂きました。「鬼でない私が卒訓を。」と不思議な思いでしたが、たいへん名誉なこと、喜んでお引き受けしました。それから「どうしたら鬼になれるか」ばかり考えました。鏡に向かって恐い顔もしてみました。エレベーターの中で怒鳴る練習もしました。

そんなある日、富士川助教授が私を呼んで次のように話されました。「卒訓というのは大変な仕事だ。若い先生達に教育を受ける機会をできるだけ作ってやらなくてはならない。そのためには時には人事のことで医局長と

喧嘩もしなくてはならない。もし、教育を受けたい人間が十分な教育を受けられないとしたら、それは卒訓の責任である。」と。

なんと卒訓は鬼になるだけではいけなかったのです。ただの鬼だと思っていた人たちは裏では神様の様な心を持っていたのです。一方で研修医を厳しく指導しながら、他方では彼らが勉強できる環境を必死で整えてやる。これは普通の人間にできる仕事ではありません。とても私には――。しかし、いったん引き受けてしまった以上、努力するしかありません。鬼になると同時に神様になる練習も始めましたが、結局二ついつべんにやるのは無理。とりあえず、まず鬼になるところから始めることにしました。

モーニングカンファレンスではカンファレンスルームの真ん中に手ぐすねひいて座り、出来の悪いレクチャーはどしどし「ヴィーコン」にしたいと思っています。研修医の先生方、よろしくお願いします。

骨・軟部腫瘍班の研究の現状と将来

花岡 英 弥 (37)

骨・軟部腫瘍班は小さなグループで忘年会などの集りでも、いつも十人前後であり、研究も二人の人が同時進行ということは殆どなく、一人が終った頃、次の人が研究を始めるといった具合にかなりスローペースである。

現在行なっている基礎的研究は破骨細胞に関するものが中心となっている。一九七八年、第一回 S I R O T において私が破骨細胞の起源について発表した所、*Clin. Orthop.* から総説を書くように依頼され、一九七九年、論文を発表した。その後、私の考えに基づいて矢部啓夫君が行なった実験結果は、当時、破骨細胞の血液細胞由来説の有力な根拠として高く評価されていた Kahn and Simmons の論文を否定するものであった。彼等の実験は、Ham の *Histology* の教科書に写真も転載されて二頁にわたって記載されていた。それを実験が不充分であって血液細胞由来説の根拠とはならないとした訳なので、*Clin. Orthop.* に投稿後も彼らに同情的な Referee は入れ変わり立ち変り厳しいコメントをつけて、何度も差し戻してきた。四〜五回書き直した後でやっとアクセプ

トとなり、一九八四年発表できた。発表後は高く評価され、お蔭で私自身も Ciba Foundation Symposium に日本から唯一人招待され、また、*Clin. Orthop.* から再度、総説を書くように依頼された。この総説を一九八九年に発表した。

その後、それに続く研究を電顕レベルで私一人続け、S I R O T などの国際学会で発表はしていたものの外国雑誌に発表できる内容には達していなかった。幸い伊崎君が私の続きをやってくれることとなり、二人で新たに P T H を羊水中に注入して破骨細胞の活動を高める方法を開発し、破骨細胞に対する P T H の影響を電顕細胞化学的に検索することができた。現在、その結果を英文論文で発表すべく努力中である。また、秋の日本整形外科学会基礎学術集会における教育研修講演では、今までの研究を集大成した講演をしたいと思います。今後は同じ手法を用いてビタミン D₃ やステロイド剤を大量投与し、それが破骨細胞に及ぼす影響について鈴木寿禎君が研究してくれることになり、目下、電顕の基本的な手技を修得中である。又、骨腫瘍についても、破骨細胞に似た多核巨細胞が出現する各種骨腫瘍を穴沢君が電顕細胞化学的に検索してくれることになった。

私の指導ではないが森岡秀夫君は軟骨組織に含まれる

抗腫瘍物質に関して研究しており、この秋の日整会基礎学術集会で発表予定である。また、南雲君は東京女子医大の斉藤講師の指導で骨巨細胞腫におけるインターロイキンの発現の研究を行うことになっている。この他に眞の意味の骨腫瘍班とは言えないが、大学院生の楊君が矢部教授から骨腫瘍に関する遺伝子関係の研究をするよう命ぜられ、国立がんセンター細胞増殖部長の山口建一先生の下で研究中である。

臨床研究としては、珍しい症例の報告はその都度、若い先生方にやってみてもらっていたが、その他に、症例数も増えてきたため、それぞれの腫瘍についての統計的な成績も発表できるようになり、最近では、矢部啓夫君や伊崎君が二年連続でパネリストに選ばれるようになった。「スロー・アンド・ステディ」をモットーに少しでも国際的に通用する研究をして行きたいと思っている。また、今迄は殆ど私の興味のあることを中心に研究してきたが、今後はもっと若い人のアイディアに期待したい。

慶應義塾大学整形外科教室 膝関節研究班の今昔

富士川 恭輔 (43)

慶應義塾大学整形外科教室膝関節研究班は、岩原寅猪先生の時代から一つの stream としてその源を発し、当時の業績集に記載されているように先見性のあるすぐれた多くの業績が残された。此の流れは、現東海大学教授今井望先生により膝関節外科として確立されたが、当時は教室員の数も限られておりチームを形成するまでには至らなかった。

今井先生が教室を離れた後は、一時慶應の膝関節外科は途絶えたかに見えたが、伊勢亀富士朗先生を中心に末安誠、田辺碩、森田孝文先生らが当時はまだ耳新しい生体力学（バイオメカニクス）の手法を導入しつつ膝関節研究班を形成し、チームによる研究体制が産声を上げた。

この伊勢亀先生を中心としたチームに宇田正長、水口外茂次、戸松泰介、岡田菊三、松賢次郎、磯田功司、竹田毅、久保井二郎、河西成顕、森田勝、竹田誠先生らが加わり次々と膝関節に関する臨床的、基礎的新しい知見

を生みだし学会に報告した。特に戸松先生による膝関節の負荷面とその移動に関する研究、竹田(毅)、磯田先生による慶大式人工膝関節の開発と臨床応用、竹田(誠)先生による大腿膝蓋関節における負荷面と負荷庄の研究は、他大学の膝関節を志す若き整形外科医のバイオメカニクスに対する目を開かせた。此の間、何人かの先生方は開業などで膝関節研究班を去ったが、新たに地方で独自に膝関節を学んでいた富士川恭輔そして新進の田中義則、大田英和、松林経世、三倉勇闊、井上慶三、道振義治、菅沼淳、高田知明、広本明敏、阿部均、松本秀男先生らに加わり大きな研究班に成長した。

慶大膝関節研究班のロゴマーク

K : Keio

K : Knee

R : Research

楕円の上半分は大腿骨(頸部)、下半分右は脛骨、左は腓骨を表現している。中央の小さい半円は大腿頸窩である。

(デザイン) 伊勢亀、富士川



伊勢亀先生は、当初から国際性の重要性を説き、国際学会への参加を奨励し、英国リーズ大学ライト教授の知己を得て、そのバイオエンジニヤリング・グループに竹田(毅)、戸松、富士川、松本先生らをも、ニューヨークの Hospital for Joint Diseases へ菅沼先生を留学させた。留学中戸松先生は軟骨の物理特性、竹田先生は大腿膝蓋関節のOAについて研究しその結果を英文論文にして発表している。富士川はバイオエンジニヤリング・グループのチーフであるDr. Seethorn と Leeds Keio 人工靱帯を開発し、この人工靱帯は一九八二年以来現在に至るまで本邦のみならず広く欧州で用いられ、ケイオーの名を欧米に広めた。

その後リーズ大学へは大谷俊郎先生が留学し、軟骨の物理特性に関する研究を行い、更に一九九四年一月からは川久保誠先生が留学予定である。

現在、膝関節研究班はその伝統を守りつつ富士川、竹田(毅)(スポーツクリニック担当)、松本先生らが中心となり、researcherも含めその active member は松林、菅沼、阿部、堀江康夫、大谷、川久保、小林龍生(防衛医大出張中)、野村栄貴、野本聡、大熊一成、桃原茂樹、児玉隆夫(生化学班出向中)、増本項(スポーツクリニック)

ク)、須田康文、宮坂敏幸、栗村誠、今本雅彦、徳永裕二、相羽整、小林一、中村光一、豊田敬(東京女子医大出張中)、月村泰規、笹崎義弘、井上元保先生、そして今年度から関口治、中山新太郎先生を加えて総勢三十名で臨床、研究に励み帰宅は毎夜午前〇時を過ぎることも珍しくない。毎週月曜日夜7時から行われるカンファレンスは、症例の検討、最新文献の抄読、主論文研究の進行状態の報告と問題点の検討、副論文の検討、新たなプロジェクトに対する検討、学会が近づくこと繰り返される予演会などほとんどendlessで、先輩、後輩の垣根は取り払われ、時には口角に泡が飛び、電車の無くなる人からそっと消えていくという状況である。

年間の学会発表は、シンポジウム、パネル発表の様に指定されるものを除き、約三十編、論文は教科書などを除きおよそ二十五篇である。

現在進行中のプロジェクト

A. 基礎的研究

一、靱帯、半月板を中心とした膝関節支持機構の解剖と機能解剖

二、バイオメカニックス手法による半月板、膝関節支持機構損傷による関節不安定性の病態の解明

三、膝関節構成体損傷による二次性変形性関節症の病態の解明

四、再建靱帯の成熟過程、物理特性及び生物学的特性

五、半月板の機能再建(半月板移植を中心に)

六、膝蓋骨脱臼、亜脱臼における膝関節形態及びその構成体の変化

七、大腿膝蓋関節のバイオメカニックス

八、膝関節の各種の病態が膝関節構成体に与える影響

九、人工靱帯の開発と改良

十、人工膝関節の設計と開発

などを中心に多岐にわたり、人工膝関節に関連したプロジェクトは京セラと産学共同で実験的研究を行っており、特に犬を利用する動物実験は現在東京では殆ど不可能なので、麻布大学獣医学部第二外科学教室と共同研究の形で行っている。

更に今後予定されているプロジェクトには、靱帯を中心とした膝関節周辺軟部組織の神経終末、受容体、血行動態、軟骨の物理特性と変性などがある。また動物実験にMRIや関節鏡を利用できるのも間近い。

B. 臨床的研究

臨床的研究は、外傷(骨、関節軟骨、靱帯)、スポーツ

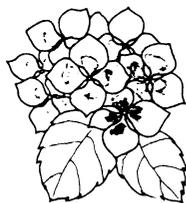
ツ外傷、変形性関節症を中心とした変性疾患、半月板に関する諸問題、滑膜病変、小児膝内障、発育上の形態異常、大腿膝蓋障害、RAそのほか膝関節に関することをすべて行っている。特に最近は、三次元CT(3D-CT)を用いて大腿膝蓋関節の不適合性を立体的に表現したり、大腿膝蓋関節の負荷面の移動の解析や脛骨顆部の複雑な骨折を立体的に解析したり、KT2000 Knee Arthrometerを用いて靭帯損傷(特に複合損傷)による不安定性を正確に把握したり、さらには再建した靭帯の力学的特性を計測し、再建靭帯の新しい評価法を行っている。

また新しい手術法や手術器具の開発も行っている。

そしてこれらの研究で得られた新知見はできるだけ国際学会で発表しその真価を問うように試みている。本年のコペンハーゲンで開催された国際膝関節学会のポスターセッションでは桃原、須田先生がそれぞれ学会賞、学会奨励賞を受賞した。

以上のように膝関節研究班では三十名に近い新進気鋭(一部高齢者を含む)の優秀な先生方が意欲に燃えているが、研究施設や研究費の不足のために歯ぎしりをしているものや、中には研究活動が停滞しているものすらいる。

他大学や外国の研究施設でも同様なプロジェクトで研究を進めているところが少なくなく、折角の先行した素晴らしいアイデアが研究費の不足のために研究がはかどらず先を越されるときなどは、指導者としての力不足を痛切に感じ申し訳なく思う次第である。



脊椎脊髓班近況報告

藤村 祥一 (47)

教室において領域別の臨床研究班に分かれた時期は昭和四十年代半ばだったと記憶しております。脊椎脊髓班では発足後間もなく、大谷、平林、土方先生などが中心になり、オール慶應の脊椎症例検討会が毎月一回、定期的に行われ、この会が教室内外の脊椎脊髓班の力を結集させることになり、その後の成果は御承知の通りであります。特に臨床面においては、慶應独自の治療法が数多く開発され国際的にも評価をうけております。同時に、脊椎脊髓班で学んだ者は現在、臨床の第一線で活躍しております。しかし、ここ二三年に第二世代への交替は、臨床および研究の両面で、その実績は第一世代に比べて二歩も三歩も力不足が否めません。矢部教授をはじめ、今井、福田、吉澤、石井、新名教授の御助力により、慶應のみならず多くの大学で研究の場が与えられましたので、それぞれの場で成果が期待されます。

教室では今後、臨床面でこれ迄の治療法について長期成績を分析し、その有用性と問題点を見極め、改良すべき点は改良し、その普及に努めなければなりません。そ

の一環として、昨年より教室において脊椎術後外来を開設し、長期経過を観察することに致しました。一症例ともおろそかにせず出来る限り長期成績をまとめたいと考えております。数年後には成果が得られることを期待しております。

現在、臨床例の中心は変性疾患、脊柱靱帯骨化症、脊髄腫瘍などであり、勿論、変性疾患の対象は頸髄症と腰痛症であり、また他院からの再手術例も増加しております。この現状から疾患ごとの病態に即した治療体系を確立し、また治療技術を磨くことが今後、益々厳しくなるであろう医療において不可欠です。脊椎外科においては永遠の命題である固定、非固定の議論があり、高齢者に対する手術適応が拡大している今日、この問題を避けて通ることはできません。鈴木先生の研究室により脊柱変形を含めた *instrumentation surgery* が教室の一つの柱になり、さらにこの問題に結論を導いて欲しいものになります。一方、基礎的研究面に眼を転じますと、その現状はまだまだ評価に耐えません。基礎的研究にも十分に力を注ぎ、少しずつでも成果を出したいものです。幸い、教室では、鈴木、戸山先生のように脊椎脊髓に対する情熱を人一倍持ち合わせた指導者が揃い、多勢の若い俊才も控えております。彼らが育ち、そのエネルギーを結集すれ

ば脊椎脊髓班の発展に貢献してくれるものと確信しております。次にこのような近況報告を書く機会には、臨床および研究面において反省ばかりでなく、その成果を少しでも語りたいと考える次第です。

足の外科班

井 口 傑 (49)

慶應の足の外科の専門家には、バレীগダンスの足の治療で有名な小川正三先生や日本足の外科学会会長をつとめた加藤哲也先生をはじめ多くの諸先輩がいる。しかし、班として臨床、研究にあたる様になったのは、私が一九八七年七月に東京専売病院から帰室して矢部教授から足の外科をやるように命じられてからの事である。それまで私は曲りなりにも手の外科班の一員として臨床、研究を行ってきたつもりであったが、卒後十七年で帰室してみると、手の外科には当の矢部教授、当時の内西講師、伊藤講師、現教室幹事の堀内講師と、きら星の如き専門家がひしめいていて、とても入り込む余地はなかった。私は手の外科といっても、臨床は骨折などの新鮮外傷、研究はバイオメカとあまり実績がないので、当時は専門にやる人が少なかった足の外科を勧めて下さったと感謝している。卒業以来、先輩によく集めたねと言われたのがうれしくて続けてきた教室の距骨々折の集積も、小川清久講師のおかげで続けられたのが幸いしている。

そんな訳で、全くの素人が始めた足の外科班であった



が、旗竿を待っていたかの様に宇佐見則夫(58)、星野達(61)、平石英一(62)、橋本健史(63)の諸先生が参集してくれた。これらの先生は、自らの臨床経験や、小川正三先生、加藤哲也先生など大先輩の薫陶により既に足の外科の専門家として臨床に研究に活躍していた人達である。しかし、それまでは、大学に研究班がなかったため博士号の研究をはじめ基礎的な研究の機会には恵まれていなかった。そこで、宇佐見先生はDEXAによる下腿骨骨折の治癒過程の検討、星野先生は前足部横アーチと外反母趾の関係、平石先生は足部縦アーチの歩行における役割、そして橋本先生には、前距腓靭帯の歩行時不安定性に関する関与というテーマで、基礎的研究を開始してもらった。翌年から博士号研究のテーマを出すことになり、「ポリ乳酸プレートによる骨折の固定とその骨癒合について」というテーマを募集した所、宮永将毅(65)先生が応募してくれた。全員がほとんど同時にスタートしたので基礎的な研究の募集は中止していたが、全員、学会発表までではこぎつけたので、宮永先生の後を宮上雅好(特68)先生、今年から橋本先生の一部を引きつぐ形で、距骨の荷重歩行における運動力学的役割について、若松次郎(特69)に担当してもらった。

学会活動の方は宇佐見先生を中心に、足の外科学会は

もちろんとして、日整会、日整会基礎、東日本、関東震災、臨床スポーツ、中部震災、骨折、靴医学と機会あるごとに担当を決めて発表してもらっている。五年前までは存在しなかった慶應足の外科班なので、まずはその存在を学会活動を通じて知ってもらう事が一番と考え、全員が歯をくいしばってガンバッテいる所である。弱小班が少数数でなるべく数多くの発表と努力している所なので、内容等粗製乱造で慶應の名を汚すとの批判も自覚しているが、もう一步なので力不足の素人チーフに免じて、積極的な御批判と暖かい御支援をお願いしたい。

五年以内に国際舞台で発表したいと機会をうかがってきたが、幸いな事に今年六月にスペインで開かれた国際足の外科学会に六名応募して全員アクセプトされたので、今回が海外旅行がはじめてという人も含め、ドンキホーテの旅を行い、井口、宇佐見、星野、平石、橋本、宮永の全員が無事発表を終えた。これに力を得た宇佐見先生は、七月にデンマークで開かれた国際関節鏡学会で距骨下関節鏡について発表し、成書の一部を担当して欲しいという依頼を受ける程、好評であった。又、八月にはソウルで開催されたS[OC]で慶大整形としては唯一人発表した。

発表しても論文にしなければ何んの意味も無いのがこ

の世界のきまりだが、学会発表を投稿するのは当然として、特集号の募集や依頼原稿にも、だぼはぜの如く食いついている。これも又、粗製乱造との誹りを受けかねないが、指導力の足りないチーフの下では、習うより慣れろと言うことで、御勘弁頂きたい。一日も早く欧文論文が足の外科班から出ることを夢見ている。

若い弱小班なので、皆、年令も若く経験も少い者達の集りで、医長経験者も私以外いなかったが、うれしい事に十一月一日から宇佐見先生の至誠会第二病院の医長就任が決った。これまでも足の外科の実際のリーダーとして中心的な役割を果たしてきた宇佐見先生が、トップとしての経験を経て、増々足の外科班をひっぱっていくれる事を願っている。

最後に、同窓、教室の諸先生方に足の外科班の存在を知って頂き、尚一層の御指導、御支援を仰ぎたい。

股関節班の現況

坂 卷 豊 教 (50)

股関節班として現在大学に居るのは私、サブスタッフの石橋君、レジデントの王君、仁平君の四人です。私が入局した頃は乳幼児の股関節脱臼が多かったのですが近年では激減し、小児病棟に入院する股関節患者は年に三人前後になりました。一方成人の股関節症はたいへん多く、患者さんは入院まで三〜四ヶ月待っている現状です。手術としてはキアリ、RAOなどの骨盤骨切り術、大腿骨頭壊死症に対する大腿骨頭回転骨切り術、末期股関節症に対しては人工股関節置換術などで占められています。慶應に来る患者さんは前医で手術の話を説明されていることが多く、また最近では医学書その他で知識を得ているため手術を必要とするか否かについては納得しています。しかし手術時期、手術を行った場合の見通し、将来悪化した場合の話などこちらが試問をうけているような気分になることも多いことも特徴です。人工股関節は四年前より矢部教授のご指導のもと京セラと共同開発したKKS人工股関節システムを用いておりきわめて優秀な成績をあげております。三年以上の追跡調査可

能例がかなり多くなってきましたのでそろそろ研究会、学会に発表をはじめることになっています。また本シテムの開発・改良に関係した諸テーマを主論文研究の題材として一石二鳥を企図しております。セメントレス人工股関節の改良を目標とした動物実験を五人でやっております。内容はリーミングを行った臼蓋面の観察によりバ イポーラ人工骨頭を変形性股関節症に用いることの妥当性を検討すること、セメントレスステムに接する面の組織学的検討、良好な生物学的結合が期待できるような表面加工処理の開発、などです。同じくセメントレス人工股関節の改良を目的として生力学的実験を三人でやっております。この他多変量解析を用いた股関節症進行に關与する因子の検討、三D—CTに關する研究（泉田良一 Dr. 指導）などをすすめています。私の強い希望はこれらの研究を終えた人がさらに発展させ、股関節グループの中に三〜四本の大きな柱を作ってくれることにあります。

股関節グループは泉田重雄前教授、石井良章現杏林大教授をはじめとしてたくさんの方の良き先輩の先生方が業績を、また体制を作って来られました。その中で先天股脱における一治療体系、カップ関節形成術、トリプルオステオトミーなど特徴的な成果は是非ともこれから続く人

に伝えていかなければならないと思います。幸い私達のグループは人間的にすぐれたあたたかみのある人が多く良い雰囲気ですがグイグイ引っぱっていく人が出てほしいと思うこともあります。股関節という部門は日本また世界的にみても整形外科の中心的な所です。慶應らしい長期の経過を追った臨床研究が沢山でき、また後世に残るような治療法を考え出すことができればと常々考えながら毎日を送っています。

最近の肩関節研究の動向

小川 清久 (50)

肩関節は、従来完全に「忘れられた関節 (Forgotten joint)」でした。しかし整形外科領域の他部位における臨床的、基礎的研究の行きつまりにも助けられ、ようやく肩関節にも興味向けられるようになりました。この傾向は、ひとり我国のみではなく、世界先進国の一般的傾向と言って良いでしょう。私共が医師となった二十年前には、主だった欧米の整形外科関係の雑誌に、肩関節に関する論文は毎年数編を数える程度でありました。Index Medicusで十年前位の論文を調べるとに小一時間程度で済んだものです。現在では、J.B.J.S. Clinical Orthopedicsなどを用いても、毎号肩関節関係の論文が載っており、全部に眼を通すことさえ難しくなっています。

この傾向に伴い、近年肩関節研究の組織化が急速にすすんでいます。我国では、世界に先がけ、肩関節学会が組織され、本年度創立二十周年を迎えます。この学会内における慶應勢の活躍は目覚しく、創立メンバーの一人として現東海大学福田宏明教授が名を連ね、現幹事二十

五名中に三名（福田教授、三笠元彦先生、私）が名を連ねています。さらに福田教授、三笠先生が学会長を務められ、慶應は自他共に認める学会の中核をなす研究機関となっています。世界全体に目を転ずれば、先進国を中心に国別の肩関節学会（国によっては肩・肘関節合同学会）が相継いで組織された結果、これらを基盤とするI.C.S.S. (International Conference on Surgery of the Shoulder) が三年毎に開かれるようになりました。昨年は第五回のI.C.S.S. がパリで開催され、我々の教室関係からも口演三題、ポスター二題が採用されました。この第五回の会でI.C.S.S. の組織改変が行なわれ、評議員であった福田教授が学会三役の一つ、会計に就任致しました。福田教授の個人的力量が認められたことは勿論ですが、出身母体となった日本肩関節学会の永い歴史と水準の高さが評価されたものであることは疑いありません。

このように我国は肩関節研究の先端の一翼を担って来ましたが、最近世界各国に若手研究者が多教育ち、精力的に研究を行なうようになった結果、我国の優位性は最早失われたと言ってよい状況です。否、これまでのような軟弱な研究体制では、早晚二、三流になってしまいます。臨床研究においては、欧米のように効率よくセンター病院に患者を集めることさえ我国の医療体制下で

は不可能で、個人がコツコツ症例を集積するのみでは、対抗のしようもありません。あたかも大口径の大砲に小銃で戦いを挑むようなものです。又基礎的研究においても、医療費の安さが研究費用を捻出することを妨げ、アイデアのみで対抗せざるを得ません。このアイデアさえも、どうせ似たりよったり、ドングリの背比べに似た頭脳から絞り出すのですから、欧米の研究者も早晚同じアイデアに到達します。我国の研究者が機器や消耗品の費用をどこから捻出するか苦慮している間に、いともあっさりと実験を実施されてしまいます。この事情は、ひとり肩関節に限ったことではないのですが、最近まで研究の先端を走っていると自負していた我々にとっては、残念でなりません。

さて、ゴマメの歯軋りにも似たたくさんの御託を並べましたが、現在の慶應における研究体制を少し紹介致します。人員としては慶應に二名(私、吉田篤君)、関連病院に二名(高橋正明君、松本隆君)が勤務しております。基礎的研究課題は、腱板の石灰化、腱板の酵素活性、腱板構造のバイオメカ的合理性、解剖学的破格などです。臨床的研究課題は、陳旧性三角筋拘縮症の骨変化、多方向不安定症に対する新術式の開発、肩峰の加令的・病的形態変化、肩甲骨々折の受傷機転の解析、空気造影CT

法の開発と有用性の検討、上腕骨近位端骨折の治療法の確立などです。早く言えば、肩関節周辺の外傷、障害全てにわたっています。幸い年毎に同門の先生方からの紹介患者も増え、適応を厳しく限定しても、大きな手術が年間百二十例を数えるようになりました。現在までに手術症例一、一〇〇例、外来症例は六、〇〇〇例集積出来ましたので、少しく足りない馬力と知能を総動員し、先輩方が築かれた伝統に恥じぬ活動をしたいと念じています。

手の外科班の現状

堀内行雄 (52)

慶應義塾大学整形外科学教室手の外科班の最近の活動報告をさせていただきます。約二十年前から週一回木曜日の19時から22時まで症例検討会と詳読会を中心とした手の外科班カンファレンスを行っています。また、年一回九月上旬の土曜日に今年で九回目になりました慶大手の外科研修会を開かせていただいています。検討したい症例やお時間がございましたら是非ご参加下さい。

次に現在行っている臨床と研究について簡単に述べさせていただきます。臨床、研究共に、矢部教授のご努力並びにご指導、内西兼一郎先生および伊藤恵康先生の大いなる遺産とアドバイスをいただき、また多くの先生方の協力を得てトップレベルを保って頑張っています。

臨床面では、通常の関連病院において一年間で経験する手の外科の症例数を二〜三カ月で経験できるほど症例に恵まれております。現在、市川、山中両君(61)が慶應で活躍してくれています。同窓の先生方よりいつも貴重な症例をご紹介いただき非常に感謝致しております。ここで、治療法のうち以前と少し変わった点についてご紹介

介します。

末梢神経の外科としては、腕神経叢損傷に対し長時間(約十五時間近く)かかることが多いのですが、術中SEP、肋間神経移行(多いときには約五〜六本)、副神経移行などを積極的に行っております。また、陳旧例の神経縫合にはtopogramを利用したselective funicular suture(矢部法)を行っています。

腱の外科としては、縫合後固定期間が、屈筋腱で三週、伸筋腱で四週としていましたが、最近では、早期運動療法が主体になってきています。屈筋腱では、手関節、指を屈曲位にして背側にシーネを当てゴムの力で屈曲位とし、これを自分の力で伸展することにより腱を滑走させて癒着を最小限にとどめようとする方法(Knight法)を行います。伸筋腱では、縫合した指を、隣接指の背側にのせ粘着テープで固定し早期から運動する方法(石黒法)を行っています。

骨折の治療も、不安定型では、ミニシユラウベ、ミニプレート、創外固定や経皮鋼線固定などの観血的治療を行い、安定型の骨折であれば、必要最小限の固定にとどめていずとも早期に自動運動させ良好な結果を得ています。また、肘の拘縮などに対しても積極的に観血的授動術を行っています。また、後療法に可能な限りCPMも

活用しています。

手の奇形や外傷による長管骨の短縮に対しては仮骨延長術 (callotasis) を行っています。また、指先部の損傷に対しては通常の断端形成は行わず、ゲルとアルミホイルを用いる方法で治療しています。通常、五週ほどできれいな断端になります。

次に最近の研究の流れを簡単にご紹介致します。腱の研究は、池上博泰君(64)が伸筋腱縫合後の早期運動療法の実験的研究を終了し、また、吉川泰弘君(65)が、腱の乾燥と癒着についての実験的研究をほぼ終了し、論文をまとめつつあります。有野浩司君(66)は、骨折後の早期運動による伸筋腱の滑走に関する実験を行い良好な成果をあげています。末梢神経の研究としては、長らく続いた慶大式圧迫装置を用いた圧迫神経障害の研究は一段落し、ラットを用いた神経再生の実験は、仲尾保志君(63)のあとを新井健君(64)、渡辺理君(65)が行い良好な成果をあげています。また、entrapment neuropathy が自然発生するモルモットを用いた研究を野々宮広章君(62)が行い、腕神経叢損傷に関する実験的研究を西浦康正君(65)が行っています。損傷筋に関する実験的研究は、浦部、市川君の後を、寺田信樹君(65)が行い、研究成果をまとめられています。また、森岡、持田君が行った神経筋終

板に関する研究も終了しました。

奇形の発生に関する実験的研究は、原、飯島、外川君に引き続き、松村崇史君(63)が実験を終え論文をまとめています。肘に関する研究は、飛驒進君(59)のあとを関敦仁君(65)が続けています。マイクローの研究は、鈴木克侍君(59)が行い、成果をまとめています。また、骨関節に関する研究は、森、山内、亀山君は終了し、西村正智君(63)、小竹森一浩君(64)、岩部昌平君(67)が、現在行っています。

そのほかに、佐藤和樹君(68)、田辺巖君(68)、菊地淑人君(69)、高田直樹君(69)が、新たな実験に着手しており、成果を大いに期待しています。

大学院の中村俊康君(67)と井幡巖君(68)の両名も矢部教授のもと手の外科のテーマの研究を行っています。

これらが、現在の研究の流れですが、実験に犬の使用が出来なくなったり、困難なことも幾つかありますが、研究機器は最先端に近いものが使用出来ることと何より優秀な後輩が多いのですぐれた研究を行って行きたいと思っています。宜しくご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

スポーツクリニックの現況と展望

竹田 毅 (47)

慶應義塾大学病院の新しい中央診療施設として、「スポーツクリニック」が開設される運びになったことにつきましては、前号の本誌で紹介させていただきました。今回はその現況を報告するとともに将来展望についても触れてみたいと思います。

スポーツクリニックは、「スポーツ選手のみならず、すべての人々を対象に、スポーツ外傷や障害の診療はもとより、運動能力の向上、健康の増進、ひいては疾病や老化の予防をも目指す」というスポーツ医学の基本的理念そのものを目標に掲げて、平成三年九月一日にまず外来部門が中央棟地下一階に開設されました。当スポーツクリニック（以下スポクリ）の最大の特徴は整形外科のみならず、各科から多くの医師が診療に参加している点にあります。ちなみに外来部門の診療は、内科系、外科系に分けて行っており、関与している医師は、内科、小児科、脳神経外科、整形外科、リハビリテーション科などの関連診療科に所属する二十余名であり、大学病院の特徴を生かした構成になっています。診療内容は、内科

系は肥満、糖尿病、心疾患など有疾病者に対する運動療法と栄養指導、スポーツ選手に対するメディカルチェックなどが主体で、外科系は整形外科によるスポーツ外傷や障害の診療が大半となっております。この他ヤクルト、巨人のプロをはじめ、社会人、学生のスポーツチームの健康管理も引き受けています。ただこれまでは外来部門のみの開設であったため、設備的には不十分で、その業務内容も限られたものとなっております。しかし本年十月、待望のフィットネス・コンディショニング部門が外来部門に隣接する六号棟地下一階に増設され機器も整備されました。これによりフィットネスにまつわる業務の拡充が図れることになりました。

ご承知の通り「フィットネス」という語には適当な日本語訳がないため、そのまま使われておりますが、その意味する所は「個々の人がそれぞれの環境に適合する体力や身体コンディションを培う」ということになりましょうか？。フィットネス・コンディショニング部門では、個々の人の健康状態や体力、運動能力などの検査と評価を行い、それぞれのレベルと目的に応じた運動を指導致します。いいかえれば成人病などの有疾病者にはその治療のための運動を、また健康の維持増進を目指す人には安全な運動の種類や強度を、さらにスポーツ選手に

は競技能力の向上や怪我からの回復のためのトレーニングを指導するわけです。具体的には別表のように新規参加の医師を加えて多くの専門分野の診療枠が設定されました。

このようにスポクリは開設後二年を経て、診察を主とする外来部門と、検査と運動指導を主とするフィットネス・コンディショニング部門の二部門からなる診療体制が整ったこととなります。整形外科領域について見れば、外来部門における一般診療、専門外来の拡充に加えて、コンディショニング部門における「腰痛」「変形性膝関節症」「骨粗鬆症」の運動療法、「スポーツ選手のコンディショニング」の診療枠が新設されました。

このように書きまますとスポクリはいかにも順風満帆で出帆し、その前途も洋々のように思われるかも知れませんが、決してそうではありません。これまでも様々な紆余曲折があり、開設や増設が絶望的になったことも一度ならずありました。それを乗り越えたのはひとえに矢部教授のスポクリ開設にかけたあきらめを知らない情熱によるものと言えます。開設地一つをとってみても、余分なスペースなどは一坪たりともない医学部の中に手狭とはいえ外来部門とフィットネス・コンディショニング部門、それに別館二階の仮トレーニングルームを加えて台

計百坪余の用地を、各科各部署からのさしたる中傷や妨害もなく確保し得たことは奇跡としか言いようがありません。また開設以来無事に診療が続けられ、スポクリがなんとか認知されるようになったのは、教室の諸先生方の絶大なるご協力と日吉のスポーツ医学研究センターはじめ関連各科のご後援のおかげであり、これらなくしてはおそらく沈没していたと思われれます。

前途を展望して見ましても越えなければならぬハードルが多々あります。その第一はスタッフの問題です。現在のところ医師はすべて非常勤で、スポクリには医師の有給枠がありません。また専属のPTもトレーナーもおりません。わずかに定員を認められているのは看護婦二名と検査技師一名のみです。当然のことながら医師の有給枠（当面外科系内科系各二名程度）の獲得が強く望まれる所ですが、病院の現在の収支状況から見ても、そのためにはかなりの実績をあげる必要があります。すなわちスポクリの今後の発展の鍵は実績にかかっているということとなります。第二に関連各科間の診療協力の問題があります。スポクリはまさに寄り合い所帯ですので、各科の利害がぶつかり合うと内部崩壊してしまう恐れすらあります。融和と協調の態勢を整え、参加者全てが楽しく仕事が出来る環境を作らねばならないと考えていま

す。この他にもいくつかの難問はありますが、いずれも解決不可能な問題ではないので、なんとかこれら乗り越えて、更なる飛躍を目指したいと思います。

かつて整形外科教室を母体として形成外科とリハビリテーション科が生まれています。これらの科は今や全く独自の確固たる地位を築き上げております。スポクリもこの道を目指そうとしているわけですが、これら両科とは若干事情が異なる点があります。スポクリの場合、内科系における疾病に対する運動療法は治療の一環として行われるもので親科の診療と切り離すことは出来ません。また整形外科においては専門分野が細分化されている上に外傷や障害の治療に手術があることから、やはり診療面で完全に独立することはありえません。したがってスポクリは診療面で関連各科と深い絆を保ったまま組織的には独立した形態をとることになると想定されます。

いずれにしても近い将来、内科系外科系という枠を越えた真のスポーツドクターがスポクリから生まれ育ってくれることを期待しております。

フィットネス部門診療枠担当医

- | | | |
|----------|-------------|---------------------------|
| ・内科系 | 堤 規之（呼吸循環） | : 心疾患の運動療法 |
| | 仲本信也（腎内代） | : 肥満、糖尿病の運動療法 |
| | 小山田吉孝（呼吸循環） | : 呼吸器疾患の運動療法 |
| | 石田浩之（老年科） | : 中高年者の健康増進
: 成人病の運動療法 |
| | 松尾宣武（小児科） | : 小児代謝疾患の運動療法 |
| | 森川良行（小児科） | : 小児一般の運動指導 |
| | 徳村光昭（小児科） | : 小児一般の運動指導 |
| | 千野直一（リハビリ科） | |
| | 出江紳一（リハビリ科） | |
| | ・外科系 | 増本項二（整形） |
| 竹田 毅（整形） | | : 変形性膝関節症の運動療法 |
| 市村正一（整形） | | : 骨粗鬆症の運動療法 |
| 朝妻孝臣（整形） | | : 腰痛の運動療法 |
| 若野紘一 | | : 同上 |

週間外来担当医

○ 内科系

	外 来 部 門		フ ィ ッ ト ネ ス	
	A M	P M	A M	P M
月	勝川、辻（隔週）	栄養指導	石田（成人病） 森川、徳村 （小児循環器）	
火	山崎、大西 （隔週）		山崎、大西 （循環器）	千野、出江（リハ） 松尾（小児代謝）
水	堤		半田、堤 （循環器）	
木	金沢、小山田		小山田（呼吸器）	
金	石田		石田（中高年） 仲本（代謝）	出江（リハ）

○ 外科系

	外 来 部 門		コ ン デ ィ シ ョ ニ ン グ	
	A M	P M	A M	P M
月	増 本（一般） 富士川（膝）	宇佐見（足）		増 本 （運動選手）
火	竹 田（一般） 小 川（肩）	大 平（脳外）		竹 田（膝OA）
水	今 本（一般） 若野、朝妻（腰）	内 西（手）	若野、朝妻 （腰痛）	増 本 （運動選手）
木	竹 田（一般）			
金	増 本（一般） 市 川（手）		増 本	市 村（骨粗鬆）
土	今 本（一般）			

*この他一般診療の中に「手・肘」の特殊外来を設けたい。

岩原賞を受賞して

『先天性脊柱変形の発生に関する 実験的研究——特に椎間板奇形の 発生とその意義について——』

白石 建

(56)

この度私の論文「先天性脊柱変形の発生に関する実験的研究——特に椎間板奇形の発生とその意義について——」が岩原賞を受賞しましたことを本当に光栄に思います。現在私は英国に脊椎外科の勉強のために留学中ですが、留学先のロンドンから土方貞久先生に電話をおかけした際に受賞のことを知りました。研究テーマを与えて下さり、材料の尾曲がりマウスを繁殖させる段から私の拙文を何度も添削して、日整会誌に掲載される最後の最後まで指導し続けて下さった方から直接知らせを受けたものですから、お礼を言うよりも自分がこの光栄に本当に値するののかと思う気持ちの方が先でした。さらに思い返せば、動物の飼育や維持、標本の作成など、研究の各段階で先輩方をはじめ様々な人達の協力やアドバイスを得られたことも幸運でした。最も苦勞したことはやはり標本の作成でした。胎生の初期の標本ほど価値がある

のですが、体長わずか数ミリのしかもその胎仔の尾椎（尾芽）から正中矢状断標本を得るには偶然に頼る部分が大きく、途中何度となく悲観的な気持ちと闘いました。また標本の異常所見の意味を知るためには当然のことながら正常マウスの尾椎の発生について知らねばなりません。それが、それに関する文献が数少ないうえに手に入るものは内容が難く、読むではあきらめることを何度も繰り返しながら執筆開始まで本当に長い時間を要しました。今となってはみればすべて貴重な経験であったと思います。最後に、緻密なご校閲と論文作成の基本的なアドバイスを下さるために、大変貴重な時間をさいてくださいました。矢部裕教授に心から感謝いたします。



写真は今年の四月にパリの国際学会に行った時のものです。背景はパリ郊外のミレーのアトリエです。

前田賞を受賞して

『末梢神経障害に関する実験的 研究・妊娠における末梢神経易 損性について』

高山 真一郎

(57)

すこし前の話になってしまいました。小生の研究論文「末梢神経障害に関する実験的研究・妊娠における末梢神経易損性について」に対し平成三年度の前田賞を授かりまして光栄至極に存じ上げます。この場をお借りして、研究の内容と経緯などについての紹介をさせていただきます。

小生が手の外科研究グループの一員に加えていただき、西先生から末梢神経というテーマを頂いたのはすでに十年も前の話になります。当時手の外科班末梢神経グループの研究は森雅之先生、高橋正憲先生のいらっしゃる、東京歯科大市川病院の実験棟を拝借していました。堀内先生(52回)がオリジナルの装置を開発し、これを用いた圧迫神経障害の研究を田崎先生(54回)が引き継がれ、小生は根本先生、松本先生(55回)の見習をしながら、一連の圧迫神経障害の研究の中で自分のテーマを模索する

ことになりました。研究にあたってはアカデミックなこととはさておき、まず暴れる犬を押えつけてネンブタールを静注する勇氣と、寝ている犬の横で店屋物を平気で食べられる根性が要求されました。

さて肝心のテーマについて少し説明させていただきます。手根管症候群²⁾の Entrapment Neuropathy は 圧迫、虚血、牽引が主な原因ですが、これに加え、加齢・栄養障害・糖尿病など所謂内的因子と呼ばれるものが多少となりその発症に關与しているものと考えられています。しかしこれまでは、もっぱらそういうものの影響もあるはずだという仮説の域を出ておらず、実験的証明は得られていませんでした。小生はこれら内的因子の存在を実験的に証明しようと考え、まず加齢の影響について試みてみました。年寄りの犬を集めて圧迫神経障害を作ろうとしたのですが、野良犬はほぼ例外なくフィラリアに感染して飼犬のように長生きできないことがわかり、このアイデアもまもなく挫折しました。

当時、先輩たちの実験に妊娠した犬が紛れ込むことがあり、妊娠犬では同じ圧迫装置を埋め込んでも他の犬より麻痺が非常に強く発生するのでオミットしていたのですが、逆にこれはものになるのではという思い付きが浮かびました。考えてみれば手根管症候群の患者の多くは

女性で、更年期と妊娠出産に関連して多く発症することは臨床では良く知られた事実です。これは妊娠などで手根管内に浮腫が生じ、正中神経の圧迫が引き起こされるものと考えられていますが、先に述べたホルモンなどの内因性因子の関与も考えられます。そこで妊娠した犬を集めて圧迫装置を植え込んでみることにしました。ところがいざ妊娠犬を集めようとすると、今度はなかなか見つかりません。犬には年に二回の発情期があるのですが、個体によってその時期は異なり、一定の季節というわけではありません。また雌犬の発情を判断することも難しく、人工増殖も容易ではありません。われわれは保健所から貰い下げられた雑種犬を用いていましたので、当然人工的な妊娠のコントロールは望めませんし、妊娠をコントロールできるビーグル犬などは高く使えません。やむなく動物業者からお腹のふくれた雌犬という条件で取り寄せることにしたのですが、単にでぶなだけの犬や、フィリアアで腹水がたまっているものなども多く、妊娠犬を集めるのはなかなか容易ではありませんでした。数カ月経過したところで、内西先生からそろそろ第一報を発表するようにとの命令が下ったのですが、まだNが三ぐらいしか集まっておらず、勘弁していただいたことが思い出されます。そうこうするうちに妊娠犬の頭数も増

え、途中からはEstrogen, Progesteronなどを負荷した実験も追加し、体裁が整ってきました。結局関連実験を含め百頭以上の犬のお世話になり、研究をまとめることができましたが、コントロール群では三週間の低圧圧迫において伝導遮断に陥ったのが2/28とごくわずかであったのに対して、妊娠群では圧迫前の伝導速度には変化がないものの、同じ圧迫力で15/28と約半数が伝導遮断に至り、1%の危険率で有意差が認められました。性ステロイドホルモンの負荷した群でも、やや麻痺が強くなる傾向が見られ、全く等しい圧迫をかけても個体側の条件により麻痺発現の程度が大きく違うこと、即ち末梢神経の易損性の存在を実験的に証明する結果が得られました。さらに一歩進めてこの易損性がどのようなメカニズムによるものか、血液神経関門などに注目して検討していったのですが、いかげんに遊んでいないで論文を書けという強いプレッシャーもあり、なんとか学位論文を完成することができた次第です。

今振り返ってみると、あれだけの時間と労力を費やせばもっといろいろな研究ができたはずなのに、反省点が数多く思い浮かびますが、この経験を後輩の先生方の研究に少しでも役に立てることができれば良いのではないかと思っております。論文の謝辞と似たりよったりの

結びになります。内西、堀内両先生をはじめとする手の外科班の諸先輩には、研究の手ほどきから投稿原稿の校正に至るまで本当にお世話になりました。また内容は元より、自分ではもうミスはないだろうと書いた論文に多くの間違いを指摘してくださった矢部教授にあらためて深く感謝させていただきます。

前田賞を受賞して

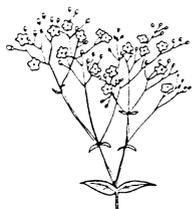
『骨格筋の修復に関する実験的研究
——切断・縫合後の修復についての
組織学・組織化学的観察——』

市川 亨
(61)

この度、右の論文にて平成四年度前田賞を戴きましたことをご報告申し上げますとともに、論文の要旨及び完成するまでのエピソードを紹介させていただきます。

骨格筋はこれまで一旦切断されずと縫合しても元のようには回復せず、切断・縫合部は瘢痕組織に置換されてしまうと考えられておりました。手の外科班の先輩であります浦部先生はラットの腓腹筋外側頭を実験部位として選択し、電気生理学、組織学、筋張力の面から検討を行なわれました。その結果、筋肉は切断されても断端の正確な再接合され保たれば、機能的にも組織学的にも一つのユニットとして修復されることを実証しました。私のテーマはハムスターを用いてこの修復過程をさらに細かく組織化学的に検討することでありました。

骨格筋の赤筋、白筋を染め分けるATPas染色を学ぶため、国立療養所東埼玉病院神経内科の石原伝幸博士の



もとに週一回一年間通いました。クリオスタット、pHメーターなどの器具が揃い、別館四階の実験室で実験が始まった時、水道の蛇口から鉄錆の茶色い水が出てきたのには驚きました。また夏場の実験はクーラーが効かず、室温がすぐ三十度近くになってしまうので早朝に実験をしたこともありました。しかし諸先輩の叱咤激励のお蔭をもちまして、横断切片の結果をまとめることができました。すなわち変性・壊死に続く初期の再生筋線維の出現が縫合術後一週以内に見られ、未分化な筋管細胞が融合して再生筋線維は成長し、しだいに再神経支配を受け、術後六週で成熟することが解明されました。

縦断切片の作製は手技的に極めて難しく、横断切片の実験と並行して作っていた標本は凍結切片もホルマリン固定の切片もすべて失敗でした。もうこの辺りで実験は止めにしようかと諦めかかっていた時、ある学会での発表後に矢部教授が「やはり縦断切片をみたい。」とおっしゃられ、もう一回チャレンジすることになりました。念願の縦断の凍結切片標本は見事成功し、以下の結果を得ることができました。すなわち術後一日で切断・縫合部から中枢側、末梢側に向かって1.2〜1.5mm幅にわたり変性・壊死が起こり、術後四日、初期の再生筋線維は縫合部から1.2〜2.3mmの範囲まで出現しました。このようにして理

想的条件下では術後八週で縫合部はほぼ筋線維のみにより修復されることが確認されました。

臨床の場では筋肉を縫合する機会が多いと思いますが、腱様の部位をしっかりと縫合し、筋実質部にギャップを生じないように筋膜をかけて筋肉縫合するのがよいと考えております。

最後にご指導を賜りました矢部裕教授、内西兼一郎客員教授、伊藤恵康博士、浦部忠久博士、そしてご支援をいただきました多くの方々に、改めて感謝申し上げます。

留学便り

白石 建 (56)

早いもので英国に来てからもうすぐ二年になるうとしています。当初は、かつてCroft先生のところへ留学された吉沢英造教授(藤田学園保険衛生大学)、山岸正明助教授(防衛医科大学)の業績の大きさと、Croft先生との間に築かれた信頼関係の大切さに気づかされる毎日で、自分にはどこまでやれるだろうかと考えると本当に緊張しました。これまでの最大の収穫の一つは何と言ってもCroft先生の素晴らしい人格を知ったことではないかと思えます。一度スコットランドのアバディーンでの講演にお供した時のことです。大学で講演を終えてその教授のお世話でB&B(英国の民宿)に泊まりました。急な予定で良い部屋が用意できなかったようで、一つはとても狭い部屋でした。当然私とその狭い方に入ろうとすると、Croft先生は私に広い方をすすめてくださり、ご自分はベッドも小さい狭い方の部屋へ入られてしまいました。その晩はせつ、かく大きなベッドの快適な部屋だったにもかかわらず感激してなかなか眠れなかったことを覚えています。また私の家族に対しても誕生日、ク

リスマス等々折に触れてご家庭に招待して下さり、事細かに気をつかってくださいます。万事がこんな調子なので、これに馴れてしまつて礼を失することのないようにむしろ気をつける毎日です。

さて私の一週間の予定は日本にいる時とあまり変わらない忙しさです。火曜と水曜の午後、そして木曜が手術日で、時には溢れてしまった手術予定をこなすために土曜日でさえ二例以上の手術を行なうことがあります。その他の日はぎっしりと詰まつた外来日で、これらの合間をぬつて学会の準備をしたりリサーチの手伝いをしております。帰国してからここでの経験を是非臨床や研究の面に生かしていきたいと思っております。

ロンドンは大都会ですが緑が多いことに驚かされます。どこの公園にもリスや野生の鳥がいて人間に安堵感を与えてくれます。郊外に出れば絵のように綺麗な英国の田園風景を見ることが出来ます。私達家族ももっぱら郊外に出かけて行ってB&Bを利用するのが気に入っています。ただのんびり過ごすだけです。英国人にとってはこのゆとりこそが人生の実感であることがわかります。

私の家族は妻と九歳の娘ともうすぐ七歳になる息子がいて、二人とも現地の小学校に通っています。ここに来て間もなく、たまたまその小学校で開かれたロイヤルバ

レエスクールのオーディションに娘が合格しました。それだけで幸運と思っていましたところ、今年の五月のロイヤルバレエの出しものに子供のパートで娘が選ばれ、コベントガーデンの伝統あるロイヤルオペラハウスで踊ることができました。バレエなどに何の縁もなかった夫婦でしたが留学の意外な副産物に驚き、また喜んでおります。

私は入局以来留学の希望を持ちつづけていました。今回矢部教授をはじめ医局のご好意で実現することができ本当に感謝しております。残された期間を思い残すことなく過ごしたいと思っております。

写真はCrock先生のお宅で撮ったもので、前列がCrock夫妻、後列がCrock先生の友人で内科のGalbally先生、私と家内です。家内を除くこの4人がSpinal Disorders Unitのメンバーです。



留学便り

浦部 忠久 (57)

一九九三年二月から家族でスウェーデンのルンド大学に留学させていただいています。ルンド大学の歴史は古く一六六六年に創始され、スウェーデン南部の学究の中心地として発展してきました。一九七七年に大規模な改革があり、マルメ市にある施設、専科大学などを統合して現在の体制になりました。医学部はルンド市の大学病院と、二十数キロ離れたマルメ市にある総合病院よりなっています。私の留学先である手の外科学教室を主催するLundborg教授は、末梢神経の研究においては世界の第一人者で、世界各地から研究者が集まって来ています。こちらでは、近年盛んになってきた仮骨延長術時の軟部組織の反応を調べています。筋肉がどのようにして長さを適合させているのか？末梢神経はどうなっているのか？などを中心に検索しています。それと並行して、末梢神経の部分損傷時の修復法として、シリコンチューブを用いた神経再生実験も行っています。広大な病院の敷地の一角に実験センターがあり、Department of Experimental Researchとして独立して、教授、助教

授が任命されています。一階が動物舎と小動物用手術室で、二階が大動物用手術室と病理組織、X線、血管造影、アイソトープ用の部屋および研究者用の部屋からなっています。手術室の設備は特にすばらしく、人間の手術ができそうな程整っています。

私たち家族が住んでいるマルメ市は人口二十三万人で、日本では小都市といったところですが、総人口八五〇万人のスウェーデンではストックホルム、ヨーテボリに次ぐ第三の都市です。対岸のデンマークの大都市コペンハーゲンと目と鼻の先で、かつての両国間戦争の歴史をマルメ城に見ることができ、南の玄関口となっています。

二月、三月と連日〇度の厳しい寒さに加え、夕方五時過ぎには暗くなってしまい心細い思いをしましたが、四月中旬からは快適な気候となり北欧の春夏をエンジョイしています。家の近くに海や小さな湖があり、子供たちは学校から帰ると、かもめ、白鳥、鴨、雁に餌をやりに行っています。春先には湖畔で卵を抱く鳥や、卵からかえったばかりのよちよち歩きの雛を見ることができました。日本ではカルガモ一家の横断が有名になりましたが、こちらでは鴨横断注意の道路標識があり、車が停まり鴨一家が通り過ぎるのを待つという、微笑しい光景が時々見受けられます。また家の周りには野うさぎ、小鳥が住ん

でいて朝は小鳥のさえずりで目が覚めます。郊外には見渡すかぎり菜の花畑が広がり、大変自然環境に恵まれたところですよ。

街には老人の姿が多く、日本の将来を見ている気がします。老人ホームはさすが福祉の国と言われるだけあって、個人の空間、公共の空間がきわめて機能的に整備されていて、広々とした談話室、図書室、美容室、ビリヤード室、手芸室、訓練室などがあり、しかも月数万円で済むというのにはおそれ入りました。個人個人の人間性を尊重し、常に自分で行動をとれるように配慮しているため、わが国と異なり「寝かせきり」老人の比率はきわめて低いとのことですよ。

全般に、住宅や教育事情はすばらしく、皆が広いスペースでゆとりのある生活をしています。国全体としての経済力は日本が上ですが、個人レベルでの生活水準はこちらの方が上のように感じられます。子供たちは公立学校の外国人向けクラスに通っていますが、成績表がなく日本の学校よりも楽しいと話しています。学費はすべて無料で、外国人の子供に対してこうまでして国の財政は大丈夫なのかと、心配になってしまいます。親の方も、完全週休二日制、夏休みもたっぷりりと日本では考えられない生活を送っています。何をやるにも言葉の壁はあり



ますが、あまりこちらの生活に慣れすぎると、親子ともども帰国後の対応が大問題となりそうです。

ヘルシングボリ市のシェールナン塔より港を望む
対岸に見えるのはデンマーク

スイス留学便り

柳 本 繁 (59)

私、九三年一月よりスイス、チューリッヒ大学整形外科バルグリスト・クリニック、シュライバー教授の元に留学しております。近況を述べさせていただきます。

スイスは人口が約六七〇万の国で、チューリッヒはスイスの最大の都市ですが都市部の人口は三十五万人足らずです。バルグリスト・クリニックは大病院ですが、大学医学部からは少し離れたところにある整形外科の単科病院で、ベッド数は約一五〇床、四十人程度の医師が常勤しています。バルグリストは慶應の整形外科とは関係が深く、山口雅成、末沢慶紀、家田浩夫、片田重彦、泉田良一各先生がこれまでに留学しておられます。またシュライバー教授もたびたび来日して慶應主催日整会での招待講演やPN学会での招待講師などを行っています。八十六年八月にはドイツで行われたSICOJのあとに双方の医師参加による学会形式の慶應―バルグリストのジョイントミーティングが行われたこともあります。スイスでの生活は毎日驚きの日々ですが、いろいろな項目に分け感想を述べてみます。

一、ことばについて

スイスはアメリカの様に州（スイスではカントンと呼ぶ）の独立性が強く、各州ごとに明確な法律があり、公用語も決まっています。ドイツ語圏、フランス語圏、イタリア語圏にわかれ、ドイツ語圏が約70%といちばん広く、チューリッヒもドイツ語圏です。こちらに到着してすぐは食事をしたり物を買ったりの日常ドイツ語でやり苦労しました（今もそうです）。医学用語はまだ聞いたことがあるドイツ語が出てきますし、バルグリストの医者は大体英語が話せるのでなんとか話は通じます。しかし一般人は英語が話せない人が多く（テレビ番組はドイツ語とフランス語とイタリア語の三種類で英語はない）、日常語は特に相手方から予期していいことを言われると分かりません。絶対して立ちすくんだりもしました。（もっとも、スーパーで歯磨きを一個でなく二個セットで買うと割安になるとか、レストランで肉のつけあわせは何がいいかなどつまらないことも多かったです。）最初は買い物、申込、食事など一つ一つ終わる度に無事に終わって良かったなどと考えほっとしたものでした。こちらの言語に対する感覚は日本人の言語感覚とだいぶ違います。特にスイス是一个の国の中に三つの言語圏があるためかいくつかの言語を話す人が多く、五カ国語く

らい話せる人はたくさんいます。しかし日本と違ってその言語能力だけで良い仕事場が見つかるということはないようです。バルグリストの食堂でも一つのテーブルで最初ドイツ語で話していて、新しい人が座る度に言葉がフランス語、イタリア語、英語と自然に変わっていったりします。たくさんさんの言葉を巧みに操る人にたくさんさんの言葉がしゃべれてすごいですねと話すと、スイスにはそういう人はたくさんいると別に自慢げでもありません。逆に日本語とヨーロッパの言語は全然違うし、私が両方しゃべれて（私でもしゃべれる方に入るかどうかは不明ですが）、あの複雑な漢字（アルファベットの感覚からすると膨大な数でむずかしいと思われるらしい）を覚えていてすらすら書ける能力はすごいと慰めてくれたりします。

二、バルグリスト・クリニックについて

毎朝七時十五分より全員参加でレントゲン・カンファレンスが始まります。前日撮ったすべてのレントゲンを全員で見えて、レントゲン指示を出した人が症例の説明をし、ラジオロジストがコメントをします。他に毎週月曜夕方に新入院患者カンファレンスがあります。これは講堂で実際に新入院患者を連れてきて診察し（ベッドでく

る人もいる）治療方針、手術方法を検討します。また毎週木曜、金曜の夕方は講堂で他大学から教授を呼んだりして講演が行われます。私はこれらに参加し、他には股関節外来を見学したり、手術の助手をしたりしています（現在までに二度人工股関節置換術の術者をさせてもらいました。）ここにはまた脊損センターやカルシウム研究所やバイオメカ研究室もあり独自の活動を行っています。この研究室から生まれた独自のバルグリストパンネやドゥルックシャイベ人工股関節は非常にユニークな形態（両方とも世界初の構造とのこと）を持っており成績も安定しているとのことで興味深いです。脊椎外科では前に末沢先生が勤務していたこともあり、症例を選んでPN（レーザーを使っている）を行っており、現在PNに加えて骨移植、経皮的なペディクルスクリューによる創外固定を行い、いわゆるオープンにしない経皮的な椎体固定などを盛んに行っています。

三、ガスト・アーツウットについて

私のような立場の医者はガストアーツウットと呼ばれています。時期によって同じ様な立場の人が何人かいることもあります。私が仲が良かったのはイタリアから来たドクターブルーノです。彼は創外固定による経皮的な椎

体固定の勉強に一月から四カ月間バルグリストに来ていました。毎晩食事に行ったり、一緒にスキーに行ったりしました。陽気で少しいい加減なラテン系の性格です。

彼はイタリア語、スペイン語、フランス語を話し、英語はあまりうまくなく、ドイツ語は全く知りません。彼の英語能力はあまり高くなく（彼に言わせると英語の時間はさぼってサッカーばかりしていた）、私の方も安心して落ちついて話せるというわけです。イタリア人から見たヨーロッパ人の分析などは興味深かったです。彼の話によるとヨーロッパは日本人が考えているほどはっきり国の違い、言語の違いはないとのこと。特にラテン民族は差が少なく、言語も似ており理解可能であるとのこと。逆に一つの国の中でもしっかりした統一がとれているわけではなく言語や習慣の対立があるとのこと。バルセロナ五輪は一部ではスペインの五輪ではなく、カタルーニャ地方の五輪だと言っていたことなどを思い出します。つまりヨーロッパの大陸部分は戦争、侵略などでいろいろな明瞭な境界線を持つ国家単位と少し感じが違うということのようです。第二次世界大戦後に現在のような単位になっているが、その前のさまざまな歴史を考えると、人の考え方、風習などはわれわれ日本人が

考えているほど国家の境界線ではっきり区別されるものではないようです。

四、シュライバー教授の事件について

私が留学して一カ月の頃の二月初旬に大きな事件がありました。カントンからの補助金や病院の寄付金の使用に對してシュライバー教授に不明瞭なところがあるというものです。この件はチューリッヒでは大きな事件で、テレビでシュライバー教授が記者会見し、新聞でも連日一面で取り上げられました。シュライバー教授はお金は病院の研究費や設備費に使ったのであって私用には全く使用していない、ただ費用の請求、書式などにぬかりがあっただけであると弁明しました。しかしカントン政府から金銭面の決定権（研究なども含む）を取りあげられ、九月末で主任教授を降りることになりました。バルグリストではシュライバー教授の力で研究面や病院の設備の充実などが行われてきましたから、みんな同情的で反対集会を開いたり署名運動をしたりしました。しかし最終的には良くない結果になってしまい残念です。私はと言うとこちらにきてまだ一カ月の時期ですので初めは事態が分からず戸惑いました。最初はイタリア人のブルーノと夕食後一緒にロビーでテレビを見ていると（イタリア

語の番組を見て僕に通訳してくれる)、バルグリストの看護婦さんが来てシュライバー教授が出るドイツ語の番組があるので見たいとのこと。一緒に見ていたらシュライバー教授が非常に興奮して記者会見をしており、これは何だかまずそうだなと思いました。看護婦さんは英語があまりできず、イタリア語ができるので、まずブルーノがイタリア語で聞いてそれを僕に英語で伝えてくれました。しかし又聞きと言うか語学力のなさの情けなさというか、どうもシュライバー教授にお金のことで良くないことが起こっているということしか分かりません(テレビの画像でもシュライバー教授の顔とお金の絵が写っているのでそれぐらいは分かる)。翌日病院に行つて英語のじょうずなドクターをつかまえて事情を聞いてやつと状況が把握できました。急に病院の勤務状態が変わったり、誰かがやめさせられたりはいないので安心して言うに言われてほつとした次第です。

五、スイスでの開業について

末沢先生はバルグリストで何年かオーベル・アーツウトをしたのち、数年前よりこちらで開業されています(バルグリストの教授になっていらっしやいます)。こちらにはいわゆるオープン・ホスピタルがあって、末沢

先生はそこで週に何例も自分の患者の手術を行っています。ステフィーなどのスパイナル・インスツルメント・サージェリーが多く、人工股関節置換術なども行っています。私も時々助手に呼んでいただいて最新のカーボン・ケイジによる後方からの椎体固定を見たり、いろいろな話をうかがい、開業といっても日本と大きな違いがあるものだと感心しました。開業しているドクターが利用するプライベート・ホスピタルがいくつかあり(保険の違いなどにもより差がある)、基本的にはその病院には常勤医はいないのですが、手術室(部屋も四つ、五つある)や病棟の看護、管理もしっかりしていて、自分の患者を入院させ大きな手術も行うことも可能です。大学病院に行くのも開業しているスペシャリストに行くのも患者が評判や紹介で選択するので、常に最新の方法を身につけておかないといけないとのことです。末沢先生自身、私のいる間にも二度アメリカのステフィーの病院に研修に行かれていました(患者は予約制なので一〜二週間の休診は可能である)。毎日いくつかの病院で自分の患者の回診をするので時間的に忙しく、バルグリストにいる時の方が患者を見てくれる部下もいて時間の余裕があったとのことです。

最後にヨーロッパは歴史的、人種的にも非常におもしろいところですよ。特にスイスは治安がいいこともあり、楽しく有意義な体験をしたと思います。特にバルグリストは慶應の諸先輩方と関係が深いところで、ありがたいと思ったことは数限りがありません。留学を勧めただき、御世話いただいた諸先生方に心からお礼申し上げます。



「カナダとアメリカに暮らして」

仲尾保志 (63)

オンタリオ湖に接して林立する超高層ビル群の眩しいばかりの夜景が、私の見た最初のトロントでした。カナダで留学生活が始まったのはもう二年前になりますが、古い大学の建物と広大な芝生の緑がとても印象的でした。私のスパーバイザーであるトロント大学医学部形成外科のマキノン教授は、末梢神経損傷の臨床また神経移植の基礎的研究で世界をリードする存在ですが、まだ四十歳になったばかりの彼女は、胸部外科教授の夫との間に四人の子供を持つ母でもあります。私は、彼女の研究室で神経の保存の研究をするいっぽう、免疫学のヘイ教授のもとで、羊を用いた組織移植後の急性免疫反応の研究にも携わる事になりました。

まずこちらに来て何よりも困ったのは、免疫学の基礎的知識もさることながらやはり英語で、自分の言いたい事はうまく伝わらない、ミーティングで周囲の議論がわからない、そして誰かのジョークにどっと笑いが出ても私は10秒ほど遅れてニコッと作り笑いをしかなないという日が続きました。人から半年たてば自然にペラペラに

なるという話を聞いていたので、きつと時間が解決してくれろと信じて研究に精を出したものです（その後、これが大きなまちがいである事に気づきましたが）。やがて紅葉の季節が訪れ、街中にあるメープルリーフの大きな葉が美しく色づき始めました。この頃、フランス語圏のケヴェック州を訪ねたのですが、石畳の通りに古いヨーロッパ的な建物が並び、紅葉したメープルリーフに彩られたその街はとても美しいものでした。カナダの秋は短く、十月が終わる頃には長い冬に入ります。氷点下20〜30度で連日の吹雪、足首までのコート、帽子、耳当て、マフラー、手袋をしても、十分も外を歩くと息ができなくなるという恐ろしい世界です。ただ、オタワに留学中の浜田先生（現東海大学）に電話をすると、「トロントは暖かくていいなあ、こちらはマイナス40度ですよ」と言われ、きつと浜田先生はエスキモーの様な格好をして、研究室には大ぞりで通っているのではないかと思っただけです。

年が明けて、ようやく暖かくなりかけた五月に、マキノン教授がヘッドハンティングでアメリカのワシントン大学に移る事になり、私も含めて部下一同アメリカに移動しました（アメリカ大陸をトラックを運転して南下しました）。北アメリカ大陸のほぼ真ん中に位置するセン

トリスのワシントン大学は、全米でもトップ5に入る医学部を持ち、ノーベル賞学者も大勢輩出した長い歴史を持つ大学でした。特に、世界で最初に肺移植を成功させたターパー教授の率いる移植部門が看板で、心臓移植のスタンフォード大学、肝臓移植のピッツバーグ大学とならんで、御三家的存在だそうです。私は、アメリカに移ってからは、抗体を用いた新しい免疫抑制方法に取り組みました。短期間特殊な抗体を投与することで、免疫抑制剤をまったく用いなくても、ドナーから移植された神経をレシピエントが拒絶せず、いっぽう他の侵入物に対するレシピエントの免疫反応は正常に維持させることに成功しました。これは、すべての免疫機能を抑制してしまうサイクロスポリンやFK506と違い、たいへん興味深い方法だと考えています。こういった研究活動の他に、アメリカに来てからは、形成外科のレジデントや医学部の学生の講義、マイクロサージェリーの実習なども担当しましたので、毎日はかなり忙しく過ぎていきました。しかしながら、緑に囲まれたこのアメリカのいなかでの生活は、物価も安く人も親切で、実に生活しやすいものでした。

現在は、帰国を数カ月後にひかえて、研究の詰めと論文執筆に追われていますが、北米での留学生生活を振り

返ってみますと、決してバラ色の事ばかりではなく、仕事上の激しい競争、常識や習慣の違いからくるストレスに、心身疲れたことも多々ありました。しかしながら、研究での興味ある結果、多くの友人、数多くの貴重な体験、そして二つの国で文化の違いを肌で感じることができ、たいへん得る物の多い二年間だったと思います。四回の学会発表と二編のファーストネームの論文、アメリカ生まれの子供が私の留学生生活の集大成です。今年のお秋には日本に帰国しますが、こちらで得た貴重な経験を、これから研究や留学を希望する先生方に、お伝えできればと思っております。最後になりましたが、マキノン教授をご紹介いただいた矢部教授はじめ、今回の留学の機会を与えて下さいました教室の諸先生方に心より御礼申し上げます。



教授秘書 畑中路子

今年の三月に医局秘書から教授秘書になりました畑中路子です。笑顔、かつ謙虚な気持ちを忘れずに日々過ごしてゆきたいと思っております。至らない所もあるかと思いますが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

中島有理子

楽しく毎日、お仕事させて頂いております。これからも、先生方のお役に立てるよう精進して参りますので、宜しくお願い致します。

医局秘書 栗生真里

島達の航空会社から整形外科の医局にきて一年たちました。至らないところが多く、医局長堀内先生はじめ先生方にご迷惑ばかりおかけしていますが、一生懸命がんばりますので、どうぞよろしくお願い致します。

白土若菜

Jリーグの選手の激しいプレーを観ていると、つい先生方の忙しい毎日が頭に浮かんできます。

まだまだ未熟な私ですが、早く先生方の名サポーターになるよう頑張りますので宜しくお願いします。

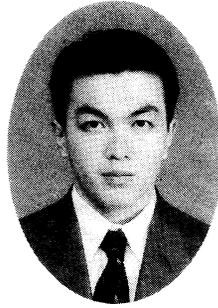
恩田絵美

九三年三月より、パラプレジア医学会、脊椎外科学会を担当することとなりました。以前は薬剤師として調剤をしていたので秘書経験はないのですが、他の医局秘書の皆さんや先生方に少しでも力になれるようにがんばりたいと思います。



左より、
白土若菜、栗生真里、畑中路子(教授秘書・同窓会担当)
恩田絵美、中島有理子

新入局者紹介



阿部 智行 (71)

生年月日 昭和四十二年十一月二十三日

出身校 慶應義塾大学医学部

趣味 ゴルフ

入局の動機 患者さんによりよく生き、喜びを感じてもらえる学問と思い、入局を決意しました。

入局後の感想 平成四年四月に入局し、現在荻窪病院で勉強させて頂いています。慶應医学の素晴らしさ、整形



小川 祐人 (71)

生年月日 昭和四十二年十二月十二日

出身校 慶應義塾大学医学部

入局の動機 生きる事のできる人に、よりよく生きてほしいと思い、入局を決めました。

入局後の感想 外来の患者さんの多さに驚きました。また、整形外科は、極めて多岐に渡る学問であることを実

外科という学問の醍醐味、また、諸先輩方、同期そして後輩の先生方に恵まれたことを実感する毎日であります。最高の整形外科の医局の一員として恥じぬ様一生懸命に頑張る所存でございます。今後とも御指導御鞭撻の程よろしくお願い致します。

感しました。

現在は済生会神奈川県病院で勉強させていただいてます。一日が瞬間に過ぎて行く毎日ですが、一生懸命頑張る所存ですので、今後とも御指導・御鞭撻のほど宜しくお願い致します。



川島 秀一 (71)

生年月日 昭和四十二年四月十八日

出身校 慶應義塾大学医学部

クラブ 大学時代はサッカー部

平成四年四月に整形外科教室に入局して慶応病院での辛くも楽しいフレマン生活を終え現在総合太田病院にて、研修中です。慶應病院とは、また異なる環境のなか

で整形外科とは何たるかを身を以て体験し、先輩方の厳しい御指導を頂きながら、ひとつひとつ自らの心とし身となすべく日々邁進する毎日です。一人前の整形外科医に一日も早く成長すべく一層努力する所存でありますので御指導御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

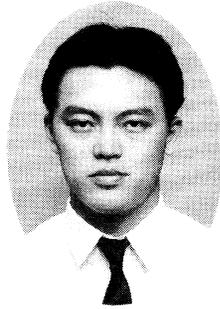


清水 健太郎 (71)

世界に誇る教室の歯車として働けることを光栄に思います。

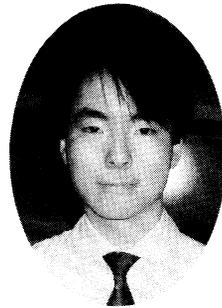
外傷、骨折、腰痛を経験しない人間など絶無である以上、いまや整形外科はもっとも需要のある臨床科のひとつかも知れません。はたして世紀末の日本は、老いらくの理想郷か、それとも、老いばれの紅蓮地獄なのか？

整形外科は、まさにその舵取りをになう医学だと思いません。伝統ある教室の名に恥じぬよう、粉骨碎身する所存です。



高橋 世賢 (71)

高橋世賢といえます。慶應義塾大学出身で、学生時代はアメリカンフットボール部に所属していました。初めての自己紹介の時に、『名前は世に賢いという字を書きます』と言ったところ、後で富士川先生に、『おまえが世の賢い人に仕える高橋か?』と言われ苦笑したことを覚えています。なるべく早く『賢い人に仕える高橋』から『賢い高橋』になれるよう一生懸命勉強しますので、諸先輩方、御指導の程宜しくお願い致します。



名倉 武雄 (71)

生年月日 昭和四十二年七月二十六日

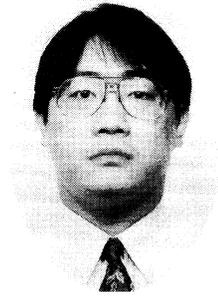
出身校 慶應義塾高校、慶應義塾大学

クラブ 硬式庭球部

趣味 テニス、ゴルフ

志望理由 生まれたときから整形外科に入ることを決めていました。

抱負 小さい頃からの夢であった医者となって早一年が経ちました。医師という職業は思いのほか大変で、また責任の重いものであるということを痛感しております。患者さんのためにも、そして自分のためにも日々努力しなければならぬと感じる今日ころ頃であります。



山田 陸雄 (71)

生年月日 昭和三十九年十二月十五日

出身 慶應義塾大学

クラブ ラグビー部

大学での一年間の研修を終え、現在清水市立病院で研修させて頂いております。外来、病棟、手術と新しいこととの連続で自分の無力さを痛感させられる日々を送っております。

諸先生の暖かいご指導のもと、何とか一人前の整形外科医になれるよう頑張っていきたいと思えます。



鉦持 太郎

生年月日 昭和四十年四月二十三日

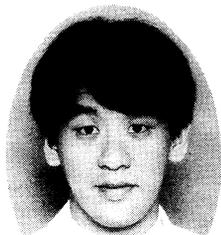
出身校 東海大相模高校、日本大学医学部

趣味 ゴルフ、ドライブ、音楽

入局の動機 今後、高齢化社会が進み整形外科の必要性が増すという事と、スポーツ医学に興味があり入局させていただきました。

現況 平成五年七月より、日野市立病院に出張しております。初めての出張ということで、期待と不安でいっぱいですが大学で研修し教えていただいたことを糧に、出張病院の先生方の御指導のもと頑張っております。

一日も早く諸先輩方に近づけるよう努力しますので今後とも御指導、御鞭撻の程宜しく願います。

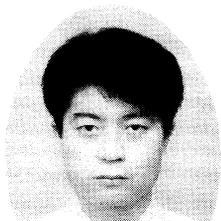


鈴木康之

出身校 北里大学

趣味 スキー、アマチュア無線、料理、キャンプなど。

学生時代 軽音楽同好会を作りベースを弾いていました。先日仕事を休ませてもらい、学生時代にスキーで切った前十字靭帯を再建していただき病棟、スキー場とバリバリ動けるようになると思いますが、術後やりハビリが、あんなに痛いとは思いませんでした。今後、この経験を生かし患者さんとふれ合って行きたいと思っておりますので、なにとぞ御指導よろしくお願いいたします。



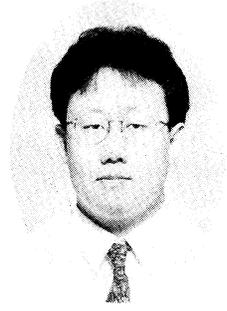
山田貴彦

生年月日 昭和四十六年六月二十九日

出身校 横浜緑ヶ丘高校、聖マリアンナ医科大学

学生時代は柔道部に所属していました。おかげで整形外科には患者としてお世話になることも多く、早く治療を行う側に回りたいものだと考えておりました。念願かなってようやく整形外科医となることができ、この度大聖病院での約一年間の研修を終えて、現在は福生病院にて勉強させていただいております。一人前の整形外科医にはまだ程遠いと思っております。御指導・御鞭撻の程よろしくお願いいたします。

吉田 宏樹



生年月日 昭和四十一年七月二十六日

出身校 杏林大学医学部

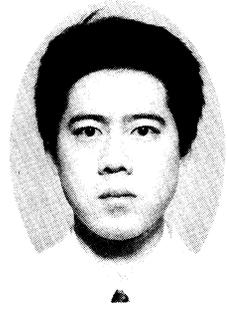
趣味 音楽・映画鑑賞

スポーツ 学生時代はハンドボールのゴールキーパーをしていました。

入局の動機 もともと外科系を志望していて、一般外科などと比較し、手術法の多彩さや運動器の機能再建に興味があったため。

入局後の感想 整形外科の奥の深さに驚き、また、よき諸先輩方や同期に恵まれ、いつのまにか一年が過ぎました。今後も御指導、御鞭撻の程よろしくお願い致します。

吉野 匠



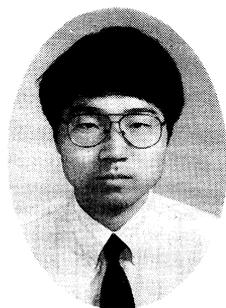
長くもあり、短くも感じられた慶應でのフレッシュマン時代を終え、不安と期待を抱きながら、初めての出張へと出させて頂き、早一か月が過ぎようとしております。現在、栃木県の佐野厚生総合病院に勤務しております。

先日、初めて一人立ちの手術をさせて頂き、長い緊張の末、無事の手術を終える事ができたときの喜びは、今までに味わった事のない新たな喜びでした。今は、恥ばかりをかいており、整形外科医としての力のなさを痛切に感じさせられる日々を送っておりますが、一日も早く立派な整形外科医になれるよう、今年はめいっばい恥をかき、恥をかいた分一つ一つ自分の力にして行けたらと思うきようこの頃です。今後とも御指導、御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



君島康一

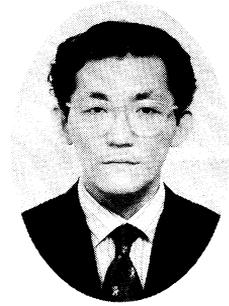
産業医大の出身で、学生時代はバドミントンをやりました。他に趣味は、油絵を描くことです。入局の動機は、小さい頃から手を動かして物を作ることが好きで、手術をしたいことと、機能外科に興味があることです。現在は、国立埼玉病院で勉強させていただいております。日常診療を通じて、あらためて整形外科の幅広さを感じさせられている毎日です。まだまだ、失敗が多く、多くの先生方にご迷惑ばかりおかけしておりますが、今後も頑張っていく所存ですので、御指導、御鞭撻の程宜しくお願い致します。



水谷憲生

生年月日 昭和四十年六月十八日
出身校 大阪星光学院高校、東京医科大学
趣味 ヨット
入局の動機 卒後、救命救急の分野を少し勉強しました。が、救命後に自分が患者に対して、何ができるのか、何をしたいのかを考えた時、整形外科を選びました。現況 平塚市民病院にて研修しています。初めて術者になった時の緊張感、いくつもの失敗、患者が歩いて退院していく時の喜びを忘れずに頑張っていきたいと思いません。御指導のほど宜しくお願い致します。

六馬 信之



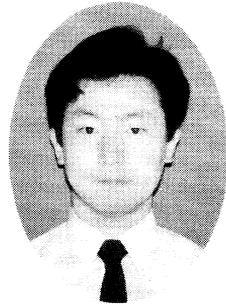
出身校 慶應義塾大学工学部、大学院理工学専攻

エンジニアである私が臨床系の領域に手を染めたのは、工学部時代の本医局との共同研究がきっかけでした。その後、同窓の今井先生や戸松先生に誘われて東海大学の整形外科学教室に入局し、整形外科学分野に本格的に足を踏み入れることとなりました。平成四年より、里帰りというわけではありませんが、臨床医でもない私が慶應義塾大学整形外科学教室の正式な教室員として招いていただくことができ、本日にいたっております。

最近、関連テーマの多さに振り回されながら、私の力不足のために諸先生方に迷惑をかけつつ、時の過ぎる早さを実感しながら暮らしている状況です。

安井 慎一

(63)

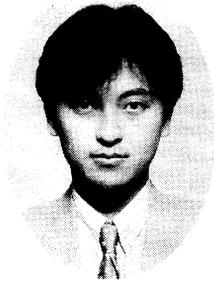


生年月日 昭和三十三年六月十八日

出身校 慶應義塾大学医学部

趣味 ゴルフ

現況 縁あって永寿総合病院で勉強をさせて戴いております。整形外科の守備範囲が予想以上に広く、また他の領域との関連も深いと感じています。今後とも御指導、御鞭撻の程よろしくお願い致します。



石井 賢 (72)

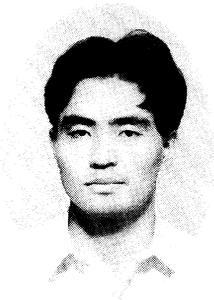
生年月日 昭和四十四年一月二日

出身校 慶應義塾大学医学部

趣味 ゴルフ、スキー。学生時代はヨット部。

入局の動機は、整形外科が外傷やスポーツを含めた幅広い機能外科の大部分を担う学問であり、神経に興味があった事です。そして、何よりも自分にあっている事が最大の理由です。

まだ入局してから数カ月で、分からない事はかりですが、日々勉強に勤しみ、より一層の努力をしてゆく所存です。御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

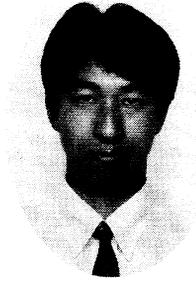


石川 雅之 (72)

生年月日 昭和四十二年十二月八日

出身校 慶應義塾大学医学部

この度、整形外科学教室へ入局させてもらうことになりました石川雅之です。入局して早くも三ヶ月になりましたが、現在は麻酔科をローテーションしており、整形外科とは少し離れており、整形外科学教室の諸先生方に御指導して頂くチャンスが少ないのは残念ですが、今は麻酔科の方をしっかりとやっていこうと思っています。今後ともよろしくお願い致します。



内田尚哉 (72)

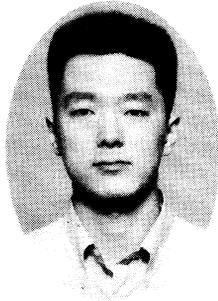
生年月日 昭和四十二年九月二十三日

出身校 私立海城高校 慶應義塾大学医学部

趣味・特技 サッカー、水泳、クルマ

入局の動機 自分の眼で見えて疾患を治せる外科系が希望で、機能の再建を主とした整形外科の領域に興味があったこと、また自分自身スポーツをやっていたし、世話になっていたことなどもあり、入局を決めました。

現況 入局一年目で、慶應義塾大学病院整形外科にて研修中ですが、九月までは横浜市南部病院にて麻酔科の研究を行っています。今は整形外科医、もしくは医師と呼ぶには程遠い状態ですが、一つ一つ着実に学んで行きたいと思っております。御指導の程宜しくお願い致します。



柏木忠範 (72)

生年月日 昭和四十二年十月二十二日

出身校 灘高校、慶應義塾大学医学部

スポーツ あくまでもレジャーとしてのゴルフ、テニス

入局の動機 いろいろな要素が絡みあっているので一言で言うのは難しいが、簡単に言うと、最も医者らしく仕事ができる科だと思ったからである。

御挨拶 既に数カ月を経過し、一時の慌ただしい時期を過ぎて、やっと慣れてきたような気がします。最初は仕事の内容も理解できず失敗の連続でしたが、やさしい先生方の温かい目や御指導に支えられて、どうやらこの私もスクスクと成長しているようです。今後とも宜しくお願い致します。



齊藤 治和 (72)

生年月日 昭和四十年四月七日

出身校 兵庫県立川西緑台高等学校 慶應義塾大学医学部

趣味 音楽鑑賞・剣道

入局の動機 外科系志望であったことに加え、対象疾患が多彩であること、機能再建が目的となることが多いことなどに魅力を感じたため。

現況 入局後三カ月になりますが、この三カ月はまさに無我夢中のうちに過ぎさったという感じです。まだ当分こういった状況が続くと思われませんが、一生懸命やっついこうと思います。どうぞよろしくお願い致します。



二木 康夫 (72)

以前、ハワイで“ambulance”という車の横文字を

“unbalance”と呼んでしまい悩んでいた自分が、現在こうして慶應病院の整形外科医として働き始めてはや三カ月を過ぎました。三カ月たった今、整形外科に来て本当に良かったと思うことが二つあります。

一つは、スタッフの先生方の良さにあります。一見、非常にユニークでユーモアのセンスのある柔らかいイメージの先生方も一枚めくれば素晴らしい日本を代表する臨床医であり研究医であるという事です。もう一つは、高校、大学とクラブ活動に勤しんできたことが実際に役に立っているということです。(因みに私は、学生時代に

にスキー部に所属していました。(医局旅行の芸、お相撲さんの足持ち、ギブスカットなど学生時代に鍛えられた忍耐力、筋力、精神力のお蔭だと思っています。)

慶應での少ない給料が引越しの敷金、礼金や医局費に消えて行くのもちよっぴり悔しい気もしますが、今は、修行の為だと思って予科一からやり直すつもりで頑張りたいと思います。今後ともご指導の程、よろしくお願ひします。



松崎 健一郎 (72)

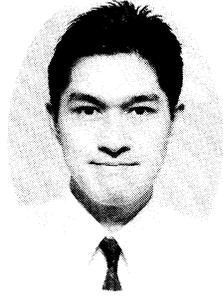
生年月日 昭和四十二年二月二日

出身校 武蔵高校 慶應義塾大学

スポーツ 中学から大学まで硬式テニス部

入局してからもう三か月が過ぎ、現在一週間の夏休みを頂いております。フレマン十八人中最初の夏休みなので、まだ梅雨の真っ最中です。このぶんだと、真夏の太陽が見られるのは、外来が終ってグリーン食堂に移動するわずか二十秒程、ということになりそうです。

この三か月、冷や汗をかきっぱなしでした。特に、フレマンのやるべき仕事、すでにオーベンの先生によってなされている時、いつもしまったと思っています。抜けている私ですが、どうか宜しくお願ひ申し上げます。



矢部 寛樹 (72)

出身校 慶應義塾大学医学部

出身クラブ 三四会バドミントン部

現状 現在、梅雨明けは、まだ先でありまして、数え切れぬほどの粗相、失敗の中、日々暮らしております。

今後の抱負 歴史ある整形外科に入局させていただきまして、ありがとうございます。現在、暗中模索の中にありますが、一筋の光は、確かに見えております。素晴らしいスタッフのもと、一生懸命頑張っていきたいと思っております。これからもよろしくお願い致します。



阿久津 政司

生年月日 昭和四十一年十一月二十七日

出身校 栃木県立大田原高校、金沢医科大学医学部

趣味 写真撮影、音楽鑑賞、オートバイ、ヨット

入局の動機 スポーツ医学、外傷後の機能再建に興味があったため。

入局後の感想 四月十二日より仕事が始まって以来、毎日がわからない事の連続でしたが、諸先輩方、個性豊かな同僚達、病棟のナースさん等々に助けて貰い、最近やっと少し慣れて来た様な気がします。まだまだ若輩者ですが、足りない所は努力と根気でカバーできる様、頑張っていこうと思っておりますので、今後ともご指導の程宜しくお願い致します。



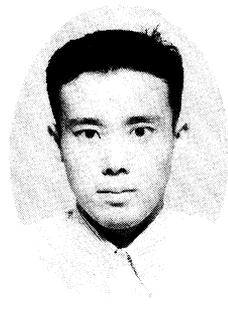
大串 一彦

出身校 福島県立医科大学

趣味 テニス、ゴルフ

入局の動機 学生時代より、運動が好きで、スポーツ医学に興味があったことと、手の外科（マイクロサージャリー）にも興味があった為。

まだ入局したばかりで、わからない事ばかりですが、精一杯努力し、多くの事を学んでいきたいと思っています。御指導の程よろしく願います。



長田 夏哉

出身校 日本医科大学

抱負 現在は外来・病棟から手術まで勉強する事が幅広く忙しい毎日を送っています。将来はやりたい事がある為、それに向かって多くの先輩方の御指導を仰ぎつつ、自分の考えを失うことなく努力してゆきたいと思っています。今後とも御指導・御鞭撻の程よろしく願います。



加藤 正二郎

出身校 日本大学医学部

私は慶應中等部、塾高を経て、なぜか日本大学の空気を六年吸って来ました。学生時代よりテニスとゴルフが好きで大学ではテニス部の主将を務めました。しばし日本大学を離れた今思うのは、日大には本当に人柄の良い人が多いという事です。何か人間の味がして、あれはあれで良いものです。しかし単なるオヒトヨシが多いのも事実で、自分は同時に質の良い医療の提供者でありたいと願う者です。『美人にして性格が良い』みたいな理想論の様ですが、やってできない事ではないと信じます。それを行動にするのは途端に難しく感じますが、今はただ目の事を光る目に対処する。ただコレだけです。



高木 賢一

出身校 防衛医科大学

趣味 テニス

入局の動機 大学卒業後、防衛医大整形外科教室に入局し、大学、阪大関連病院などをローテイトしてきました。学会や誌上での慶應大学の活発な発表、研究を見るにつれ、より多くのことを学びたいと思い今回入局を希望した次第です。今後とも御指導の程よろしくお願い致します。

堂 脇 慎 一



出身校 東邦大学

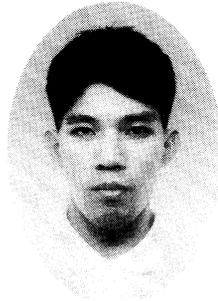
趣味 スキー、食べ歩き、旅行

入局の動機 以前整形外科に患者という立場でお世話になったことがあり、今度は逆に医療者の立場としての整形学に興味を持ち入局しました。

現況 最初は慶應を卒業した同期に圧倒され右も左も分らず苦労しましたが、今は次第にそれにもなれ、良き学友としてやっていけると確信しています。

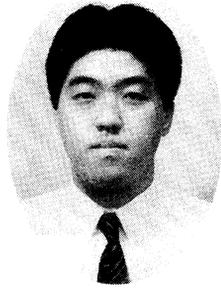
これからも至らぬ所はあると思いますが、ご指導、ご鞭撻のほどをよろしくお願いします。

堀 内 極



出身校 神戸大学

大学の六年間を神戸で過ごし、この春から東京に戻ってきました。学生時代は何に対しても興味を持ち、頭で考えるよりも行動することを得意としていました。久しぶりの東京での生活はまだ戸惑いも多く、慣れないことも多いですが、精一杯、仕事と勉学に励んでいこうと思っています。ご教授、ご鞭撻のほどよろしくお願いします。



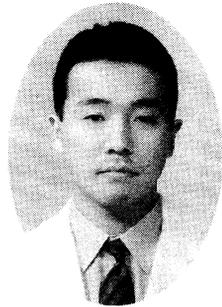
宮崎 祐

生年月日 昭和四十二年七月四日

出身校 桐陰学園高等学校 聖マリアンナ医科大学

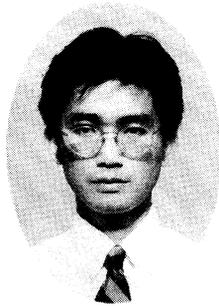
学生時代 大学では準硬式野球部に所属し、また早大のWFSというサークルにてバンドを結成、ベースを弾いておりました。

入局して三ヶ月、他大学より入局した私にとっては何をするにもわからない事ばかりでした。これからも厳しくも優しい諸先輩方に御指導を受けながら、一つ一つ勉強し努力していききたいと思っておりますので宜しくお願い致します。



山根 誓二

この度、伝統ある慶應義塾大学医学部整形外科教室の末席に加えていただけることになりました聖マリ医大出身の山根誓二です。学生時代はクラブ（アメフト）や遊びばかりしていたので浅学しかも非才の身であります。懸命に追っていきますので、今後ともよろしくご指導、ご叱正お願い致します。



山 村 則 文

出身校 東邦大学医学部

クラブ活動 剣道部

入局の動機 整形外科的な興味と、ポリクリでの実際の治療に感銘して希望しました。

入局の感想 慶應大学整形外科に入局させていただいて、最初は不安を感じましたが、今ではその不安も取れ自身自身の不勉強さを痛感するこの頃です。

今後の抱負 諸先生方のような立派な整形外科医に、自分も成れるよう頑張ってください。至らぬ点多々ありますが、今後とも御指導よろしく御願ひします。



同窓会・教室だより

●人事

(1) 医長

平成3年4月 里見和彦君

4年1月 山中 芳君

1月 菅沼 淳君

1月 飯島謹之助君

7月 彦坂一雄君

7月 柳田雅明君

11月 高畑武司君

5年7月 三笠元彦君

7月 鶴飼 茂君

7月 森 謙一君

10月 水島斌雄君

(2) 院長・センター長

平成3年10月 矢部 裕君

4年4月 難波健二君

4月 横井正博君

4月 富田 勤君

東京専売病院

静岡赤十字病院

芳賀赤十字病院

浜松赤十字病院

東京専売病院

国立栃木病院

伊勢原協同病院

都立大久保病院

佐野厚生病院

永寿総合病院

済生会中央病院

慶應義塾大学病院

茨城県立こども福祉医

療センター

済生会若草病院

国立塩原温泉病院

(3) 副院長

平成4年12月

12月

5年2月

4月

8月

(4) 教授

平成3年4月

4年4月

4月

4月

4月

4月

5年4月

4月

4月

4月

4月

5年4月 岩田清二君

慶應義塾大学月が瀬リ
ハビリテーションセン
ター

村山信行君

有馬 亨君

崎原 宏君

浜野恭之君

磯田功司君

平林 洌君

石井良章君

新名正由君

干野直一君

齊藤正也君

岩田清二君

月村泰治君

厚生連魚沼病院

国立療養所箱根病院

永寿総合病院

宇都宮済生会病院

稲城市立病院

慶應義塾看護短期大学

学長・整形外科兼担教

杏林大学主任教授

防衛医科大学校教授

慶應義塾大学医学部リ
ハビリテーション科教
授

慶應義塾大学名誉教授

慶應義塾大学教授兼月

が瀬リハセンター長

慶應義塾大学整形外科

授

授

授

授

授

授

授

客員教授

4月 大谷 清君

慶應義塾大学整形外科

客員教授

4月 内西兼一郎君

慶應義塾大学整形外科

客員教授

(5) 助教授

平成4年4月 梶原敏夫君

藤田保健衛生大学リハビリテーション科

杏林大学

7月 里見和彦君

防衛医科大学校

10月 山岸正明君

慶應義塾大学医学部

5年4月 花岡英弥君

慶應義塾大学医学部

(6) 講師

平成3年4月 坂巻豊教君

慶應義塾大学医学部

10月 小川清久君

慶應義塾大学医学部

10月 斉藤聖二君

東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センタ

藤田保健衛生大学坂文種報徳会病院

防衛医科大学校

10月 高山真一郎君

種報徳会病院

防衛医科大学校

4年9月 根本孝一君

慶應義塾大学医学部

10月 堀内行雄君

防衛医科大学校

5年1月 山田治基君

防衛医科大学校

4月 正門由久君

慶應義塾大学医学部リハビリテーション科

8月 劔持和彦君

藤田保健衛生大学坂文種報徳会病院

10月 鈴木信正君

慶應義塾大学医学部

(7) 教室幹事

平成3年4月～4年9月

井口 傑君

平成4年10月～

堀内行雄君

● 留学

平成3年4月から5年5月まで

大谷俊郎君

英・リーズ大学

平成3年7月から4年5月まで

浜田一寿君

加・オタワ大学

平成3年7月から留学中

仲尾保志君

加・トロント大学↓米・ワシントン大学

平成3年8月から留学中

白石 建君

英・クロムエル病院

平成3年9月帰国

高山真一郎君

ニュージールランド・オタゴ大学

平成3年12月帰国

菅沼 淳君

米・ニューヨーク

平成5年1月より5年10月まで 柳本 繁君

スイス・バルグリスト大学

平成5年2月より留学中 浦部忠久君

スウェーデン・ルンド大学

平成5年9月より留学中 福井康之君

米・バーモント大学

平成5年9月より留学中 渡辺 理君

米・ワシントン大学

●慶弔のお知らせ

○御結婚

平成3年4月 仲尾保志君

6月 新井 健君

9月 太田圭一君

11月 中村光一君

平成4年1月 宮田義之君

2月 大山泰生君

2月 金子 修君

3月 高田直樹君

3月 平石英一君

5月 楊 玄壮君

5月 上田誠司君

○御逝去

7月 河野 亨君

9月 塩田匡宣君

12月 田辺 巖君

12月 鈴木康之君

平成5年1月 堀田 拓君

4月 西浦康正君

5月 牧田聡夫君

6月 吉川泰弘君

10月 笹崎義弘君

10月 水谷憲生君

平成3年4月 柴崎啓一君 御尊父

5月 坪田忠住君 御母堂

5月 千野直一君 御尊父

9月 水島斌雄君 御母堂

11月 高尾徹二君 御尊父

12月 小林慶二君 御尊父

平成4年1月 藤田享介君 御尊父

1月 大崎康正君 御尊父

3月 塚原健司君 御尊父

茂君

御尊父

6月	臼田正雄先生	御本人
7月	戸松泰介君	御尊父
8月	今井銀四郎君	御母堂
10月	藤中星児君	御母堂
10月	赤坂嘉久君	御尊父
11月	小林真杉君	御本人
12月	平松正光君	御母堂
平成5年1月	今中欣一君	御本人
3月	永田雅章君	御尊父
3月	高瀬佳久君	御母堂
3月	高山真一郎君	御尊父
5月	山村則文君	御尊父
5月	有馬亨君	御母堂
6月	水島斌雄君	御尊父
6月	中村俊康君	御尊父
7月	池田亀夫君	御本人
9月	佐々木正君	御母堂
9月	峯尾喜好君	御尊父
9月	木村彰男君	御尊父
10月	根本孝一君	御母堂
10月	哲夫君	御母堂
10月	阿部智行君	御尊父

○御開業および退室

10月	左奈田幸夫君	御合室
平成3年3月	湯沢喜志雄君	
3月	鈴木邦夫君	
10月	塩尻邦彦君	
12月	田村興太郎君	
4年2月	真木元裕君	
3月	小林祥悟君	
3月	中村洸君	
3月	横井正博君	
6月	原洋二君	
6月	吉峰公博君	
11月	増田隆一郎君	
12月	村尾眞俊君	
5年2月	内西兼一郎君	
3月	斉藤正也君	
8月	片田重彦君	

(平成3年3月〜平成5年10月)

堀内行雄記

『編集後記』

今年度の同窓会誌「ふるさと」は、池田名誉教授の追悼記念特集を中心に編集しました。さらに、開業などにより医局を離れて久しい諸先生方の近況をお伝えしようと思い、その特集も組み入れました。多くの先生方からの御投稿により、従来の「ふるさと」に比べても読みごたえのある雑誌を発刊する事が出来たと思っております。お忙しい中を池田教授との懐かしいスナップ写真などを添えて御投稿下さった諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

さて、お読みになったの「ふるさと」の感想は如何だったでしょうか？ 池田先生の思い出や開業なさった先生方の近況、また現在の医局の状況、新人の紹介等々盛りだくさんの内容であったかと思えます。校正時に全ての原稿を読ませて頂き感じたことは、池田教授の偉大さと懐の深さ、現在はそれぞれの道を歩んでいる諸先生方の慶應への想いが如何に強いものであるか、また何か有事の時には一つになれる結束力の凄さなど…、改めて慶應同窓会の一員であることを誇りに思うと共に、現在教室の中にいる責任の重さを強く感じている次第です。

今回の編集は同窓会長である菅野先生から多くの御意

見、御指示を頂き、私と吉田篤先生、同窓会係をしている美人教授秘書の畑中さんの三人でやらせて頂きました。編集に当たって感じたことは、文章中に数字や英語の使用が極めて多いため、次号より「ふるさと」を縦書きから横書きにしてはどうかという点と、近況報告は今後ぜひ続けて頂きたいという二点であります。

最後に、御投稿下さった先生方の中には企画や編集において御不満の方もいらっしゃるかと思いますが、微力ながら一生懸命やった点に免じてお許し下さると幸いです。

(記：Y. T-54回)

